

---

# リディア王国物語 王国迷走編

白石めぐみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リディア王国物語 王国迷走編

### 【Nコード】

N0544C

### 【作者名】

白石めぐみ

### 【あらすじ】

王都を抜け出したソルデイス王子たちは時守の里、そして自分たちを支援してくれるだろう大將軍の元へと向かう。レティア姫たちもまた時守の里を経由して自国・ロシキス竜王国を目指していた。一方、山を越えたバルガス王は迷いの森と化した時守の森を根城にしようと企んでいた。それを察知したウィルフレッドの追手……すべての目的地が重なった時、話は動き始める。

## プロローグ&人物紹介(前書き)

リディア王国物語の第二章部分です。先に王都脱出編を読んでもらえると内容がわかりやすいと思います。

## プロローグ&人物紹介

時森の預言書 より

時守は女神の思惑により3つに分けられた。

一つはすべての人の運命を司る・星替ほしかえ

一つはすべての時の行き先を司る・時変ときかえ

そして、確定した時を司る・時見ときみ

彼らは時流を母としてこの世界に生を受ける。

その理が覆ったとき、星は騒乱を迎える。

リディア醜聞記 より

バルガス王の時守虐殺

バルガス王がまだ王子の頃、一人の過去見があらわれ、王に進言した。

王子妃が産んだ王子のうち2人が王子の子供である、と。

怒ったバルガスはその場で占い師を殺したが、その疑惑は晴れず、

再度時守の里より過去見を呼んだ

再び現れた過去見も王妃の生んだバルガス王子の王子は2人だと告げる。

しかし誰が自分の子供でないのか見てもらおうとすると、過去見の力は失われた。

2度、3度と繰り返すが結果は同じ。

バルガス王は視点を変え、第二王子をその場に呼び過去見と星見に問い掛けた。

「この子供は私の何番目の息子だ？」

二人は答える。

「この方は2番目の王子です」

バルガス王はその言葉を聞くと、2人を虐殺した。

(中略)

ソルデイスが行方不明となったのを時守の仕業と決めた王は全軍を率い、時守の里へと向かった。

戦う術を持たない里の者達は繰り出される刀に倒れ付す。

そこに男・女・大人・子供の区別はなかった。

その悲劇は時守を統べる予知見さきみの姫と降臨した時見が発生させた『惑わせの霧』により森が封鎖されるまで続いた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

人物紹介

《リディア王国》

ソルデイス・エンデドルグ・リグア・エリフアイド 13歳

大国リディアの王子。唯一、王位継承権を持つ。13歳になったばかり。

様々な力を持つがゆえに自分の心をひたすら隠す。騒乱の星を持つ。

クラウス・ガリユーゼ・ログア・エリフアイド 16歳

大国リディアの王子。王位継承権を持たない。苦労知らずの王子。王位につく事より剣の道に進みたいと思っている。

サイラス・ジエラルド・ログア・エリフアイド 18歳

大国リディアの王子。王位継承権を持たない。偽りの王子。実はウィルフレッドの息子であるが本人は知らない。

シエリルファーナ・マジエスト・ログア・エリファイド 9歳

ソルデイス達の妹。王位継承権を持たない。

明るく天真爛漫で兄たちの心の癒しとなっている。

バルガス・エルスフィールド・ログア・エリファイド 49歳

ソルデイス達の父親。リディア国王。王位継承権を持っていない。

王位継承権を持たない自分から生まれたソルデイスの出生を疑っている。

現在僅かな侍従や側近と共に逃亡中。

ソフィア・レネ・エリファイド 37歳

リディア国王妃。バルガスの妻でソルデイス達の母親。

元々はロシキスの王女で、レティア達の父の従妹に当たる。

王に見捨てられ、現在ウィルフレッドの元にて軟禁中。

ウィルフレッド・ディナラーデ・ログア・エリファイド 33歳

バルガスの甥。諸事情により、15歳の時、王都へと引き取られる。

ソルデイスの誕生日の宴の最中に内乱を起こし、王位につく。

アルフレッド・アーシア・レネファランド・リグア・エリファイド

28歳

光姫と呼ばれる運命を持つ姫。ウィルフレッドの妹。

無理矢理バルガスの愛妾にされそうになっていたが何とか切り抜けてきた。

ソルデイスの信奉者で、兄の起こした内乱をよく思っていない。

精霊族でもまれなアーネル（精神バランスにより身体が変わる両性具有者）である。

常は女性体で過ごしている。16歳で時が止まっているので『少女』の容貌。

ルアンリル・フィーナ・エディン 16歳

精霊族を束ねる聖長。ソルデイスの養育係。クラウスの恋人。

精霊族によくあるフィネガ（年齢により性別を得るといふ両性具有者）であり、未だ性別は未定。

ウィルフレッドやアーシアの従妹。

現在、王子達の行方を知る人物として王城の捕囚となっている

フェルスリユート・ガジェット 29歳

ロシキスの王子たちを逃亡させる命令をつけた人物。

ガイフィードの配下。出生に秘密あり。

フランシエンド・ガイフィード 65歳

リディアの大將軍。現在リディア王国東北部、ロシキスとも近いところに駐留中である。

王都にいったまま戻らないフェルスリユートを心配している。

スターリング・キャレット 13歳

精霊の森の近くの集落に住む少年。親を早くに失い、叔母夫婦に引き取られている。

森の周りに点在する集落で手伝いみたいなことをして収益を得ている。

《ロシキス竜王国》

ルミエール・フィネア・ローティア 13歳

ロシキスの王女。ソルデイスが好き。

足手まといにならないようにフェルスリユートとレティアに剣を習っている。

レティア・リストラル・リィカウル・ローティア 13歳

ロシキスの王の義娘。ロシキス前王の娘。王位継承権を持つ。  
国竜・ルシルヴィリアを操る竜騎士。ソルデイスの幼馴染で悪友。

ヘンリー・アルバルト・レイッド・ローティア 5歳

ロシキスの王子。ルミエールの弟。王位継承権を持つ。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

### 専門用語

### リディア王国

世界と同じ名を持つ国。和なる女神の補佐の血を受け継ぐ。  
大地の恵みと神々の恩恵を受け、栄えている。

### ロシキス竜王国

リディアの隣国。農地の乏しい山地に位置している。  
その昔、リディアより竜騎士の一族が離反し、建国した。

### 光なす黄金・見透かす心

リディアの王位継承権の必須条件。  
光なす黄金リクア・ヴェールは髪の色。夜の闇の中でも煌めく髪を意味する。  
見透かす心エンテレバシスは、能力。読心力である。

### 竜緋石

ロシキスの王位継承の必須条件。  
特殊な血液で、力無き者や邪悪に染まりし者が触れると灼かれる。

### 星王

リディア王国の王の別称。

聖王

リディア国王の精神を支える者の別称。  
精霊族の名家・エディン家に生まれる事が多い。

聖長

精霊族の族長の別称。聖王以外から選ばれる。

光姫・森の精霊王

『真王』を選ぶとされる者。今は光姫アイシヤしか見つからない。

聖司族

魔法を使える理力を持つ一族。

精霊族・一角獣族・竜族などが上げられる。

理力魔法

己の中の理力を利用し発動する魔法。理力の量により強い魔法が使える。

精霊魔法

精霊と契約して使う魔法。理力は必要としないため聖司族でなくとも使える。

時守ときもりの民

時を見る過去見・予知見さねみと運命を見る星見ほしみ、世界を見る遠見とほみ・物見ものみなどから構成される異能一族。

ある事件をきっかけにリディア王家と袂を分けている。

星替ほしかえ

自分が触れた人間や物が辿る運命を変えることが出来る唯一の者。

時見<sup>ときみ</sup>

過去のすべてを見ることと、ある特定の未来を見て定めることが出来る唯一の者。

彼がみた未来はたとえ星替<sup>ほしかえ</sup>や時変<sup>ときかえ</sup>であっても替えることができない。

## プロローグ&人物紹介（後書き）

第二章がやっと始まりました。

まだまだ話は長く続きますのでよろしくお願いします。

## 第一話：精霊の森へ

旅を始めて1週間が過ぎようとした頃、一座は鬱蒼と茂る木々を有する森の傍に辿り着いた。

森の名は『フェレナフォード精霊の森』、リディア王国の中で最大の森であり、それ以上に特殊な能力を持つ森として有名であった。

「さて・・・この森を直線で進むか、迂回するかが問題だねえ」  
馬車道を有しているものの、どことなく薄暗く道の先も読めない森だ。何よりもこの森には人を食う獣や、山賊・・・そして人を惑わす精霊まで出ると聞いている。

だが目的地である時守の里に向かうにも、支援者になってくれるだろう大將軍・ガイフィードに逢いに行くにもこの道を通ると通らないのでは有に10日の差が生ずる。

「僕たちの馬車だけなら、なんとか通れると思うけど・・・一座全体を守ることはできないし」

ソルデイスはそういうと10以上の馬車で構成された一座を見渡す。

目に見える風景では先ほどから踊子の一人がクラウドの腕を抱きしめ、自分の胸を押し付けている。嫌がりながらも顔を紅くする姿が純朴に見えるのか、他の踊子たちは助けようともしていない。

「迂回したところで街道には要所要所で関所があるっていう。あんたやサイラス王子みたいに完璧に変装しているわけじゃないクラウド王子はばれる可能性が高いよ」

ただでなくてもクラウドは父親そっくりな顔立ちをしている。その鬨達で明るく王子らしくない雰囲気のお陰でなんとか誤魔化せてはいるが、知っている人が見れば一発で王子だとばれるだろう。

「森の精霊魔法は使えるかい？」

グランテの問いにソルデイスは「はて？」と考え込んだ。

炎と闇の精霊とは契約を交わしているが、森の精霊というものは

見たことすらない。ちなみに水の精霊とは相性が悪く、風の精霊は契約を交わしたものの、気まぐれな彼らが力を貸してくれるかは未知の確率だ。

「たぶん・・・契約してないから無理だと思う」

ソルデイスは今まで、ルアンリルが来る前から支持している『剣や魔法の師匠』が呼び出してくれた精霊と契約を交わすという方法を取ってきた。自分で契約をしていない属性の精霊を呼ぶなんてことができない。

「おい、どっちの道にするか決まったのか？」

なんとか自分で女性を振り切ってきたクラウドスがグランテとソルデイスの会議に加わる。

その後ろにはめつたに馬車の中から出てこないサイラスもついてきていた。

「この危険な森を抜けるべきか、どうか・・・」

「ああ、ここ山賊出るからなあ・・・」

サイラスの呟きにクラウドスが小さく返す。

「獣や森の精霊もでるだろ？」

山賊限定で話すクラウドスにグランテは呆れるように付け加えた。

だが彼はきよとんと彼女を見返すと、次に「ああ」といいながら手を打った。

「俺、この森の精霊の一番上の人と知り合いだから、獣は出てこないぞ」

会議をしていた3人だけではなく一座全員の瞳があっけらかんと発言したクラウドスを凝視した。

「精霊と・・・契約？」

呻くように言うサイラスに「そういう感じかな？」とクラウドスは肯いた。

「前に修行の旅に出たときにこの森の奥で野宿をしてたら急に現れてさ、なんか難しい話をした後に俺と俺の連れている人間には『この森の恩恵を受ける獣や精霊は一切襲わない』っていわれた」

『そういうことはさっさと見え』と思わないでもないが、彼がそれを余り特別なことと認識していなかったようなので3人はぐつと怒りを飲み込んだ。

「ちよつと待つてるよ」

クラウスはそういうと休憩している一座を残して近くの茂みを掻き分けて入っていく。

それから数分後、彼は手にいくつかの木の実を持って現れた。

「ほい、これを馬車に乗せておけば俺と旅をしているって分るらしいから・・・と言っても今回限りだと言ってる」

手に乗せられた木の実を見ながらグランテは顔を引きつらせた。

とりあえず、これでまた当分の問題は消えた。

追手達もこの森を団体が通るとは思わないだろう。まして王子たち4人だけだったとしてもこの森を抜ける道を選ぶとは思うまい。

グランテはもう一度、手の中の木の実を見ながら、

「本当に、あの悪の塊みたいな男から面白い王子たちが生まれるもんだね」

と呆れ声で呟いた。

## 第一話：精霊の森へ（後書き）

闇と炎の精霊と契約を交わしているソルデイスと森の精霊と契約を無意識で交わしているクラウス。  
使い物にならない父親から生まれた割になかなか使い勝手のいい王子たちです。

## 第二話：山賊たちとの一戦

クラウドスから貰った木の実をそれぞれの馬車に乗せた一座は森の奥へと進み始めた。

辺りは獣の匂いが充満しており、小一時間もしないうちにその姿を確認することが出来る。だが獣たちは一座を眺めると鼻先を変え、すぐに姿を消してしまった。

「これほど楽にこの森を抜けるなんて初めてだよ。ありがとよ」  
出口が近づく頃、グランテは先頭をいく馬車から馬でクラウドスの元まで来て感謝の意を述べた。

クラウドスはそんなに感謝されることなのだろうかと思ったが、とりあえず「どういたしまして」と返す。

「それよりも、この先まで行くと今度は獣より人間が出てくる。そっちの方が厄介だ」

クラウドスが一人で旅をする際、もっとも気をつけたのはそちらの方だった。

地元に根付き、統率の取れた山賊はまだよい。通行料みたいなものを払えば彼らの縄張り内での安全まで保障してくれるし、荷駄を荒らすような真似はしない。

まずいのは3〜5人の男たちが流して行っている山賊達だ。彼らは森の獣を相手に疲弊している隊列に横からつつこみ荷物を奪うだけでなく、男は皆殺しにし、女は連れ去り、子供は奴隷商人に売り払う。

もちろんクラウドスはこういう輩をすべて取り討ちにしてきたが、偶然に彼らの仕事の痕跡を目の当たりにすることも多かった。

「ああ、そうだね。おい野郎ども、剣の準備しな。王子たちも戦闘になったら踊り子たちと自分の身は守ってくれよ」

あくまでも自分の一座の踊子を優先にするグランテに王子たちは苦笑した。

先ほどから自分たちの隊列を監視するようについてくる人の気配がする。もうすぐがけ側の木々が途切れる場所がくる。そこを狙って駆け下りてくるのだろう。

剣を持つ男達の肩に力が入った。

クラウスは馬車の手綱をサイラスに任せると用心棒の男たちに馬を借りた。ソルデイスが荷台に隠しておいた槍を手渡すと、彼はにやりと笑って隊列の前に出た。

突然現れた馬影に山賊たちは慌てて駆け下りてくる。

クラウスはにやりと笑うと、槍を振りかぶり激しい嘶きと共に駆け下りてくるその馬の足元に投げつけた。

勢いを持った槍は先頭で駆け下りてくる馬の足元に命中した。驚いた馬は身体を振りもんどりうって転倒する。

それに巻き込まれる形で後ろの馬達も次々に暴れ始め、馬上の間を振り落とした。

振り落とされた人間は斜面を転がりながらも近場の木を掴み、無防備なまま隊列に突っ込むのを静止している。

「お、案外、丈夫だな」

馬から振り落とされた男たちも次々に剣を抜き放ちこちらに近づいてくる。

「総勢18人か、大所帯だけど・・・流し、だな」

こういう時の勘が外れたことがないクラウスの言葉どおり、男達には微妙に統率感がなかった。

彼の言葉を受けて、用心棒たちも剣を抜き放つ。彼は誰よりも早く敵の一人の胸元に突っ込むと鋭い太刀筋で咽喉筋を切った。

「死にたい奴からかかってこいよ」

紅い血を浴びながら笑って見せたクラウスに血の気の多い男たちは我れ先にと切りかかる。

道を外れた場所では、上で馬を下りた男達が木々をつたい、馬車のほうへと降りてくる。

「弓、貸してっ！」

ソルデイスはシェリルファーナの手からそれを受け取ると続々と降りてくる男たちに向かって矢を放った。

用心棒たちは、ソルデイスの矢から逃れた山賊に太刀を揮い、隊列を守るうとしてしている。

「きやあつ！」

突然、後ろから響いた悲鳴に全員の意識が向く。

見ると血みどろになった男がシェリルファーナの腕を掴んでその咽喉元に刃を当てていた。どうやら用心棒が倒した一人が絶命しておらず、馬車の陰に隠れながら移動し一番力の弱そうな彼女を人質に取ったようだった。

「武器を棄てろっ」

その言葉に全員が視線を交わす。

「棄てろって言うのが聞こえねえのか？」

「つつつ!!!」

自分の首元を感じる刃の冷たさに彼女の目に大粒の涙が浮かんだ。ソルデイスはふうつと息を吐くと手にしていた弓を落とす。それに習うようにクラウスも剣を下に置いた。小さな女の子を死なせるのは億びないと思ったのか用心棒とグランテまでもが武器を棄てた。

「よおし、よくやった」

にやりと笑った男が残った4人の仲間に武器を拾わせるための指示を出す。

「.....??」

ソルデイスはその男の向こうの空に見える白い物体に首を傾げた。それはものすごい速度でこちらに近づいてくると、その優雅な足で男の横つ面を蹴った。

無様に転んだ男の腕からシェリルファーナは慌てて逃げ出す。男も逃がすまいと腕を伸ばしたが、その腕が彼女に届く前に冷たい刃が自分の咽喉下に押し付けられた。

「僕の妹にその汚い手で触らないでくれるかな？」

冷たい口調とそれ以上に鋭い視線をソルデイスに向けられた山賊

は、まるで魔性の者でも見たように震えた。

彼は恐怖で動けなくなっている男の咽喉を、一瞬にして切り裂くと何事もなかったかのように立ち上がった。

振り返ると他の男たちもクラウス達の手によって切り捨てられていた。

ソルデイスは剣についた血を払い、鞘に収めると先ほどから目の端に入る妹を助けてくれた存在を再び見た。

何者にも汚されていない白い体躯を持ち、その背に白い翼を持つその馬は穏やかな息を吐きながらシエリルファーナに懐いていた。

「天馬・・・神馬・・・？」

ソルデイスの呟きに、馬車を止めたサイラスが「そうみたいだね」と返した。

二人が揃って妹の傍に近づこうとすると、その馬は近づいてくる彼らへと視線を向ける。

まずは、ソルデイス・・・そしてサイラスへと視線を動かした馬は、うなるようにサイラスへの威嚇を開始した。

「やっぱり、神の馬には・・・呪われた者のことがわかるか」

誰にも聞き取れないように小さく呟いたサイラスは、踵を返すと遠巻きに見ているグランテのほうへと行く。

ソルデイスは神馬と兄を見比べ、自分も同じように踵を返し兄の腕にしがみ付いた。小さい頃から自分が傷ついている時にしてくれる弟の優しい仕草にサイラスは小さく笑って見せた。

## 第二話・山賊たちとの一戦（後書き）

クラウスは剣の修行に一人で出かけてしまっぐらいに自由奔放で好戦的な部分も持っています。

もう少し話を続けようかと思いましたが、神馬の名前がまだ決めていないことに気づいて断念。次の更新は月曜日です。

### 第三話：王女の神馬

突然現れた白い異形の馬の存在に踊子たちも驚いてこちらを見ていた。

だがその馬はシェリルファーナとソルデイス以外の人間が近づこうとすると低くうなり、威嚇する。

「神の馬は穢れが嫌いだっていうからねえ」

グランテの言葉にサイラスの肩が揺れた。彼女は目を眇めて彼を見ると、少しだけ同情するような表情をした。

しかし彼に気がつかれる前にいつもの人の食えない表情に戻す。

「あんたたち、折角綺麗な顔と服を着ているんだからあの汚い男達の血をいつまでもつけてんじゃないよ」

見るとたしかに、ソルデイスの全身は最後に殺した男の血にまみれていたし、サイラスの格好も所々泥や血の後がついていた。

すでに他の男たちは上半身裸になり、豊富な水で自分についた血を流している。

「じゃあ、遠慮なく水を頂戴します」

替えの服を持ち水を浴びに行くと、男達は顔を紅くしてもごもごと何かを言い始める。だが、二人が男だということを思い出すと一つの咳払いでごまかした。

先に水を浴びてさっぱりとしたクラウスはすたすたと妹がいる場所へと近づく。周りは唸られるのかと思っていたが、予想に反して馬は彼に向かい深深と頭を下げた。

「クラウス兄様、この子ルシェラーラ・シェリンって言うんだって」  
ルシェラーラシェリン  
「光輝く翼」とは上手くつけられた名前だ。

彼は変なところで感心しながら目の前に垂れた馬の鬣の部分を優しく撫でる。

「妹を助けてくれて、ありがとう」

クラウスが礼を言うるとルシェラーラは一つ嘸きをあげた。

「それでね、この子。私といっしょにいるって言うの」

シエリルファアーナの無邪気な言葉にクラウドスは頭を痛める。

ただでなくとも目立つ一段にこれ以上目立つモノを入れることは得策とは言わない。

グランテを見ると、彼女は肩を竦めてこちらの状況を静観している。兄弟内の問題は兄弟内で解決しろということなのだろう。

暫く逡巡しているとクラウドス達の元へと水浴びを終えたソルディスが近づいてきた。

「翼を仕舞い、その身体の色を茶色に変えられるならいいよ」

無理難題とも取れるソルディスの言葉にルシエラーラは不満そうに咽喉を鳴らす。

しかし、その視線が動きそうもないと解かると仕方なさそうに首を下ろして、優雅な白い翼をしまった。それと同時に光り輝くほど白い馬体が毛艶のいい茶色へと変化した。

「シエリル、君の馬だ」

ソルディスが身体を変化させたルシエラーラを指差すと、シエリルファアーナは満面の笑みでソルディスに「ありがとう、兄様」と抱きついた。

ほのぼのとした兄妹の姿に回りは明るい笑みを見せていたが、グランテだけが険しい顔をしていた。

「ちょっと・・・いいかい？」

「なあに。グランマ」

この王子は笑っていないと雰囲気が変わる。王のテラスで見た彼とこの冷たい彼とを一緒にの人物だとわかる人間など少ないだろう。

だからこそ、ちゃんとしなければならなかった。

「あなたたちはいつまで本名で過ごすつもりだい？」

もうすぐ隊列は森をでる。そうすれば暫く町の中を進むこととなる。そんな中で名前を使ったらディナラーデ卿に居場所を教えるよ  
うなもんだよ」

グランテの忠告にソルディスはぼんつと手を打った。確かに王家

特有である名前を使えば一発で出自など知れてしまっただろう。

「あ、俺、すでに偽名と通行証持ってる」

クラウスはそういうと常に身につけている袋の中から小さな書類を取り出した。

「グレイ・エイシエス？また、とんでもなくありきたりな名前を付けたもんだ」

通行証に記された名前にグランテは鼻を鳴らした。

ただこの通行証はかなり役に立つ代物だ。これだけで戦が始まる前から一般人であることを示すことが出来る。そしてその兄弟も一般市民であると証明させるには十分な内容だった。

「それじゃ、僕はサディアとでも名乗るよ。サディア・エイシエス、響きも悪くない」

サイラスは昔読んだ英雄記の主人公の名前を言った。

その物語の主人公は様々な困難に立ち向かいながらも人々を困窮から救うのだが、最後に権力者の命令で『精霊の神殿』を破壊しなければなくなりその呪いで死んでいくという悲劇の人物だった。

他人のために穢れ、それゆえに呪いで死んだ主人公が可愛そうでシエリルファーナはあまりその話が好きではなかった。

「僕は、ソリユード・・・知り合いの名前だ。ソリユード・エイシエス」

「ちよつと、それ・・・」

ソルデイスの名前に難色を示したのは以外にもグランテだった。

しかし彼は視線だけで女座長が何かを言うのを静止させる。

「じゃあ、私は・・・」

「シエリルはシエリルのままでいいよ。それで普通の名前だ」

長い名前と呼ばなければ『シエリル』は一般的な女の子の名前だった。クラウスのその発言にサイラスとソルデイスまで肯いている。

「ルシエラとか、ルーフィとか考えてたのに・・・」

ぼつりと呟くシエリルファーナの姿に全員が噴出した。明るい雰囲気になったところでグランテは号令をかけた。

「さあ、今日中に野営の出来る場所まで移動するよ」  
こんな襲つてくださいとばかりの場所はさつさと去るに越したことはない。

その言葉を聞いた一座の面々は急いで出立の用意をすると、馬車を進ませ始めた。

馬車の音が遠くなった所で男は身を起こした。

森の中でソルデイスの矢に射貫かれた後、仲間の死体の影に隠れてすべての内容を聞いていた。

(俺にも、ツキが回ってきたぜ)

仲間が全部死んだことなどどうでもいい。元々流れの山賊がとりあえずの形で集まっただけの烏合の衆だ。

それにしてもあの一座の中に王子たちがいると解かった時、本当に興奮した。

デイナラーデ卿側の人間たちは必死になってソルデイス王子たちを探している。もしこの情報を彼らに齎せばたつぷりの謝礼が貰える事は間違いない。

彼は山腹にくくりつけてある無傷の馬の所まで行こうとして男は足を止めた。木々の向こうに人影があった。

(やつらか?)

一座は全部去ったと思ったのに、生き残りをすべて排除するためにも残しておいたのかと思った。

しかしその人影が13歳ぐらいの子供で、更に言えば明らかに一般階級の人間であることがわかり、男は考えを替える。

(ちょうどいい、王都までの路銀を少し稼ぐか)

自分ひとりではこの森を抜けるのは無理だ。だが遠回りしていくにも路銀はあまり足りていなかった。

もちろん仲間の死体から財布を頂くつもりではいたが、金はある

ことにこしたことはない。

「小僧、金をだせっ！」

少年は突如として現れた男に目を丸くした。

それから自分の抱いていた荷物を大地に置くと、自らの胸にかかった守護符に手をかけ何かを祈る。

その首飾りの美しさに男は目を奪われると更に口角を奇妙に持ち上げた。

「よおし、持ち金を全部地面に置け。ついでにその綺麗な装飾品も外せ」

しかし少年が荷物を置いたのは男に与えるためではなかった。少年は自分の腰に携えた剣を抜き放つと静かな動きで男の間に飛び込み、その胸を叩ききった。そのまま驚く男を地面に転がすと、その咽喉も切る。

飛び散る血が、少年の顔や服を濡らすのを彼は不快な感じてすばやく拭った。

「おつかいの途中で、邪魔しないでくださいね」

少年は変に丁寧な口調でそう告げると、荷物を持ち上げた。もう一度、自分が殺した男を確認し、静かに頭を下げた少年は顔色一つ変える事無くその場を去っていった。

### 第三話：王女の神馬（後書き）

シエリルファーナは世間知らずですから少し人の機微に疎いです。逆にソルデイスは過敏なぐらいに反応します。

最後に出てきた少年はまだまだ先にしかでてきませんが、物語の鍵を1本以上持っています。

## 第四話：森の中の疑惑

大方の関所を抜け、南北に連なる街道に出たところでレティア達は馬車を降りた。

アブシヤリード達は少女たちを心配したが、彼らにこれ以上迷惑をかけるわけには行かない。

第一、南に向かうレナルドバードの馬車が、東北に位置するロシキスに向かったらそれだけで目立ってしまう。

「それでは、ありがとうございました」

丁寧な礼を言う王女に、彼は「父君によろしく」と軽く返すと馬車を出立させた。

「これから、どうするんだ？」

端的なレティアの問いかけにフェルスリユートは王都を抜けてからずっと左手に続いている森を指差した。

「この森を突っ切る。もちろん、街道は使わずに行くつもりだ」

示された森と、その内容にレティアは眉間に皺を寄せた。

また裏をつく作戦だがはつきり言って危険度は今までのものより高すぎる。彼の示す内容を解かっているイルミエールとヘンリーはその言葉に従って森の中の説明を受けようとしている。

「とりあえず、これ、みんなつけて」

出されたのは緑色の石で出来た綺麗な護符だった。それが森の精霊の護符であることに気づいたレティアは驚いたようにフェルスリユートを見つめる。

「レティア姫は気づいたみたいだけど、これは森の精霊石っていう特殊な石だ。これさえつけていけば獣は襲ってこない」

緑色の輝きはきらきらと光り、その存在を主張している。

「俺の地元の名産品。俺の村ではそれを拾っては森に届けて祈ってもらい、それを旅人に売るのが商売にしているんだ」

その証拠に、というわけではないがフェルスリユートは腰の袋の

中からまだ残っている精霊石を何個も取り出す。

「アブシャリード候にも5個ほど買ってもらった。お陰で路銀も稼げた」

叩いて見せた袋にはそこそこのお金が入っているようだ。どうやらそういうことをやりながら、貴族達とのネットワークを広げてきたらしい。

「とにかく、森へと行きましょう。いつまで経っても街道にいたら、いつ見回りの兵がくるか知れませんが」

ルミエールの的を射た言葉にレティアは肯くと、フェルスリユートから護符を受け取り自分の首へと掛けた。

森は今まで見たどの森よりも緑が深く、何か神秘的な空気に満ちていた。

ロシキスも山岳地だから森があるにはあるのだが、それとも感じが違った。

「これから1週間以上森の中での野営となるから、絶対にその護符外さないでくださいよ」

フェルスリユートは出来るだけ人しか通れない道や、見つけにくい道を選択して森の奥へと歩く。

「盗賊はでないのか？」

こつこつ森には盗賊がいるものと教えられてきたレティアが聞くと、彼は胸を張って大丈夫だと太鼓判を押した。

「精霊の森で血を流す真似をすればどうなるか、ああいう輩だって知ってますよ。だから出るとしたら森の出口、精霊の守護範囲が切れた辺りで出てきます」

フェルスリユートの言葉を傍で聞いていたヘンリーが恐ろしさに震えながら、彼の手を握った。

王子はこの何を考えているのか読めない男を殊のほか気に入って

いた。どこか兄としての包容力を感じさせてくれる彼を信頼しているようにもある。

「大丈夫ですよ。王子の身は守ります。ルミエール姫の分も。ただレティア姫は自分で戦ってくださいね」

「当然だな」

レティアは自分の腰にある剣を叩くとフェルスリユートの言葉に笑って返す。義弟があればほど信頼している相手だ、自分の中にある彼への不安は隠さなければならない。

悪人ではないと思う。だが腹に一物二物持ち合わせていることは確かだ。その辺りの計算高さは少しソルデイスに通じるものがあるかもしれない。

「森の反対側の街道に出て時森の里の傍を抜ければ、ロシキスとの国境はさほど遠くない。あの辺りには俺の上司であるガイフィード將軍も駐留しています。あの人は常に公平な人だし、ソルデイス王子とも親しい。絶対に力を貸してくれるはずですよ」

フェルスリユートは自分の上司を本当に尊敬しているのだろう。その思いがひしひしと伝わる態度に、どことなくレティアもほっとする。

ガイフィード將軍が国境付近に駐留するようになってからロシキスとレティアの関係は良好だ。もちろんそれが將軍の人柄のおかげであることは逢ったことのある自分が一番よく知っていた。

「それじゃ、もう少しした先に湖があります。その近くで今日は野営にしましょう」

空はここからでは見えないが、大分太陽が傾いているようだ。暗くならないうちに野営の準備をしなくてはならない。

フェルスリユートはヘンリーを抱き上げると、先ほどよりも歩く速度を上げて弥栄の場所へと移動を開始した。

#### 第四話：森の中の疑惑（後書き）

とりあえずソルデイス達が森を出たのでロシキスの王女たちに森に入ってもらいました。

ただ時系列として森に入ったのはレティア達のが先だということに今更気づきました。

やばいです。レティア達は街道にでてすぐ分かれたというのに、ソルデイス達は森に入るのに一週間かかってますからね・・・ただロシキスの王子たちから始めてしまうと誰が主人公なのか怪しくなるという懸念もありますし、少しぐらいの時間のズレには目をつぶってください。

## 第五話：光姫からの情報

ルアンリルは拘束された自分の腕を見た。

魔術師専用の特殊な拘束具は理力魔法はもちろん精霊の召喚すらできないようになっていているらしい。何度も自分と契約している炎の精霊たちの名前を呼んでも反応がない。

あれから幾日があったのだろう。

未だに王子たちの行く先や、どうやって敵戒態勢の関所を抜けたのかを聞いてくるということは王子たちは無事に王都を出たということだ。

頭のいい彼らの事だから今頃はソルデイス王子の理解者でもある大將軍・ガイフィードの元へと向かっているだろう。

それにしても捕まえられている魔術師は思ったよりも少ない。

すべて死んだのか、それともウィルフレッドに寝返ったのか・・・

(いや、寝返ったというのは少し言いすぎか・・・)

ルアンリルの部族たる精霊族を始め翔龍族、一角獣族ユニコーンなどの聖司族はもとからバルガス王を王とは認めていない。

継ぐ者がおらず、王座を空けておくわけにはいけないという貴族達の願いからとりあえずの代理人として置いておいただけであり、あくまでも正しい嫡流はウィルフレッドの父・アルガス、そして正しい王位継承者はソルデイス王子としている。

そのバルガスが自分が崩御するまでの王位を望んだことが今回の内乱の発端というのなら、これは裏切りではない。

もし彼が魔術師たちからの支持を失うとすれば、それはソルデイス王子の処刑を行った時である。

(従兄上おにいさんがそれほど馬鹿だとは思いたくないが・・・)

知らず知らずのうちに、また彼のことを従兄上おにいさんと呼んでいる自分がおかしかった。

苦笑をしていると遠くでぎいっと言う扉の開く音が聞こえた。

誰かが階段を下りてくる。また王子の居場所を聞くための官吏が降りてきたのだろうか。

薄暗い影しか見えない階段を睨みつけていると、明かりがゆっくりと周りを照らした。

「アーシア姫……」

姿を現したのはウィルフレッドの妹姫だった。ルアンリルの知っている彼女より少し痩せたように見えるが、余り変わらない容姿をこちらに向けている。

「ルアンリル」フィーナ、やっと逢えた」

彼女はルアンリルの牢に近づくと少し薄汚れたルアンリルの顔に悲しそうな表情を浮かべた。

「お兄様はどうして……ルアンリルは私の事でもがんばってくれていたのに……それにソルデイス王子にまで追っ手を放つなんて自分の指先が汚れるのも気にせず、彼女の指がルアンリルの顔を拭き続ける。」

泣きそうな顔で自分の顔の汚れを落としている彼女を、ルアンリルはただ呆然と見ていた。

が、彼女の言葉に何かを感じ、自分の顔を拭くアーシアの手首を捉えると問いただす。

「王子たちは捕まってるんですね」

「はい、今の所、王族で捕らえられているのは王妃様のみです」

アーシアは声を潜めながら、ルアンリルに現状を報告した。

「お兄様や諸侯たちは現在二手に分かれて搜索を開始しています。」

陛下とサイラス王子は山を越えるルートを取っただろうとして精霊の森の北側を、そしてソルデイス王子たちはロシキスの王女たちと逃げているだろうと踏んで精霊の森の南側と迂回ルートへと検問を張ったり旅芸人たちの馬車をくまなく搜索したりと、とにかく死に物ぐるいで探しています」

アーシアの報告にルアンリルは小さく北鼠笑んだ。

兄弟4人が一緒に逃げていると思われていないなら好都合だ。そ

れだけ彼らの判別がつきにくくなるだろう。

「ただ今回の捜索から以前までバルガス王の傍に仕えていたものが参加すると・・・そうなれば王子たちがどのような格好をしていると見つけられると息巻いていました」

続いて出てきた王子探索のための貴族の名前を聞いて、ルアンリルは眩暈を覚えた。オーランド卿を始めその面々はかつてバルガス王の取り巻きとして名をはせた人物ばかりだった。

「ルアンリル・・・私は必ずこの鍵を手になれます。そうしたら彼らを守るためにむかつてくださいますか？」

「もちろんです」

言われなくてもそうするつもりだった。ルアンリルにとり、彼らは守るべき主君なのだから。

そして目の前にいる少女も自分と同じようにソルデイス王子を主君と仰いでいるようにルアンリルには見えた。

「もうそろそろお時間です、アーシア姫」

階段の上のほうで焦るような牢番の声がした。

アーシアは床に置いたランプを再び手に取るとルアンリルを振り返る。

ルアンリルは無理をしてこの牢に来てくれた従姉に深く頭を下げた。

## 第五話：光姫からの情報（後書き）

ルアンリルは拷問等は受けていません。仮にもウィルフレッドの従弟妹ですから。ただ尋問は毎日受けています。

ちなみに他の牢には数人閉じ込められている魔術師等がいるはずですが、彼らはこの会話をどのように思っているのか……書くことはないですけど、気になるところです。

## 第六話：呪われた王子

一座は森を抜けると適当な場所に野営の準備を開始した。

10台以上の馬車を有する大所帯である。ご飯の準備も大賑わいだし、食べ終わったとしても踊り子たちは興奮して踊り出す始末だ。そんな騒々しい食事の片づけが終わり、踊子たちも含めて全員が眠りについたのは深夜を回った頃だった。

サイラスは眠れなくて馬車の外へと出た。

月明かりがあたりを白く染めている。月の光が強くとも無数に見える星たちは、自分のこの呪われた身を極小さなものと改めて認識させてくれるようだ。

「やあ、サディア」

急に声をかけられて振り返るサイラスにグランテは笑いながら近づいてきた。

「ちょっといいかい？」

有無を言わせない問いかけに、彼が諾とすると彼女はさっさと馬車から少し離れたところまで王子を導いた。

「どのような御用でしょうか」

二人でそこにある切り株にそれぞれ座った所でサイラスはグランテに問い掛けた。

彼女はじいっと彼の顔を見た後、一つため息をついた。

「あんたは自分が時守の里に入れないことは知っているのかい？」

その問い掛けに、サイラスの肩が揺れた。彼は視線を地面に落とすと「はい」と小さく答えた。

「神馬に唸られるほど、僕は呪いに満ちていますから」

自分の掌を見てみると罪もない人の血で濡れているように見えた。いつも見える幻覚・・・小さい頃から背負わされた自分の罪。

「僕が初めて人を殺したのは7歳のときです」

彼はやけに落ち着いた声で告白をする。その表情はまだ成人に満

たない少年のものではなかった。

「見知らぬ人が縛られていました。僕は小さな剣を握らされてその上から誰かの手がそれを押さえつけて、刃は縛られた人の首に当てられました」

覚えているのは泣き叫ぶ自分の声。

『いやだ』と『怖い』と叫んでいるのにそこにいる大人は誰もそれをとめようとはしなかった。

縛られていた人物は最初、恐怖でこちらを見ていたが・・・やがて泣き叫ぶサイラスに小さく微笑み、その瞼を閉じた。

「紅い生暖かい飛沫が僕の身体を汚していくのを恐ろしいモノとして覚えています。そして紅い情景の向こうに見える父上の笑う姿を、鮮明に覚えています」

縛られていたのは父の元に売り込みに着ていた占い師だったと思う。彼は3人の王子のうち一人はバルガスの子供ではないと告げた男だった。

「殺したのは時守の民だったそうです。殺そうと思ったけど時守の呪いを恐れて、誰も殺せず、ならばと僕に刃を握らせて殺させたそうです」

全身を覆った紅い血は自分にかかった呪いの証だ。時守は小さな能力しか持たない者でも自分を殺した者を呪う力があると聞いたことがある。

その後も時守の里から過去見が呼ばれるたびに自分はその場に呼ばれ、刃を握らされて殺すための道具にされた。

人を殺すたびに冷えていく心。自分が自分の持つ刃のように心をもたないものに変化してしまいたかった。

「人を殺した後、何故かいつもソルデイスに遭った。あいつは僕が人を殺すたびに僕の手を、身体を抱きしめて必死に温めようとしてくれた」

凍えていく心を温めてくれたのは彼だけだった。

穢れているからと振り払おうと躍起になっても、彼はいつまでも

自分の腕や身体にしがみついて離さなかった。まるでそこが穢れていないのだというようにずっとずっと抱きしめてくれた。

だからこそサイラスはソルデイスを王位につけようと心に決めた。こんな呪われた自分ではなく、きちんとした王位継承権を持つ清廉な彼の頭上のみ王冠は輝くべきなのだ。

「僕はこの心を人として繋ぎ止めてくれたあいつのためならなんでもやる。これ以上の呪いも、穢れも怖くはないんです」

最後に呼ばれた過去見と星見はクラウスのことを『第二王子』だといった。

これによりバルガス王はソルデイスが自分の息子ではないと確信した。それから時守の民は呼ばれなくなり、呪いを受けた自分はソルデイスの対抗馬としてすべての矢面に立たされることになった。

あの父にどんな考えがあったのかはわからないが、自分はその立場を利用してソルデイスを滞りなく王位につけるための基盤づくりに勤しんだ。

「なるほど、あんたがどうしてソリユードのために動くのか理解できたよ」

兄弟だからというだけならそこまでの決意はなかっただろう。

特に権力が絡み付いてくる場合、骨肉の争いになル事のほうが当たり前なのだ。

それなのに逃亡してからもずっとサイラスは王位継承者であるソルデイスを守ることだけに専念していた。

クラスみたいに違う道に進みたいのではなく、あくまで臣下の道のみを目指して。

グランテは大きなため息をつくときつい瞳を持つ呪われた王子に再度問い掛けた。

「それで、もう一度本題に戻ろう。ソルデイス王子が時守の里に入ろうとする時、あんたはどうするつもりだい？」

占い師としての素養を強く持つ王子ならばリディア国王家に憎悪を抱いている彼らでもその門をあけるだろう。森の精霊と契約して

いるクラウドも神馬に惚れられるシェリルフアーナも大丈夫だ。

しかしサイラスの前の門は絶対に開かれない。

自分の民を複数殺した相手を里に入れるほど彼らが寛容ではないことを彼女は知っていた。

「いざとなったら俺は姿をくまします。どちらにしるいつまでも4人で行動すること自体が危険を伴うのですから」

一気に全員捕まらないように、囿の役目も含めて自分は彼らから離脱するつもりでいた。

「そうかい・・・」

意思の硬い王子の頭をグランテは優しく撫でると彼はくすぐったそうに笑ってみせる。

「もしかしたら勝手に消えることがあるかもしれませんが、その時は弟たちをよろしく頼みます」

サイラスはそれだけ言うと立ち上がり「おやすみなさい」と挨拶をして馬車のほうへと戻っていった。

## 第六話：呪われた王子（後書き）

王都脱出編でウィルフレッドが言っていたバルガスがサイラスに与えた役目です。

自分に呪いがかからないように、サイラスに刃を持たせ部下にその腕を固定させて自分で占いをさせた占い師を殺させる。それが役目です。

この物語通じてこの話と次の話が一番重いと思います。

## 第七話：もう一つの真実

サイラスの後姿を見送った後、グランテは自分の後ろの藪へと振り返った。

「あなたは気配を消すのが上手いね、ソルデイス王子」

「ソリユード、ですよ。レディ・グランテ」

兄の気配が馬車の中に消えたのを確認してからソルデイスは茂みから出てきた。

グランテは鼻白みながら平然とした顔の王子に尋ねてみた。

「すべて聞いていたのかい？」

「すべて知っていましたから・・・」

やはり、と思う。彼は心を読むのではなく時守の里にいる『過去見』たちと同じく過去が見えるのだ。

そしてその瞳で兄のしたことを知り、『見透かす心』で兄の心の傷さえ見てしまった。

ゆえに彼はいつもサイラス王子を慰めることができたのだろう。

「過去に時守の里から過去見・星見が呼ばれたのは4回・・・最初の占い師を含めて計5回も過去を見る催しが開かれた・・・それなのに王は自分の息子が誰なのか確定できなかったのはなぜか知っていますか？」

唐突な質問にグランテは視線を険しくした。

目の前の王子は、最初に二人だけの会談をしたときと同じく泣きそうな顔をしながら笑っている。

「すべての時守の民は、僕を見ようとした瞬間、その能力を失った・・・正確に言うと僕が見られるのがいやで彼らの時守としての目を焼いてしまったんです」

ソルデイス自身の『時を見る能力』は時守の里の人間より強い。

その能力は自分を見ようとするとする他人の能力を奪うことさえ出来る。

「それに気づいたからこそ、あの男はクラウスの星を彼らに見させ

た・・・結果、あの男は僕を息子ではないと確信した」

本当に、そうならばよかったのにと何度も思った。

愛してくれない父親をずっと思いつづける苦痛をこんな風に味わうのなら・・・いつそ本当に父の息子でなければよかった。

「ただ誰よりも強い『時を見るの能力』が自分がああの子供であるか教えている。そして3人の王子のうち誰が彼の息子ではないのかを教えてください。」

グランテもバルガス王と占い師の話は知っていた。「王妃の生んだ3人の王子のうち一人はバルガス王の子供ではない」、クラウス王子は第二王子『この二つの宣言は公には発表されていないものの事情通の間では有名な話だ。』

それを知る者すべての人間がソルデイス王子は先代の王の子供だと思っっている。

(王妃の生んだ3人のうち1人・・・？真中はバルガス王の第二王子・・・！)

グランテはその宣言の中にあるトリックに気が付いた。

「・・・一つ、きいていいかい？」

「はい？」

ソルデイスはグランテにその水色の瞳を向けた。

「サイラス王子の父親は誰だい？」

本当に鋭い女性だと思う。ソルデイスは一つ息を吐くと真剣な眼差しで彼女を射貫く。

「誰かに他言したら、殺してもいいと言うなら教えます」

彼の左手が腰に携えている剣にかかっていることを確認しながら、彼女は自信を持って答える。

「かまわないよ」

それぐらいの覚悟がないと訊けない質問だ。

そしてこの王子がすべてを知っていると彼女は確信していた。

「サイラス兄様の父親は、ディナラーデ卿です」

告げられた名前にグランテは目をむいた。

今、彼らを追っている内乱の首謀者……バルガス王を誰よりも憎む男の名前。

王位継承者であったアルガス王子の第一王子。クラウスやシェリルフアーナと同じく王位継承権を持たない『ログア』ではあるが、その知性とカリスマ性は叔父であるバルガスよりも秀でている。

それなのに冷遇され、妹を後宮へと無理矢理召し上げられた上に子供まで……

「……ダイナラーデ卿はそのことを知っているのかい？」

「つい、先日知ったみたいですよ……だからこそ息子を取り戻そうとしたんじゃないですか？」

知ったからこそ内乱を起こしてまで取り戻そうとしたのだろうか。ただあの王のことだ。ソルデイスを嵌めるための布石として彼を置いておかないはずがない。そうするならば……

憶測だけがグランテの頭を駆け巡る。

「どちらにしろ、兄上は兄上です。俺はサイラス兄様が誰の子供だろうと守るって決めている。俺を守るために……」

ソルデイスはそこで言葉を切った。

そして街道へと続く道を睨みつける。何の変化もない道だ。だがその向こうに彼は何かを感じたらしい。

彼女はいやな予感を覚え、ソルデイスに確かめる。

「どうかしたのかい？」

「後、どれぐらいで一座は出発できますか？」

その問いに彼はこの場のいろんなところを睨みつけながら、逆に問いを返したのだった。

## 第七話・もう一つの真実（後書き）

ソルデイスの一人語りです。ソルデイスの持つ能力の片鱗が少しずつ露になってきます。

しかし彼の兄弟たちはまだ少しもその存在に気づいていません。

ちなみにサイラスが馬車に戻ってソルデイスがいないことに気づかないのは彼が別の場所で眠っているかと思っっているからです。

## 第八話：追跡の予告

急に出立の時間を聞かれたグランテは目を丸くすると同時に不安を覚えた。ソルデイスが無駄なことを訊いてくるとは思えない。

彼女は素早く時間を計算し始める。

「どう早くやつても1時間後だね」

「・・・やっぱり・・・」

ソルデイスは下唇を噛むと、拳を近くの幹にぶつける。

「どうして、この能力はこうなんだ。替えられない状況になってからの未来なんて見えたってしょうがないのに」

小さく・・・誰にも聞かれないように唸りながら彼は必死に自分が見える未来を検索する。

だが『確定した時』しか見えない目には他の未来は決して映らない。

「いったいどうしたんだい？」

焦っている少年王子を心配して声をかけてくるグランテに彼はまるで過去を話すように断言する。

「後、1時間後ここに王子達を探索する部隊が到着する・・・」

その言葉を受けて当たりの気配を探ってみるが、そんな予兆はどこからも感じられない。あたりは深い闇の帳に包まれていて、時折遠くを通る馬車の音が風に運ばれて伝わってくるだけだ。

「来るのはオーランド卿・・・父上を捕まえられなかった汚名を返上するために山を越えるルートで街道を洗っている」

いったいどういう風景が見えているのか彼女にも不明だったが、少なくとも普通の予知見・星見が見るような漠然とした光景ではなく、はつきりとした記憶として喋っているように見える。

こういう力の持ち主を彼女は伝説の予言の中で訊いたことがあった。

すべての過去と定まった未来を見る『時見』・・・彼が未来や夢

を見ると、定まっていないう未来すらその道しか進めなくなるという。  
(人の運命とまを操る・・・)

そうか、確かに普通の人間からすればそう見えるのかも知れない。  
そしてその能力を持つと気づいたからこそバルガス王は彼を畏怖  
したのか・・・

だがグランテの目の前の王子はそんな化け物ではなく、兄弟を守る  
ために必死に未来を変えようとしている健気な少年でしかない。

「今から馬車を出したら」

「やめておいたほうがいいよ」

ソルデイスの案にグランテは強く反対した。

「逃げるとしてもあんたが指す方向の道しか逃げ場はない。森の方  
に逃げる手もあるが、こんな夜中じゃ昼間の盗賊よりも凶悪なのが  
出てくる」

的確な反論に言い返すことも出来ないソルデイスは悔しそうに下  
唇を噛んだ。彼自身、そのことは重々解かっていたのだろう。

「なんとか誤魔化すしかないだろうね」

グランテはそういうと王女が眠っている踊子たちの馬車へと向か  
った。踊子は突然の座長の来訪に驚いていたが、寝ぼけることもな  
くすぐに彼女を迎え入れる。

「イレエネ、エリーザ。悪いが王女を例の衣装入れに・・・この子  
ぐらいの身体なら十分入るだろ」

もともと盗賊に狙われたときに貴金属を入れておくために作った  
隠しの衣装入れは外から見ても解からないように上げ底になってお  
り、小さな子供程度なら隠せるスペースがあった。

彼女たちは健やかに寝息を立てている可愛らしい王女をその中に  
入れると苦しくないように注意をしながらカムフラージュをした。

王女を踊子たちに任せたグランテは次に用心棒たちの所へ行つた。  
彼らは山賊との度重なる対戦で疲れたのか、それともただ単に酒  
をしこたま飲んだせいなのか踊り子たちと違い緩慢な動きで眠りつ  
づけている。

毅然とした態度で起きているのは古参の用心棒一人だ。

「フェネック、クラウド王子は……？」

「ぐっすり眠ってますぜ。こんな暗い中で地面だって言うのにたいしたもんでさ」

普通の一般市民ですら地面で寝ることには慣れない。

それなのに、この世界で一番大きな王国の王子は気にすることもなく普通に睡眠をむさぼっていた。こういう姿だと本当に王子には見えない。毛布をかけておいてやれば確実に見逃してくれるだろう。後……サイラス王子か」

そこでグランテはたと止まった。

他の子供たちとは違い王といつも一緒にいることを強要されてきた彼の顔をオーランド卿のような元王の側近であった者が見分けられないはずがない。

まして彼には容姿のほかにも独特の雰囲気もある。

時間は王子の言った時間に刻一刻と近づいている。ソルデイスの予言どおりにこちらに向かってくるひびく音も聞こえ始めた。

「ソルデイス王子、あんたは占い師の格好のまんまだね。髪の色も大丈夫かい？」

サイラス王子を通り越し、自分に質問が来たことでソルデイスは更に悲しい顔をした。

だがグランテの考えもわかる。サイラスを隠す処理をすれば折角隠したシェリルファーナやクラウドスまで見つけられかねない。

「どうかしたのか？」

外のざわめきにまだ眠っていないなかったサイラスが馬車から姿をあらわした。

邪魔だったのか髪をはずしており、いつもの顔をしている。

ソルデイスとグランテは急いで彼に近づく。状況を言い淀むソルデイスとは逆にグランテは早々に意を決すると彼に小声で問い掛けた。

「もうすぐ王子を探す部隊がつく、シェリルファーナ姫とクラウドス

王子はとりあえず隠した。ソルデイス王子はこのまま占い師として押し通す・・・あんたはどうする？」

グランテの質問にサイラスは耳を澄ます。

確かに蹄の音が徐々にこちらに近づいている。

ソルデイスは何か言いたげに、だが言葉にならないままサイラスの右手を握り締めた。

「弟たちを頼みます」

サイラスは再度、グランテに頭を下げた。

そして自分の手を握るソルデイスの手を外すとグランテへと渡す。

「僕は、この森を抜けた所であなたに拾われ、占い師の姫の看護を受けていたことにしてください。服装は今から着替えればなんとかなるでしょう」

今、自分が着ていた楽師の服の上着を外すサイラスにソルデイスは声をあげて止めようとす。

しかしいつのまにか後ろに来ていた用心棒の一人が彼に当て身を食らわせ、その意識を奪った。

「この子は私の馬車へ、寢床で寝ていたふうにしておいて」

意識をなくしたソルデイスを男は軽々と持ち上げると、グランテの指示どおりに運んでゆく。サイラスはその光景を、優しい弟の顔を忘れないように見つめた後、捕まるための準備を開始した。

## 第八話：追跡の予告（後書き）

ソルデイスの力の一番大きな部分が出てきました。

彼は『時を定める能力』を持っています。どれだけ混沌とした時でも彼が未来を見た瞬間一本の未来に変わります。

過去はすでに時が定まっているのでこの特殊な能力は未来に向けて威力を持ちます

ただし見たい未来が見れるわけでもなく、見てしまった未来は変更できないそんな能力を持つことが幸せかどうかは別個の話になります。

## 第九話：サイラスの捕縛

ソルデイスが再び目を覚ましたとき、すでに馬車の検閲は始まっていた。

馬車の外で寝ていた用心棒たちはまず最初に搜索の対象外にされ、次に踊子たちの衣装箱やその他の荷物などの中身を改めている。

「占い師の方も目を覚ましたようですね」

起き上がって、ずきずきする腹部を撫でながらソルデイスはグラントの馬車から降りる。

そこには王の間の鏡の向こうで見たオーランドが値踏みするようにこちらを見ていた。

「うちの一座の目玉の娘だよ。その子が望んだから、この男を拾ったんだからね」

確かに見た目は美しい少女だ。笑いもせず、冷たい視線で見つめてくる姿は人形のようにも見える。

王都からの通行証を発行した役人の添付書きには『時守の里の民に尊敬されている方ゆえ、丁重に扱うように』と記されていた。

どうやらサイラス王子がいう通り、この一座には彼の他には王族はいないみたいだ。オーランドは肩透かしをくったように、詰まらなそうな表情を露にした。

一方、ソルデイスは注意深く一座の様子を確認していた。

クラウスはまだ起きていないようだ。眠る前に用心棒たちにこたま酒を飲まされていたのだからしかたないだろう。シェリルフアーナも見つかってはいない。

ただ自分たちの馬車の前にはすでにラフな格好をしたサイラスが縄を打たれている。

ソルデイスは無表情のままサイラスに近づくと、縛られている腕の部分やさする。捕まる時に少し暴行を受けたのだろう、服の所々に血や汚れがついている。

「大丈夫、そんなに痛くないから」  
そんなはずがない。

そう思いながらルデイスは小さく風の精霊を呼んだ。いつもなら気まぐれにしか出てこない彼らが、今日は珍しく彼の声にすぐに答えた。

ソルデイスは出てきた彼らにサイラスの傷の治療をお願いしてから、立ち上がった。

静かな感情を写さない瞳がサイラスと自分のやり取りをニヤニヤした顔つきで見っていたオーランドに冷たい視線を送った後、重い足をなんとか引き摺ってグランテの傍へと行く。

「サイラス王子の美貌は力の強い占い師の心さえ捕まえるというところですか」

下卑た笑いを浮かべるオーランドをソルデイスはぎつと睨みつける。それすらも綺麗な少女と思っている彼には心地よい視線であった。

「さあ、王子・・・帰って、あなたがお父上とどこで別れたのか教えてくださいませんかよ」

すべての馬車の調査を終えたオーランドはにやりと笑うと部下へと指示し、サイラスを無理矢理立たせる。集っていた風の精霊たちが嫌がつて霧散するが、どういう気まぐれなのかすぐに集まりまた傷の治療を続けた。

それだけがソルデイスにとって唯一の救いだった。

「あなたも王都にきますか？これだけ可愛いお嬢さんが傍にいたら王子も喋りやすくなるかもしれませんね」

オーランドが伸ばそうとした手を、グランテは綺麗に払った。手を払われたことで、顔を紅くした彼に彼女は更に追い討ちをかけた。「デイナーデ卿は魔術師だと聞いたけど・・・時守の実力者にそんなことをしろとあなたに命令するぐらい間抜けな人物なのかい？」

城で待つ彼がそんなことを絶対に望まないことは誰もが知っている。

自分の楽しみにこの少女を連れて行こうかと思ったが、そうすることで自分の立場を更に悪くすることは避けたい。

「単なる、冗談ですよ・・・それでは」

オーランドは勿体無いという視線でソルデイスを一度見た後、自分たちの馬車に縛り上げたサイラスを放り込み去っていった。

馬車の姿が見えなくなったところでソルデイスはへたり込んだ。大地についた手がわなわなと悔しさに震えている。

何も出来ない自分。いつだって守ろうと思っっている相手に守られる。

サイラスだって、ルアンリルだって自分に巻き込まれ囚われていく。

「ソルデイス・・・」

いつの間に目を覚ましたのかクラウドが彼の傍に立っていた。

彼も一部始終を見ていたのだろう。飛び出そうとするのを止めるために押さえつけられた後が腕に残っていた。

「・・・ごめん、なさい」

「なんで、謝る・・・俺だって何もできなかった」

こんなに悔しくて、悲しくても、泣く事のできない弟の姿が痛ましくて、クラウドはそれを回りから隠すように抱きしめた。それでも彼は泣くことなく、ただただ拳を大地に叩き付ける。

「お兄様っ!」

ようやく衣装入れから出してもらえたのだろう、目にいっぱい涙をためたシェリルファーナが兄二人の傍まで走ってきた。

「サイラス、お兄様が・・・捕らえられたって・・・本当に?」

どこか責めるような口調の妹にクラウドは「ああ」と小さく答える。

「どうして、一人で・・・なんで、私たちも傍にいたのに・・・ど

うして兄さまだけがっ！」

ぱんっ！

軽い音が一座の中に響いた。叩いたのはグランテだった。

「誰が一番辛いのか、ちゃんと考えてから言葉を発するんだね、王女さま」

その言葉に彼女は目を見開く。

自分は安全な場所にいれられ、すべてが終わるまで眠っていた。

「けど兄たちは・・・クラウスの腕に残った屈強な男によって押さえつけられた後、ソルデイスの嗚咽も涙もない泣き叫ぶ姿。」

「私はサイラス王子に『弟たちをよろしく』と頼まれた。その言葉どおりに、あんたたちを時守の里へそして大將軍・ガイフィード様の近くまで連れて行く。それが自分の犠牲だけで一座の他の人間をも守ってくれた彼へのお礼だ」

まだ幼さを残している少年王子たちに彼女はそう言うと静かに自分の馬車へと戻っていった。

ソルデイスは暫くの沈黙の後、自分の身体についた土を払うと自分たちの馬車へと戻る。

残されたクラウスは、同じく残されたシェリルファーナの肩をぽんと叩いた。と、同時に堰を切ったように彼女の目から大粒の涙が流れ出す。

「サイラス兄様は勝手よ・・・一人で・・・でも、そうしないと・・・ソルデイス兄様は、絶対に無事に大將軍の元に届けないと・・・」  
「ああ」

震える肩を抱きしめながら、クラウスも静かに肯く。

自分たちが守らなければいけないのはソルデイス。そしてそれを為すことがサイラスが自分たちに望むこと。

「ごめんなさい・・・もう・・・なかないから・・・いまだけ・・・」

「ああ」

ぎゅっとしがみついてくる妹にクラウドは相槌で返ししながら、  
自分も静かに決意の涙を流した。

## 第九話：サイラスの捕縛（後書き）

サイラスの捕縛は最初から決まっていたのですがいつの時点でもどのようにつきか大分迷いました。一座と別れた後にすべきかどうか考えたんですが、時系列の調整で今回になりました。

## 第十話：山村の悪夢

一週間以上の時間をかけて山を越えたバルガスは麓の小さな集落を見つけた。

こじんまりとしたその村は15、6軒の鄙びた家だけが立ち並び、家畜や山の恵みのみで生計を立てているような雰囲気を持っていた。「とにかく、ここですべて揃えるか」

彼は自分につき従う側近たちにそう告げると一つの家に入った。

家の中では年老いた夫婦とその娘らしき妙齡の女性がお茶を飲んでいる所だった。

彼らは急に入ってきた男に、何事かと目を見張る。

「時守の里に近い集落だ・・・あの里に入るための護符を持っているだろうか？」

そばに控えていた兵士が一斉に剣を抜き、3人に剣の切っ先を向けた。

老人が怯えながら「はい・・・」と答えるとバルガスは視線で残った兵に家の中を搜索させた。

護符は戸棚の引き出しの中にしっかりと仕舞われていた。バルガスは3つあるそれを確認すると自分の姿を見た彼らを殺すように指示をする。

「女は楽しんでもいいですか」

「かまわん、好きにしろ」

鼻息を荒くした側近の一人が聞いてくるのに、バルガスは冷たくそう答えると残りの家からも護符を奪うべく家を出た。

とたんにあがる断末魔の悲鳴、そして女の悲しげな嬌声。

他にも女がいなかったかと兵たちは我先にとひなびた集落の家へと押し入り、目的の護符と、金品を奪い、抵抗もできない村人を女を殺して惨殺し、女たちも自分たちの欲望をすべて始末した後、殺していったのであった。

ウィルフレッドは王城にしながらも魔法の水鏡により各地に派遣した魔術師たちから情報をかき集めていた。

その中でもサイラス王子の捕縛とバルガス王の山賊にも劣る略奪行為の情報はもつとも重要な情報として分析した。

「やはり、サイラスは王子たちと逃げたのだな・・・」

その言葉を聴いて、ウィルフレッドの傍にて実質軟禁状態になっていたソフィア王妃はびくりと体を震わせた。

彼女の言葉を真に受けた貴族たちがこぞってソルデイス王子はクラウス王子とシェリルファーナ姫とともにロシキスの王子・王女とともに逃げ、サイラス王子はバルガス王と共に逃げたと判断していたが、ウィルフレッドはそんな言葉を信じていなかった。

確かにあの時、鏡の後ろにはソルデイス王子の他にルアンリルとシェリルファーナの気配のみしか感じなかったが、だからといって行動を別個にしているとは考えられない。

問題は王都を抜けた後だ。

比較的公共の場に出ることの多かったサイラスとバルガス王に顔がそっくりのクラウス王子はその場にいるだけで目立つ。

そんな兄二人がソルデイスたちと行動を共にするかどうかだ。

(可能性は。五分五分というところか)

もしかしたら捕まえた一座の中に王子たちが隠れていた可能性もある。一つ一つの馬車、一人一人の顔をチェックしたとオーランド卿は言っていたが、怪しいものだ。

(それとも、サイラスが囮となって弟たちだけ先に逃がした可能性もある)

どちらにしろ、今から追跡をかけたところでオーランドでは捕まえることすらできない可能性が高い。

先ほど、サイラス王子の体には傷一つつけるなと伝令は出してお

いたが、それが彼にどれほど伝わっているのか、実行されているのかも疑問であった。

「だが、真実を表に出すのはまだ早いな」

サイラスがウィルフレッドの子供だということは最大の切り札でもあり厄札でもある。巧い時期に提示しなければいけない。

その時期はまだ訪れない。起こすとしたらそれは彼が行動を起こすときか、それともあの男が姿をあらわした時だろう。

(息子<sup>サイラス</sup>を手駒として扱う部分は私もバルガス王を責められんな)

とりあえずは此方に向かっているサイラスに真実をどのように告げるべきかを考えつつ、ウィルフレッドはその場を王妃を残してその場を後にした。

## 第十話：山村の悪夢（後書き）

バルガス王の行動はあまり書くのが得意ではありません。彼が女性に興味をしめさなかったのはただ単に彼の審美眼に引っかからなかったからだけです。

逆に後半部のウィルフレッドは書きやすいです。サイラスは特殊なルートを使い、最短距離で王都に運ばれる予定です。

## 第十一話：五通の手紙

精霊の森を抜けたレティア達は街道沿いの小さな宿に泊まることにした。

ここもフェルスリユートの行きつけの宿らしく、明らかに一般市民でない子供を連れている彼に何も詮索することもなく2部屋を提供してくれた。

「明日にはまた時守の里の周りの森に入るから、今日のうちに入浴は済ませておいて、早めに休んでくれよ」

そういうフェルスリユートは宿に備え付けの風呂でヘンリーを洗い、自分もさっぱりとした風体にする。

それが済むと荷物の中から便箋を取り出して、何やら手紙を書き出した。

もしかしたら大將軍への報告書か連絡のための密書かもしれない。「そうしていると、少し似ている・・・」

薄汚れていない、不精に伸びてしまった髭もそったフェルスリユートの顔を見たヘンリーは寝床に横になりながら彼の顔をじっくりと観察する。

やはりこの人は王族特有の顔立ちをしていると思う。

「はあ？誰に・・・」

誰かに似てるといわれるのを心外に思っているのか、フェルスリユートはじいっと見てくる王子に問い返す。

「一番似てるのはクラウス王子。次はソルデイス王子・・・バルガス王とは少しだけ違うけどその二人にそっくり・・・」

実際、バルガスとクラウスはそっくりで、ソルデイスのみが違う顔立ち・・・王妃の持つロシキス系統の顔立ちをしている。

しかしこの王子は、クラウスとソルデイスに似ていて、バルガスには似ていないとフェルスリユートを称している。

「あはははははは。面白い王子だな」

何かのつぼにはまったのか、彼は豪快に笑うと寢床の上の王子の頭を豪快に撫でてやる。

「王子は案外、いい『目』をしているのかもしれないな」

その意味を聞き返そうとしたヘンリーをその場に残して、フェルスリユートは机の上に乗っていた先程まで自分が書いていた手紙を持って来た。

「王子にだつたら手紙を託しても大丈夫そうだ」

差し出されたそれをヘンリーは不思議そうな表情かおつきで受け取った。手紙はすべて封筒に入っていてすべてきちんと封がされていた。

宛名をみると3通には短く名前が、後の2通には『息子へ』と『じいさんへ』、とかかれていて特定の人物を割り出すような内容ではなかった。

「俺にもしものことが起きたら、それを彼らに渡して欲しい」

不吉なことなど言うなと怒鳴ろうかと思つたが、彼の目が余りにも真剣で、何かを知りながらもその道を進むもののそれに見えて、ヘンリーは何もいえなくなった。

「この2通は弟・・・」

指差されたのは名前が書かれている2通の封筒。

「後は、俺の妻とその腹の中にいる子供と・・・心配をかけた祖父にあててある」

両親宛がないということは彼はすでに親を失っているのかもしれない。

フェルスリユートの手紙をヘンリーはいつも身から外さないほうの荷物に入れた。占い師である彼がどんな未来を見てこんな事を言うのか解からないが、今までの行動の中で無駄だったことは一度もなかった。

「どうやって、探せばいいですか？」

ヘンリーの当たり前前の問いにフェルスリユートはにつこり笑う。

「すべての真相が明るみになるとき、一人目の弟と祖父が誰なのかわかる。そしてその周りに息子を除く全員が集まっているよ」

「予言めいた言葉を残して、彼は自分のベッドに横になる。

ヘンリーも彼と同様に自分のベッドの上で布団を被る。

「それじゃ、ランプ消すから・・・」

その言葉と同時に明かりは落とされ、話はそこで打ち切りとなった。

翌日、ヘンリーが目を覚ます頃にはフェルスリユートはすでに出立の用意を済ませていた。

彼はこの数日間慣れた旅支度を済ませると二人で揃って宿屋の奥に仮設置してくれた食卓へと足を運んだ。

「この先が時守の里の森だろう」

その森はこの宿から然程離れていない位置にあった。食事をついばみながら地図で確認するレティアとフェルスリユート。ルミエールは体力をつけるために、必死に朝食を平らげている。

ヘンリーは自分の鞆の中の手紙の存在、昨夜のフェルスリユートの態度と願いが気になってはいたが他の人のいる場所では問いただすことも出来ずに、姉と同じくただ黙々と食事を食べることに専念した。

「今度はこっちの護符を掛けてくれ」

レティアとの話を終えたフェルスリユートは綺麗なネックレスを出した。

それは様々な色の入ったオパールのような石で出来た護符だった。

「今、時守の里は閉ざされているからな。こういうのがないと入れないんだよ」

精霊の森を抜けるのにも効果を発した護符の存在に、3人は興味深々だ。

「この家の人間が、時守の里に行商に行くらしくて・・・わけても良かった」

フェルスリユートの言葉に彼らはにこやかに笑っている。この護符を分けてもらうのにいったいいくらのお金を積んだのだろうかとも思ってしまう。

「貴殿の分は……?」

「俺は、占い師だから護符なしで入れる」

レティアの問いにフェルスリユートは小さく笑うと心配するなど3人の少年少女の頭を撫でてやった。

## 第十一話：五通の手紙（後書き）

フェルスリユート、王子を放っておいて手紙を書いています。

この手紙はこの後もずっと王子が持つ羽目になります。

彼が敢えて宛先を解かりにくくしたのは、この手紙が届く時期を遅らせるためです。

## 第十二話：伝えられた惨劇

サイラスが捕縛され、意気消沈している暇もなく一座はすぐに動き始めた。

「とりあえず、近くの村に行こうか・・・少し情報も仕入れたい」  
グランテの言葉にソルデイスは無言で肯いた。

この先には地図には乗っていないが、10件ぐらいの民家を有する小さな集落がある。

彼らは精霊の森で暮らす他の村と同じく森の精霊の護符を旅人に売って生計を立てていた。

「なんか、覇気のない村だねえ・・・」

覇気がないだけではない。彼らはやってきた一座を警戒している節があつた。

グランテはとりあえず、ソルデイスを連れて村の長の元へと出向いた。

そこには長を勤める老人だけではなく普段は農作業や土木作業で体を鍛えているだろう男が控えていた。

「今年の秋祭りはどのような具合ですか？」

グランテの問いに長老は静かに首を振る。

「今年は、行いません」

彼女はその言葉に目を丸くした。

農耕民族なら秋の収穫を森や季節の精霊に感謝する祭りを行うのは当たり前のこと。よほど村を襲う悲劇がない限りはその事を怠ることなどしないはずだ。

「なにか、あつたのですか？」

占い師の格好をしたソルデイスは不思議そうに周りを見渡した。

そこで一人の女性に視線を止める。その女性は発狂したようにぼうつとただ一点だけを見つめて、薄く笑っていた。

「あ・・・・・・あああああっ」

彼の異変に気づいたグランテは視線を凍らせたように女性に注いでいた彼の目を大きな手で覆い、彼の意識を彼女から離れた。

「本当の・・・占い師様ですね。すみません。この子はかつてこの村の住人だったので、別の村に嫁ぎ、先ほど占い師様が『見た』惨劇にあつてしまったのです」

抱えるようにソルデイスの身体を抱きしめるグランテに長老は静かに告げた。

男達はそのことでグランテ達が普通の旅芸人の一座と判断したらしく、その女性を占い師の傍にこれ以上いさせないように別の家へと運んでいった。

「それで今は外部からの侵入を警戒してるのかい・・・」

どんな光景をソルデイスが見たのか彼女にはわからなかったが、それが衝撃的な光景だったことは震えている彼の身体から伝わってきた。

しんみりした雰囲気の中、突然家のドアが開いた。見るとソルデイスと同じ年くらいの少年が満面の笑みで家の中に飛び込んできた。

「長老っ！お届け物終わりましたよ・・・って、お客さん？外の一座の人？」

「これ、スターリング。行儀が悪いぞ」

茶色い髪、穏やかな深い藍色の瞳、元気いっぱいと感じさせる少年はじいっとソルデイスを見るとその胸に自分の手を押し当てた。

「あ、やっぱり男ですか」

「間違えてたら、どうするつもりだった？」

先ほどの厭な幻視を打ち払うような彼の明るさに、ソルデイスは正直な疑問をぶつけてみた。

「とりあえず、謝って、平手打ちをくらいますか？」

「なんだよ、それ」

変に間違った丁寧語の、それも疑問系で質問に返してくる彼にソルデイスは年相応の笑みを見せた。

その表情に長老もグランテも目を細める。

「とりあえず、2、3日滞在してくださいませ。村人の心が少しでも和らぐような踊りを見せてくだされば、当村特性の護符や食料をお分けしましょう」

グランテは長老の申し出に礼を言うとスターリングという少年と楽しげに話しているソルデイスに一座に先に戻る旨を伝える。彼は少年に手早く別れを告げるとグランテと共に長老の家を出た。

「いったい、何を見たんだい」

思い出したくもないだろうが一応、聞いておかなければ成らない。グランテのその心がわかっているのか彼は他の人に話の内容を聞かれないために彼女の馬車に向かった。

「彼女の村は理不尽な襲撃に遭って全滅していた。その時、村には老人と女しかいなくて、男達は行商に行っていた。そこに山を越えるルートを通ったバルガス王が現れた」

淡々とソルデイスの口から語られる言葉にグランテの眉根が寄る。「彼らは時守の里に入る護符を彼らから奪うと老人と男の子供は殺害した。女は自分たちの暴力の捌け口にした後、殺害した」

ソルデイスの頭の中に送り込まれた彼女の見た記憶。

彼女の記憶から導き出された滅びた村の記憶。悲鳴と怨嗟の声。血の匂い。すべてが鮮明なまでに彼女を通してソルデイスに伝わった。

「彼女は致命傷にならなかったから生きていた。生きて地獄を味わった。」

優しかった義父母を殺され、息子を殺され、娘を汚され、自分も汚された。彼女の傍で家族はすべて冷たくなって・・・発狂して村をさ迷っているところを偶然に届け物に来た実家の兄夫婦が見つけて保護した」

守ろうと伸ばした腕を押さえつけられ、泣き叫び、死のうとしても無理矢理死なせて貰えず・・・村の中で一番美しかった彼女に、男たちは群がって・・・

あの家の中にいた男性たちは行商から帰り、その村で親・妻・子

その亡骸を見た男たちだった。

彼らはその村に居続けることなどできなくて、亡骸を葬った後、女性の兄夫婦と共にこちらに移住してきた。

「悪かったね・・・いやな情報を読ませてしまった」

「ううん、グランマのせいじゃない。僕は勝手にこういうのを読めてしまうだけだから」

彼女を発狂させたのは自分の父親。その事実はどこまで行こうとも消えない。

今までだってあの父がそういう悲劇を生んできたことを彼はその力で知ってきた。

婚約者のいる女性を監禁し発狂すると野に棄てた。自分と関係を持った女性が娘を連れて現れるとその少女ともども女性を殺そうとした。結婚したばかりの女性の夫を処刑し家族を人質に取り愛人にした。

そのどれもを彼は父に近づくたびに記憶として読み込んでしまっていた。

「グランマ・・・僕からのお願いです。心が安らぐような鎮魂の踊りを彼女たちにかけてください」

「わかったよ、王子」

グランテはにっこりと笑うと彼を残して馬車を出て、踊り子たちに今夜の宴の趣旨を伝えにいった。

ソルデイスは頭にこびり付いた惨劇の記憶を振り払うように頭を横に振り、小さく息を吐いた。

## 第十二話：伝えられた惨劇（後書き）

第十話でのバルガスの行状をソルデイスが自分の異能力で読んでしまいました。どうやら彼の数々の所業もソルデイスはすべて知っているようです。

途中から出てきたスターリングという少年は、山賊との一戦の後、生き残っていた男を殺害した少年です。

彼は近隣の村の住人で、両親を無くしており、人手が必要な時期は各村を回り、手伝いや用心棒を、その他の時は家族のいる村に戻り護符作りをしています。



それがすべて体に入る頃には彼女は大人しくソルデイスに身を預けていた。

「何を、やったんだ？」

彼女の夫は訝しみながら、少年に問い掛ける。

「夢の支配を変えました。記憶を探り、最悪の部分のみ夢にでないように施錠したんです。精神的には狂っているのかもしれませんが、彼女はこれから厭な夢など見ず、あなたと家族とともに過ごした幸せな時の中に生きていきます」

その言葉のとおり、彼女の顔は彼と共に過ごした時の様に穏やかで優しい顔へと変化していた。

「そうか、彼女のあの悲鳴をもう聞かなくて済むのか」

彼は大粒の涙を浮かべながら、自分の妻を抱きしめた。その顔が安らかに微笑む。きゅっつと抱きしめ返してくれる腕はまるで正気の頃の彼女のようにだった。

他の村人たちもその姿に安堵の表情を浮かべた。

彼らにとり彼女の悲鳴は自分の殺された家族の悲鳴と重なり、それが彼らの心を強い後悔の海に引き戻させていた。

「今日、僕たちの一座が鎮魂の踊りを舞います。どうか見ていってください」

「ありがとう・・・嬢ちゃん」

優しいソルデイスの言葉に、その場にいた全員の顔が和む。彼は小さく笑うと

「僕は、男です」

と、自分の性別をばらした。

村人たちは美しい少女に見える彼の容姿をまじまじと見、破顔した。

「そうか・・・うちの死んだ息子と同じぐらいだなあ」

「うちの娘とおなじぐらいだと思ったんだが」

亡くなった自分の子供たちと重ね合わせて、彼の頭を優しく撫でる村人たちの心に小さく灯った温もりをソルデイスは悲しい気持ち

で感じていた。

もし彼女を・・・彼らの家族たちを奪い、辱め、殺害したのが彼の父親だと知ったらどうなるだろうか。

それがわからないほど馬鹿ではない。

「それじゃ、僕も準備がありますので」

ソルデイスは一度頭を下げるとグラントの馬車に走っていく。その表情にはどことなく遣る瀬無い苦悩が浮かんでいた。

「うわっ・・・とととと」

馬車に向かうソルデイスの前に、長老の家で出会った少年が馬車の陰から飛び出してきた。

突然のことに双方、ぶつからないために同じ方向へと避け、互いの身体を掴む形で支えあつて転ぶのを止めた。

「ご、ごめん。ぶつからなかったですか？」

「あ、うん、ごめん」

互いに謝りあつて、転ばないように掴んでいた手を離す。

ソルデイスより少しだけ背の高いスターリングは少し覗き込む形で彼の表情を見、その目を見張った。

「どこか、痛いのですか？」

ソルデイスは自分で笑っている・・・笑えていると思っていた。

実際、周りにいた人間も彼が普通どおりに笑っていると思つていた。

だがスターリングにはその表情がどこか傷ついていて到底笑つていけるようには見えなかった。

「本当に、大丈夫」

更に笑つて見せようとすると、今度は起こったようにソルデイスの腕を掴み自分の間借りしている部屋へとソルデイスを連れて行った。

「いつも、そんな顔してるの？」

他人事なのに、それも今日まだあつたばかりの自分に対して心配しながら怒るスターリングの感情にソルデイスは正直戸惑った。

彼が自分をこの部屋まで連れてきたのはソルデイスが兄弟の・・・  
親しい人のいる前では笑うことしか出来ないと察知したからだろう。  
「僕の笑顔おかしい？」

「え。笑ってたの・・・？それ」

スターリングには彼の表情が凍っているようにしか見えなかった。  
悲しくなりすぎて、どうにもできなくてただ感情を押し殺して、  
凍らせたそんな表情・・・先ほど長老の家で笑っていたのとは全く  
違う、辛い辛い表情に、彼は悲しくなってしまった。

「スターリングは全滅した村とも交流があったの？」

表情を映さない鏡のような瞳が、じいっとスターリングの顔を見  
ていた。

「時々、仕事はしに行つてたよ」

下手な敬語を止めて、普段どおりに彼はその問いに答えた。

途端、ソルデイスはすうっ・・・と視線を移動させ、村のあつた  
方へと向いた。その目は現実とは違う何かを凝視していた。

「あの村を襲った人物の中に僕の父親がいるって言ったらどう思う  
？」

言葉と同時に自嘲するように彼は笑った。

泣きそうな瞳で、口元だけ笑いつづける彼の顔は、自分の血に連  
なる者が起こした惨劇を自分の罪として受け止めている風に見えた。  
スターリングは僅かな逡巡の後、

「あの人たちには黙っておいたほうがいいと思う」

と、手短に答えを出した。

この状況の中で、いくら女性の精神を救ったからといって彼らの  
憎悪が収まるとは思えない。

そしてその憎悪が自分と同年齢ぐらいの少年一人に向けられてい  
いものとも思わない。

「そう・・・」

憎悪自体、すべて受け入れようとしていた感のある少年の呟きに、  
彼はとんつと頭を殴る。

「罪は、それを行った人物が負うべきだ。その男が君の息子だつていうんならまだ親としての責任があるけど、親が行ったことの責を子供が追うべきじゃない……これは僕の叔父さんが、僕の兄さんに向かつていった言葉だ」

兄と自分は父親が違う。兄の父親がどんな罪を犯したのか知らないが、兄はそれを自分の罪であるかのように憎み、悔やんでいた。

その時に叔父が言っていた言葉に兄はかなり勇気付けられたといっていた。

「いい、叔父さんだね」

ソルデイスはさういうと儂い笑みを浮かべた。

その言葉をもっと小さい頃から言ってもらえたら、自分はもっと違う者になれたのかもしれない。

「君も宴の準備はするの？」

「ううん、僕は傍観者。一座の人間でもないから……」

スターリングはその答えに然程驚きもせず、「そう」と短く答えた。

「じゃあ、宴が始まるまで、いろんな話をしよう。一座の人間じゃなくてもいろんなどころは言ったことがあるんではよ？僕の兄の格言で『地域の情報を制するものが戦いも政治も制する』っていうのがあるんだ。だから僕はいろんな集落を回って情報を得ているんだ」  
余りにもあっけらかんとすごいことを言い放つ彼に、ソルデイスは小さく噴出した。

それと同じ言葉を彼はとても親しい人から貰っていたから。そしてその口調がどことなく目の前の彼に似ていた。

「いいよ。それじゃ、君の持つてる情報も僕が貰うね」

やっと普通に笑ったソルデイスにスターリングも満面の笑顔で返した。

### 第十三話：仮面を外す者（後書き）

ソルデイスとスターリングの仲が急速によくなっています。タイトルの仮面はソルデイスの笑顔、外す者はスターリングを指します。どこで切るべきか迷っている内に、字数が増えてしまいました。次回はもう少し短い話になるか・・・未定です。

## 第十四話：鎮魂の宴

辺りに闇の帳が下りたところで集落の中ほどにある広場に祭壇が設けられ、急遽組み上げられた檜に炎がともされた。

踊子は豊饒の祭りの時とは違い輝石の装飾は一切つけず、変わりに小さな鈴を腕の周りや足首などに沢山巻きつけている。黒と青を基調とした薄紗の布が揺れるたびに、シャラリシャラリと静かな音が、辺りを満たしていた。

シャン・・・シャン、シャン、シャシャン・・・

グランテの持つ月鈴のの音に合わせて彼女たちは祈るように静かに踊り始めた。

宵闇の中で彼女たちのつけている鈴の音が響く。

やがてそれにあわせて笛の音が入り、弦楽器の音、太鼓の音と段々音楽が重なり紡がれ始める。

彼女たちは、音にかき消されないように自分たちの身体についている鈴を震わせ、ただ一心に踊り続けている。

彼女たちの身体から飛び散る汗が、炎から飛び散る火の粉と共に天へと昇る。その光を見ながら、村人たちは亡くしたばかりの家族の冥福を願う。

「悲しい、踊りだな・・・」

静かに見ていたソルデイスの耳に、クラウドの声が入ってきた。彼はソルデイスの忠告を受け、先ほどからずっと服喪の面をつけていた。

「火の粉が、星になり森の精霊の元へと亡くなった人の魂を連れて行く。本当はその場所でやったほうがいいんだけど・・・まだ彼らには家族を失った村へと戻ることなどできないだろう」

だからこそ、せめて遠くからでも祈りの踊りを献げる。

「穢れの地には精霊は入れない・・・この踊りが彼らの魂に届き、死した土地から抜けてくれればいいけど」

ソルデイスの言葉に呼応するように森の奥でいくつもの光がふわふわと浮かび始める。ソルデイスが驚いて横を見てみると、クラウスがぼうつとしながらその様子を眺めていた。

光の周りには森から放出される緑色の光が重なり、癒すように包み込んでゆく。

「幻想的、ですね」

いつのまにかソルデイスの横に来ていたスターリングが、魂の光を目を眇めながら見ていた。

祈りの踊りを踊りつづける一座の人間以外も、突如として起きた現象に涙を流し感謝の祈りを捧げている。

「いずれは僕の魂もこうなるのかな・・・」

スターリングの言葉に、ソルデイスは「遠い未来のことだけどね」と付け加える。

「ありがとう・・・僕の友人も多く殺されたんだ。だから、ほんとうにありがとう」

ソルデイスの父が起こした惨劇と知りつつも、感謝の意を述べるスターリングにソルデイスはただ無言で肯き、視線を森へと戻す。

彼女たちの踊りは、光がすべて消えるまでずうっと続き、村人は一座に最大の拍手を送ったのだった。

大將軍・ガイフィードは皆の一番高い位置にある自室で王都のある方向を見ていた。

国境を守るの自分の所にその内乱の報が届いたのはつい先日だった。起きてからすでに10日も過ぎてから届けられた知らせに、彼は握りこぶしを作り怒り出したい心を静めた。

とりあえず、いつもより多数の間諜を放って、ダイナラーデ卿の

動向と王子たちの足取りを追うように指示を出して結果を待った。

伝えられた情報ではソルディス王子は未だ捕まっていないらしい。バルガス王も・・・上手く逃げているとのことだ。

またディナラーデ卿は王都から動かず、彼に組した貴族達が<sup>こそ</sup>挙つて王族の探索を行っているとのことだった。

これの情報ではいったい何が起きているのかわからない。

だが、何かが起こりそうな予兆だけは常に彼を襲い、苦惱させる。

「閣下・・・よろしいですか」

部屋の入り口から副官であるストラウムの声がして、彼は自分の思考に終止符を打つ。

入室の許可を与えると、彼はおもむろに部屋に入り一礼をした。

「ガジェットからの連絡はないか？」

「まだです。内乱に巻き込まれたのは間違いないと思いますが・・・」

無事で居るのなら何がしかの連絡が欲しかった。二人の心配は逃げた王子よりも先に自分たちの部下である青年に向かった。

彼が將軍の使いとして王子の誕生の宴に出かけたのは、砦の中でもこの二人しか知らない。他の者たちは彼がどこかに出かけ、内乱の混乱の所為で戻つてこれないだけだと思っている。

彼らは王子と、そして自分たちの部下のことに思いを馳せて、王都の方へと再び視線を向けた。

「あれは・・・なんでしょう」

いくつもふわふわと白い光が舞い上がっては、緑の光がそれを包む・・・地平の下のほうで繰り返されるそれは星の瞬きにも似ている。

「鎮魂の宴が行われているのか・・・」

「方向としては精霊の森の方ですね」

二人は静かに目を閉じると天に・・・森にと還つていく魂の安らかならんことを祈った。

森の向こうがぼうつと明るくなったのを見て、フェルスリユートは静かに目を閉じた。

自分の周りには地面でも寝ることが出来るようになったロシキスの王子・王女たちが眠っている。

『鎮魂の宴・・・』

星を見ることの出来る彼にはその光の一つ一つが人の姿に見える。深く探れば、その人の人生やしに方まで見ることが出来るだろう。

祈りの源を見ると自分の見知った星が数個、そこに見えた。彼らが森のどこかで死んだ魂を救うために宴を開いたようだ。

『あの男から、生まれた割には本当にまともな王子に育った』

誰にも話してはいないがフェルスリユートにとりバルガス王は憎悪の対象だ。その王子たちに対しても同様に嫌悪の念を持っていた時もあった。

だがここ数年見ている限り、王子は誰もあの男からの狂気を引き継いでいない。

元々血が遠いサイラス王子はもちろん、クラウド王子もシェリルファーナ姫もそして何よりソルデイス王子がああ男とは違うものだと知った時、彼は王国の変革を信じた。

『あんたも、そのはずだよな・・・王子の師匠・・・』

フェルスリユートは自分の親友の物静かな微笑みを思い出す。ソルデイス王子のためならどんな事をも厭わない彼が、この内乱の後、彼をどうやって守るのか考える。

瞬く星の中に、自分の星、彼らの星、すべてを見、その行く先に小さく笑う。

「まだ、起きてるのか？見張りなら、変わるうか？」

いつの間にか目を覚ましたレティアが彼に問い掛ける、彼は静かに首を振ると光の方を指差した。

「あれは？」

「鎮魂の宴ですよ。誰かが死者のために祈り、踊っているのですよ  
う」

幻想的だが、どこか悲しい光に彼女は「そうか」と返し、ロシキ  
ス風の祈りの型を取る。

世界に返り、やがてまた生まれ来る魂が少しでも安らかであるよ  
うに、と。フェルスリユートも彼女に追隨するように死者の魂へと  
祈りを捧げた。

#### 第十四話：鎮魂の宴（後書き）

迷走編の第一章にあたる精霊の森の章が終わりました。

これで殆どの主要人物は出てきているような気がします。

これから暫く、レティア達中心で話が進みます。

## 第十五話：霧の森からの連絡

時守の里のある森は、深い霧に包まれていた。

かつてこの場所で残虐に殺された時守の里で、彼らを守る立場の者が残った村民を守るために里の周り全体に霧の結界を張ったせいである。

「動き難いかもしれませんが、縄は絶対に外さないでくださいね」  
互いにはぐれないように腰についた縄で繋がったレティア達はフェルスリユートの先導のもと深い森へと進んでいった。

肌に纏わりつくような湿気を含んだ空気は、それだけで気分がじめじめと暗くさせられる。子供たちはそれでも文句を言わずに、ずっとフェルスリユートの後をついてきていた。

「あと、1日ぐらいあるけば里につけますよ」  
明確な日数が出たのはその日が初めてだった。

彼は精霊魔法でつけた焚火に炎をつけながら子供たちのリーダー的な存在となっているレティアに話し掛ける。

彼女はその言葉に笑いながら「それは助かる」と返した。

気丈な彼女でも、やはりこの深い霧と不快な湿気には辟易としていたようだ。

「そこで、王女。お願いがある」

改めて願い出てきたフェルスリユートにレティアは不思議そうに視線を向けた。この短いたびの間でこんな風をお願いされたことなどなかった。

「なんだ？めずらしい」

レティアはそういうと義姉弟たちの行動を目端で確認しながら、彼との会話を続けた。

「国竜をここに呼びつけて欲しい。最終的には里からそれで王女と王子だけでも国に帰さなければならぬから」

「・・・そうか」

彼女の視界の隅に、義姉・ルミエールの姿が見えた。

彼女はとりあえず長めのロープを樹木の幹に縛り付け、その縄の片端を持って出かけようとしていた。その手には手桶が握られているところから飲み水を近くのをせせらぎの場所まで汲みにいったのだろう。

彼の案は、そんな健気な彼女をこの内乱中のリディアに置き去りにし、ロシキスの王位継承者たるヘンリーとレティアだけを逃がすもの。非道いといわれようが、それは普通の手段だった。

「・・・ここなら、大分、ロシキスにも近い・・・やってみよう」  
もともとレティアもヘンリーだけは母国くへと戻すことを考えていたのだ。

その案は本来自分から言い出さなければならなかった。

レティアはその厭な役目を自分から引き受けてくれたフェルスリユートに感謝しつつ、自分と繋がっている銀色竜ルシル・ヴァイリアに向かって呼びかけた。

#### 竜王国・ロシキス 王都・ローサリア

ロシキス国王・ライアン・ゼントリーブは遙か彼方にあるリディアとの国境の方を眺めていた。

リディアの内乱に伴い、この国の中も慌しくなっている。特に無頼派の貴族達は、これを機に彼の国へと攻め入り王都を落としてこの世界の覇者となるべきだと唱えている。

「馬鹿らしい・・・」

リディアとロシキスの国境には大將軍と呼ばれるガイフィード卿の軍が駐留している。そしてその近隣には彼の部下たちが数万の兵を従えてそれぞれ控えている。

今まで自分たちがその部隊にどれだけのダメージを加えられ、そして退けられてきたのかを考えればそれが非現実的な案であること

は明白だ。

「彼らが、王都にいるかまたはもつと南にいてくれれば俺も考えたが・・・」

それに、もう一つ王には心配事があつた。

ソルデイス王子の聖誕祭のために呼ばれた王子・王女がまだ戻ってきていないことだ。

王都から戻ってきた貴族達の話では彼らは早いうちに逃げ出したようではあるが、当人たちからの連絡はいまだ自分の元には届いていなかった。

異母弟の遺児・レティア・リストラルだけでもこの国に戻ってきてもらわなければ貴族だけではなく竜騎士たちを制する事ができなくなることも彼の懸念の中に含まれている。

バサツバサツ

大きい羽音が王城の上で響いた。見上げると美しい銀色の巨体を持つ国竜ルシルヴィリアが彼女専用のスペースへと降りてくる所だった。

「ルシルヴィリア殿、レティア姫から連絡が入ったのか？」

この竜と幼い義娘<sup>むすめ</sup>が魂で繋がっているのはこの国の者であるなら誰もが知っている。

彼女は城の中の狭いスペースでその翼を畳むと、王に向かって首を傾けた。

『ああ、どうやら時守の里の辺りまでは自力で逃げてきたらしい。徒歩ゆえ、連絡が取れる位置につくまで時間がかかったと言っている。ヘンリー王子もルミエル姫も共にいる』

神々しいまでに響く声が待ち望んだ情報を伝えた。喜びに輝く王の顔を見ながら、彼女は自分の『主』と連絡を取りつづけた。

『王女<sup>レティア</sup>が呼んでいる。今から私はこの国を留守にするがよいか？』  
その言葉にライアンは少しばかり躊躇した。

国を守護する竜がこの国を離れることなど建国以来ないことだ。それゆえに先ほど伝えられた王子たちの様子に「本当に大丈夫なのか」と疑問も湧く。

だがその迷いをすぐに打ち消すと、彼は深々と彼女に頭を下げた。  
「ロシキス国を守るのは私の役目。ルシルヴィリア殿はレティア姫の安全の方を最優先に」

どれだけ武道に長けていようと彼女はまだ13歳の少女なのだ。そんな子供が同じ年の少女と年少の王子を守りながら、内乱の国の中を抜けてくるのがどれほど危険なのか彼には理解できた。

『すまぬな』

彼女は短くそういうと再び、翼を広げた。

それから一声大きな声で鳴くと、彼女たちがいる隣国へと向かって羽ばたいていった。

## 第十五話：霧の森からの連絡（後書き）

前半はレティアたち、後半は他国。主人公たちの影も形も出てきません。

時間としては前話の翌日なので、ソルデイス達はまだあの村から出ていません。

## 第十六話：さらわれた王女

いつもの通り野営地を見失わないようにロープを手繰りながら水を汲みに行ったルミエールは、河の端で水を汲み終えたところで自分以外の誰かの存在に気づいた。

白い闇のような霧は近づく彼らの姿を寸前まで覆い隠していたため、気づくのに遅れたのだ。

彼女は急いで立ち上がったが、次の行動を考えあぐねた。

縄をたぐって元の位置に戻れば、フェルスリユートが助けてくれるだろう。

だが、それは自分が命に代えても守らなくてはならない義妹と弟を危険に晒すことに成りかねない。

それならば、と彼女は気配とは反対の方向へ河を伝って逃げ始めた。

(ディナラーデ卿の追っ手?・・・それとも山賊・・・?)

どちらにしろ、足音は動物のものではない。人のものだ。

時々、物陰で相手をやり過ごしながら彼女はどんどんと姉弟のいる宿営地から離れていった。

フェルスリユートは霧が運んできた風の中にいやな気配を読み取った。

見渡すとルミエール姫は水を汲みに行った所から帰ってきてはいない。

いやな予感を覚え、彼は縄に残った彼女の星の記憶から彼女の状況を遠視する。

「まずい・・・」

彼女が男たちに追われている姿が克明に彼の脳裏に入ってきた。

そしてその兵を率いているのが誰なのかも、彼には読み取れる。  
「どうした、フェルスリユート」

縄を握りながら顔面蒼白にした彼にレティアは何事かと駆け寄ってきた。ヘンリーも自分の役目である焚火の世話を放りだして彼を見上げる。

「レティア姫。ルシルヴィリアを、早く・・・来たら、今首からかかっている護符の気配を追って俺を見つけるように彼女に言っただ」  
突然の彼の言葉に目を白黒させているヘンリーを他所に、言葉の中から異変を察知したレティアは彼に追いつがる。

「何が、起きた」

「水を汲みに行った彼女が、追われている」

その言葉にレティアは手桶を持って森へと入っていった姉の姿を思い出す。

いつもどおり過ぎる光景に気を止めてることもしなかった。まさかこんな近くに追っ手がきているとは思いつかなかった。

「デйнаラーデ卿の・・・？」

「いや、これは・・・バルガス王だ」

舌打ちしながら答えた彼にレティアも驚愕した。

あの王がロシキスの王女を見つけたらどうするのか、考えるだに恐ろしい。

まだ13歳と幼い彼女のこれからをあんな男に踏みにじられることなど許されない。

「俺は今から、彼女を、王たちを追う。ヘンリー王子はすぐに旅立てる準備を・・・」

フェルスリユートは手短かに指示を出し、ロープから読み取った場所に向かい駆け出した。

ルミエールは上がりそうになる息を必死に押さえながら霧に包ま

れた森を必死に逃げ回った。

最初に聞こえていた川のせせらぐ音も今はもい聞こえない。

「きゃあっ！」

転ぶ時にあげてしまった悲鳴を聞き付けて足音が向かってきた。

急いで立ち上がるうとするが、足を捻った様で痛みで巧く立ち上がれない。

がさり……

茂みを掻き分ける音。

彼女が視線を上げると自分よりもずっと大きな男が現われた。

更に後ろから何人もの男達が姿を現す。彼らの目には好色な色が浮かんでいた。

恐怖に後じさる彼女の肩を後ろから伸びて来た腕がつかんだ。

「これは、これは……ロシキスに入るための切符が手に入ったぞ」  
声も出せぬ程に怯えているルミエールの目に写ったのは男達と同じような好色な笑みを浮かべたバルガスの顔だった。

フェルスリユートは川まで出ると小さく呪文を唱えた。僅かな光が灯り、彼の瞳が澄んだ水色へと変化する。

普段は自分に課している封印が解かれた瞳には多くの星の情報が彼の中に流れ込んで来た。

(こっちか……)

星の位置からしてルミエールはすでにバルガスに捕らえられている。

急がなければ、『あの子』を救う星が、傷つけられてしまう。

彼は手を出すと、自分の周りにいる数々の精霊に向かい、叫んだ。

「時守の里を守る、森の精霊、時の精霊に我が名『ラル・ソリュート星見』を持つて命令を下す。『バルガス狂王』たちの周りに惑いの霧を、そして俺の周りの霧を消し彼らの所へ導け！」

その命令に精霊たちの顔が不安そうに歪むのが見えた。

だが『リル・ソリュート時見』の次に上位の魂を持つ者の命令を無視することなどできなかつた。

命令はすぐに実行され、彼の前の霧が王のいる方向に向かい消えてゆく。

フェルスリュートは「ありがとう」と一言礼をいい、霧の晴れた道を彼女の元に向かい駆けていった。

## 第十六話：さらわれた王女（後書き）

恐怖の性欲魔人、バルガス王の登場。

フェルスリユートは相変わらず美味しい所総取りしています。彼はすべての人間の事情を知っているので、いろいろと画策しています。まだしばらく主人公ソルデイスのいない話が続きます。

## 第十七話：王女への尋問

拘束したルミエールを前に、バルガスはおかしくて仕方なかった。これは最高の幸運だ。新しくなったロシキス王を操るための手駒を手に入れたのだから。

仲の良さそうな兄弟だったから王位継承を持つ幼いヘンリーも、あの鼻っ柱が強くバルガスを隣国王と認めないレティアも多分、いや、絶対にこの辺りにいるはずだ。

目の前の少女を人質に使えば彼らの動きを制することなど容易い。「すぐ傍に他の兄弟もいるはずだ、探せっ！」

バルガスの言葉に彼に付き従っていた従者が困惑の表情を浮かべた。

「今はまずいです。これだけ霧が出ていると見つける前にこちらが迷い、森に飲まれます」

彼の言葉に周りを見ると先ほどよりも深い霧が彼らの周りに満ちていた。濃厚なミルクのように深い霧は森の中にいる王子・王女たちを巧みに隠しているみたいだ。

「仕方ない・・・とりあえず先に王女への尋問に入るか」  
バルガスの言葉に回りにいた男達は色めき立った。

13歳の王女はその美しさは然ることながら、まだ誰にも汚されていない固い蕾にも似た清純さと男を誘うような見事な身体を持っていた。

追われたことにより乱れた髪は、怯えきった表情に相俟って、男達の嗜虐心を誘う。

「誰と、ともに逃げていた？」

あの内乱が起きる直前、この王女がソルデイスたちと一緒にいたことは知っている。畏にはめようとしたルアンリルの動向を見晴らせていた間者が偶然、遠方から彼女達とともにいるのを見つけたのだ。

もしソルデイスと一緒にいるのなら、誰にも知られずに葬り去る事ができる。

だが肝心の王女は頑なに口を噤み答えようとしない。

「私の息子達と共にいるのではないか？」

バルガスはそう問いながら震えている少女の顎を掴み、強引に視線を合わせる。

ルミエールは大きく頭を振り、その事は否定する。

バルガスはその問いに面白く無さそうな顔をしたがすぐに気を取り直し、恐怖で涙を浮かべている王女の顔に自分の顔を近付けた。

彼女は逃れようと身を擦るが、拘束された身体では中々それもかなわない。

「美しい王女よ……な。我の元に嫁いできた日のソフィアを思い起こさせる。だがあれとは違い、お前は他人の手に汚れておらぬ。

我が後に迎えるには丁度いい」

言葉の意味を飲めず、だが危険を感じる彼女は「ひいつ」と小さく悲鳴をあげる。

助けて欲しかった。

守らなければいけないのに、この恐怖から救われるのなら悪魔にでも魂を売り、助けて欲しいと願ってしまう。

「た……すけ……て……ヘンリイ、レティア……フェル・リユート」

守らなければ成らない者の名を呼びながら彼女はぎゅっつと目を閉じた。

バルガスはその様子に面白がるように彼女の着ていた服を力任せに破く。

「たすけてっ！いやあっ！！誰かあっ！！」

誰でもいい……そう願う彼女の瞼の裏に、あの王城で庇ってくれた黄金の髪の少年王子の姿が浮かぶ。

「……大丈夫、護るから」

自分たちを茂みに隠し、大人相手に剣を振るった彼。襲ってくる大

人たちを切り伏せているのに、不思議と彼のことは怖くなかった。  
「助けてっ！！ソルデイス王子っ！！助けっ！！」

バシッ

急に息子の名前を叫んだルミエールの頬をバルガスは打った。

そして先ほどよりももっと黒くて悪意に満ちた笑みを浮かべて彼女に押し掛かってくる。

「王女は『あの化け物』が好きみたいだが・・・やがてそんなことも感じられぬようにしてやるっ」

化け物・・・そう言われるソルデイスよりも、目の前の男のほうがよっぽどそれに近い。

ルミエールは最後の勇気を振り絞る。彼が自分に触れたら、自ら、命を絶つことを自分に誓う。

「ぎゃあああっ！」

突如としてあがった悲鳴にバルガスは顔をあげた。

ルミエールは少しだけほろっとしながら声のした法をみた。

尋問をするバルガスたちを取り囲むように巡っていた霧が声のした方だけ薄くなっている。鳴り響く悲鳴は一つだけでなく、今度は霧の濃いほうから響く。

「何事じゃっ！」

怯えて動けないだろうルミエールを放って、バルガスは先ほどまで自分たちの行いを見ていた貴族に問い直す。

彼は怯えたように「わかりません」と答えた。

「霧の中を自由に動きながらこちらを襲っているものがいます」

他の貴族の言葉に、バルガスは眉を釣り上げた。

他のロシキスの王子たちが来たのか・・・それともこの霧の境界を張った化け物が姿を現したのか。どちらにしろ狙いは自分のそばで怯えているこの少女に違いない。

ふたたびルミエールに手を伸ばそうとしたバルガスの喉元に向か

い、霧の中から刃が突き付けられる。

「チエツクメイトだ。バルガス王」

現われた見知らぬ男にバルガスは盛大に舌打ちした。

## 第十七話：王女への尋問（後書き）

ルミエール一世一代の大ピンチです。

しかし助けに来るのは白馬に乗った王子様でもなく、少々年を食った星替ラル・ソリユードですけれど。

当初の話ではフェルスリユートはもつと普通の人で、襲ってきたのもありきたりな（？）山賊だったのですが、彼が『特殊ちゃん』になっちゃった所為でバルガス王の登場とあいになりました。

## 第十八話：呪いを与える者

バルガス王の元に辿り着いたフェルスリユートは霧にまぎれて、見張り役の数人の咽喉笛を切った。

最初の一人だけ、注意をそらすために声をあげさせたが、他の兵士は誰一人として声をあげることもしせず、絶命してもらおう。

彼は一度目を閉じて、星の位置を再度確認する。

どれだけ視界が奪われ様と、彼の目にはしつかりと人の配置が見える。足元も見えない霧の森の中を足音を消して歩き、フェルスリユートは救出すべきルミエールの元に近づいた。

そのまま姿を現さずにルミエールを連れ去り、安全を確保してからここにいる者を始末し様と思っただからだ。

しかし彼の狙いを讀んだようにバルガスがルミエールに手を伸ばしたことによりフェルスリユートは行動を変更した。

彼は持っていた血塗れた剣をバルガスの咽喉元につきたて、ルミエールを掴もうとしていた手を止めさせた。

「チエツクメイトだ、バルガス王」

自分でも驚くほど冷たい声がフェルスリユートの口から出た。

あまりの恐怖と驚愕のためにルミエールの精神の絃が切れ、その場にくず折れる。

彼は片手で剣を構えながらも倒れる彼女の身体を抱きとめる。視線は彼らから一時たりとも離そうとはしない。

「その剣の意匠。ガイフィードの手の者か」

厄介な奴が・・・とバルガスは内心悪態を着く。

デイナーラーデ卿よりも深い確執のある相手の部下だ。

今は辺境地であるロシキスとの国境の警備をせよと命じ、いずれは国を他国に売ったものとして名誉を奪った上で処刑しようと思っ  
ている相手である。

その手の者が自分に剣を向けている。これは明確な反乱の意思の

現れた。

「若い剣士よ、それは奴の命令か？」

バルガスが問うと彼は目つきを鋭くし、更に切っ先を押し付けてきた。

瞳には許さないとでもいうような強い炎が灯っていた。

「あなたに呪いをかける手駒だよ……」

自分が導いている彼らには見せない冷たい氷のような表情。バルガスを睨みつけてくる目はどこか憎悪の対象であるソルデイスに似ていた。

フェルスリユートはやつと間近で見ることのこなつた諸悪の根源たる王の姿に、王女を投げ捨てても殺害したい衝動を必死に押さえながら一歩後ろへと下がる。

とにかく自分の腕の中で意識を失っている彼女を無事にレティア達の元へと届けなければならぬ。自分の護符を持つ3人ならば……そのうえ聖竜とも呼ばれるロシキスの国竜・ルシルヴィリアを連れた彼らならば、自分がついていなくてもこの先にある『里』へと入ることは可能だ。

フェルスリユートはあたり一面に散っているバルガスの手の者の星<sup>ひと</sup>を覚え、その星に罪の烙印を添付する。

気づかれないうちにそれを終わらせると、彼は更に2、3歩下がれば彼の傍にいた精霊たちに心の中で命令を下した。

(霧を……俺たちの姿を隠せ)

精霊達は彼の意思に従い、フェルスリユートの姿を隠すために深い霧を彼の前に発生させた。

それと同時に彼は身を翻すと、王女の身体を抱えあげてレティア達の星がある位置に向かって走り始める。

『兄さん……が会うのはまずいよ、兄さん死にたいの？』

(あれ……?)

こんな時には不似合いな悲しい瞳を持った弟の言葉が頭に浮かんだ。

そういえば彼は自分があの男に会うことをずっと嫌がっていた。出会ってしまったえば最後、フェルスリユートの未来がなくなってしまう、と。

『もし出会ったら【一人】で逃げて・・・』  
様々なキーワードを持つあの子の言葉が、今の状況を示していることなど百も承知だった。

(だからって、棄てるわけにはいかないだろう?)

この場にはいない少年に向かって彼は苦笑して見せた。

自分よりもずっとずっと深い傷を負いながらもずっとフェルスリユートのことを心配してくれていた異母弟。自分と同じ名前の一つをもつ彼に思いを馳せる。

彼はバルガス王たちと一定の距離を保つてから、抱えていた少女を下ろした。

「時の精霊、里へ連絡を・・・もうすぐロシキスの王子王女たちがそちらへ行く。迎え入れろ、これは俺からの命令だ、と」

フェルスリユートの言葉に精霊たちは礼をして森の奥へと消えていく。

彼は一つ息を吐き、涙を浮かべながら眠っている少女の意識を取り戻させるために彼女に近づいた。

## 第十八話：呪いを与える者（後書き）

フェルスリユート本領発揮です。思い切り精霊を操ってます。

彼の一人目の『弟』の言葉も出てきました。

名前はまだまだ出しませんが、もう誰なのかのわかる程度にヒントは出しています。

## 第十九話：霧の晴れる時

ルミエールは夢の中でもずつと震えていた。

近づいてくる足音、男達の下卑た笑い。舌なめずり・・・伸びてくる手、押さえつけられて・・・近づいてくる足音・・・

恐怖に打ち震えながらはっと目を覚ました彼女は霧の中から近づいてくる姿に「いやあああああっ!!」と大きな悲鳴をあげた。

破けて、肌蹴た自分の服の前を押さえながら、彼女は立ち上がると逃げるための一步を踏み出す。

「えっ！ルミエール姫っ!!」

恐慌に陥った彼女にフェルスリユートは慌てた。

彼女が駆け出したのは先ほど逃げたばかりのバルガスたちがいる方向だった。

彼は慌てて彼女の後ろを追いかける。だが恐怖に囚われた彼女を深い霧の中で追う事には限度がある。

たとえ、星の位置はわかったとしても再び彼らの手に落ちてしまうと厄介なことは言うまでもない。

彼は自分の周りにいる精霊たちに命令を下した。

「一時的でいい、霧を除去しろっ!!」

その霧が自分自身の命綱であることは彼も理解していた。

だが彼女を守るはその方法しかない。

洩る精霊を睨みつけた承させながら、フェルスリユートは彼女を守るために追跡を続けた。

ばさっばさっばさっ・・・

聞きなれた羽の音にレティアは笑顔で霧の空を見上げた。

白い霧よりも白銀に輝く鱗、彼女の相棒である国竜の姿がそこに

はあった。

『どうした、王女よ』

森の限られたスペースに舞い降りた竜はどこか焦った色を隠し切れない自分の騎乗者に問い掛ける。

「義姉上あねあねがバルガス王に浚われた・・・この護符を持つ者が救出を試みてくれていると思うからそこまで私と王子を連れて行って欲しい」

ルシルヴィリアは差し出された護符に瞠目する。

石はそこらにある普通の輝石だが、そこにかかっている時の魔法は天下一品　　こんな護符を作れるのは現在『時ソリユート』の名前を持つ二人しかいないだろう。

『王女よ、その護符を私の額につけてくれ・・・それからヘンリー王子、あなたに特別に私の背に乗ることを許そう』

この護符を渡した『彼』がこの二人に迎えに来させようとしているのならば、それには何らかの意味が存在するはずだ。

ルシルヴィリアは王子たちが乗りやすいように頭を下げた。レティアは慣れた仕草で彼女の肩口に上ると義弟ヘンリーに手を差し伸べる。

彼は少なくともめた荷物と共に普通の竜よりもずっと大きなその背中に乗った。

王子がしっかりと座ったことを確認してからレティアは彼女の頭の方へと移動し、その額に当たるようにフェルスリユートから貰った護符を乗せる。

ルシルヴィリアは目線で乗り位置に帰るようにレティアに指示を出し、護符に残った魔法から『術者ほしかえ』の位置を探り出す。

その時だった。彼女の耳に精霊たちの声が届いた。悲観と困惑、しかし従わなくてはならない命令に彼らは嘆いているようだ。

『おや・・・もうすぐ霧が晴れるぞ』

竜の声に二人は驚きの表情を浮かべた。

だが彼女はそれ以上語らず、大空へと飛び立つため羽を広げた。

時森の里では精霊たちの伝言に困惑していた。

ロシキス竜皇国の王子たちを匿<sup>かくま</sup>うのは吝<sup>ちかみ</sup>かではないが、それがまた政治的に自分たちを苦しめるのではないかという懸念も棄てきれない。

『これは、星替<sup>ラル・ソリュート</sup>様からの伝言です。時守の民である以上、あなた方に逆らう権利はありません』

精霊の言葉にその場にいた全員がごくりと唾を飲んだ。

彼らには自分の村から選出した里長がいる。

しかしそれは形式的なものだけで彼らが従<sup>したが</sup>うのは『時<sup>ソリュート</sup>』の名を持つものに対してのみだ。

かつて『時見<sup>リル・ソリュート</sup>』が自分の命の危機を回避するためにこの村にいたことがあった。バルガス王の虐殺の際、この時守の里を中心に惑いの霧を発生させたのは彼だ。

しかし彼は虐殺が自分のせいで起こったと責任を感じてそのまま村から出て行ってしまった。

自分たちはそのような事はない、あなたを迎え入れたことを後悔などしていないと言ったが、彼はそれを静かに否定してしまいそれ以来この里に顔すら出してくれない。

今度は『星替<sup>ラル・ソリュート</sup>』が自分たちに命令を下している。

これを断れば、彼らは『時を守る者』としての自分自身の存在を否定することになる。そんなことは避けたかった。

「わかりました。受け入れの準備を……」

その時、森を新たな伝令が駆け抜けた。その声に精霊と時守の民は耳を疑う。

「霧が……晴れる、だと？」

虐殺の時から張られていた霧の結界……それを外すことがどれだけの危険を含んでいるのか、彼らは身をもってしつていた。

『彼<sup>か</sup>の方<sup>かた</sup>の考えを信じましょう。里の男たちは村を守るための準備

を。女たちはロシキスの王女たちを迎え入れる準備を』

里の民達と話していた精霊はそれだけ告げると彼らの珠玉でもある『フェルスリニート星替』の元へと帰ろうとした。

しかしそれに追いつがるように里の長が「どうやって見分ければいい？」と問い掛けてきた。

精霊は少し考えた後、静かに笑う。

『王女たちは竜に乗って上空から現れます。森から徒歩で入ろうとする者で血を持たぬものなら、射殺しなさい』

「わかった」

その冷酷な言葉に彼らも笑うと、村を守るための準備を始めた。

## 第十九話：霧の晴れる時（後書き）

物語が大分風雲急を告げています。

森に霧の結界を仕掛けたのはフェルスリユートの弟と時守の里の奥で眠っている『予知見さきみの姫』、結界を作る際に死亡した『時のおば』の3人です。

## 第二十話：真実の名前

明けていく霧の中、彼女は追ってくる青年の姿を見た。

「ルミエール姫」

呼びかけてくるのは先ほど自分を襲った男ではない。自分たちを今まで守ってくれていたフェルスリユートだ。

それに気づいた彼女は、その場で足を止めた。

途端に立っているのができないぐらい足の力が抜ける。

「無事？大丈夫？」

そんな彼女の傍までくる青年に彼女は申し訳なくて、頭を深々と下げる。

「あ、はい。ごめんなさい。逃げたりして・・・」

霧の中、近づいてくる足音がすべてあの男の足音に聞こえた。怖くて、助けてくれた手から逃げ出したのだ。

「いいさ。別に。ただ逃げた方向がまずい。あっちへ・・・」

示した方向には森の切れ目が見えた。

服が破れてしまっている彼女のために、フェルスリユートは自分のシャツを脱いで肩に掛ける。

彼女には大きすぎるそれは破けてしまった個所を全部覆い尽くし、それだけでルミエールは安堵を得ることが出来た。

フェルスリユートに連れられてきた場所は崖のすぐ傍だった。

どうして？と目線でルミエールが問い掛けると彼は笑いながら「迎えが来易いから」と答える。

「レティア姫に国竜ルシル・ヴィリアを呼んでもらった。もうすぐ助けにくる。そうしたら3人で時守の里まで飛んでくれ。俺はなんとか追っ手を振り切って駆けつけるから」

自分で言っているのも空々しい言葉だと思った。

先ほどから自分の脳裏に浮かぶ光景。自分の死姿。

『死にたいの？』

かつて弟に問われた言葉、死にたくはないけれど・・・守らなくてはいけないから。

崖の反対側に先ほどから人の気配がする。星を見ると、これはバルガス王のものだった。

(これが、運命・・・か)

選択したのは自分だ。

だが、彼は救えなかったと悲しむだろうか。

「ルミエール姫、レティア姫の声が聞こえたらその崖の端へ・・・  
ルシルヴィリアが・・・」

「あぶないっ!!」

ルミエールの声にフェルスリユートはとっさに彼女の身体を抱きこむ。

「ぐうっ!!」

背中から下腹部に走る痛み・・・見上げた先にはバルガスのにやついた顔。だがそれを見て、フェルスリユートは勝ち誇った笑みを浮かべた。

「これで、あ・・・たも・・・りっぱ・・・な呪い、持ちだ」

サイラス王子や自分の家臣たちを使い時守の呪いから逃れて続けてきた国王をやっと呪いという折の中に捕らえることができる。そのことが、死に行く彼に取り、一番の僥倖であった。

フェルスリユートは仕上げにと、自分の腰袋の中から時守の護符を出し、未だ呆然としている王女の首にかける。

それは彼女が逃げ惑うときに最中に無くしてしまったものよりずっと立派で、どこか悲しんでいるように微かな光を放っていた。

「俺は、ラル・ソリュート星替・・・人の星を統べるも・・・の・・・俺の血で濡れた手は、お前にかかった呪いの証し」

これでロシキスの王子たちが里に入っても危険になることは無くなった。

呪いを持つものは里の周りに張り巡らしてある結界で、中に入ることもできないから。

「そして、俺は……呪縛を……とかれる」

自分の持つ星の意味　　死を自ら迎えることの出来ない『弟』  
を殺害することの出来る唯一の星だということ。自分が潰えれば…  
…『彼』は自らが望まない永遠の生を得ることとなる。しかしそ  
れは自分と自分の親友が待ち望んでいた『正常なる国家』を作るた  
めに必要なものでもあった。

バルガスは自らがその手にかけた男の言葉に、驚愕していた。

『ラル・ソリユード  
星替』とは彼がずっと探してきた異能者だ。

バルガス自身が持たない王の星を与えられる存在の一つ。彼に反  
抗的な光姫や未だ見つからない森の精霊王……彼らの変わりに手に  
入れようと画策していた。

「ルミエール姫……悪いけど、弟のために君をこの国に縛り…  
つける……記憶を封じ、る」

フェルスリユードは自分の腕の中で驚愕している少女の額に手を  
かざして、彼女の魂の中に彼女の記憶を封じる。

こうすれば、彼女はロシキスに戻るなどなく……いずれ彼の  
弟と一番言いタイミングで再会できるはずだ。

「封印の鍵は……俺の、本名……異母弟の口か……俺の2つの名前  
を聞いた瞬間、姫……は、記憶を取り戻せる」

「な……ま……え？」

自分の中にある星を替えられることに不安を感じながら、彼女は  
自分を守ってくれた青年の顔を見上げた。

その時、初めて彼の瞳の色が変わっていることに気づいた。それ  
はあの自分を守ってくれた王子とあまりにも似ていた。

「フェルス・ソリユード・ログア・エリファイド……俺は、ソルデ  
イ……スの異母兄だ……そして真名である……ラル・ソリユード・フ  
エルスを加え……君の封印とする」

告げられた名前にその場にいた二人は硬直した。

その瞳の優しさが、彼に似ていた。だから自分はこんなにも目の  
前の彼を信用したのだらう。

そして、フェルスリユートが『弟』<sup>ソルフェイス</sup>のためにと願うのなら、自分の星が替わることへの不安も消えてゆく。

「記憶……取り戻して、弟に逢……たら伝えて……約束を守れなくて、ごめんって」

彼女の最後の記憶に残るように告げて、彼はルミエールのすべての記憶を封印した。

バルガス王は未だ何が起きているのか理解できないように呆然と立ち尽くしている。

その姿ににいつと笑って見せて、彼は意識を失っている彼女の身体を血まみれのまま抱き上げて崖の方に進んだ。

先ほどからしていた羽音が近づいてくる。

太陽の光を反射する銀色の竜の巨体が一直線に自分の下へ向かってくる。

「義姉上っ！！フェルスリユートっ！！」

竜を駆るレティアの声が悲鳴のように響いた。血まみれの二人、遅すぎたのかという恐怖。

「迎え……がき……た……受け取れ……っ！！」

フェルスリユートは崖から落とすようにルミエールの身体を放り投げた。それをすんでの所でルシルヴィリアが受け止める。

自分たちの下へと戻ってきたルミエールの身体には一つの傷もなかった。ただ破かれた服と、フェルスリユートのものと思しき大量の血が彼女の身体を汚していた。

レティアは慌てて切っ先をフェルスリユートの方に返そうとした。

だが、彼は強い眼差しでそれを制する。

「すべき……ことを……し、ろ。ロシキスの王女たち……」

すべきこと……それは彼が望むように自らの命を守り、ロシキスに届けること。いくら子供3人とはいえ、竜騎士の資格をもたないものを2名も乗せたままでは国竜<sup>ロシキス</sup>でも国までは飛べないことは竜騎士であるレティアが一番わかっていた。

ならば行くべき場所は……王女はわずかの間だけ目を瞑り、静か

に決断を下した。

「このまま時守の里に入る」

その言葉に反対することなく、ヘンリーは下唇を噛んだ。

そうしなければやるせない思いが口からでそうだったからだ。

苦渋の判断を下した少年たちの姿を彼は静かに見送ると、自分の憎悪する相手に……自分の本当の父であるバルガスに向き合った。

「さあ……弟のため……に……父上、あんたには……死んで貰おう、か……」

フェルスリユートは未だ自失したままの男にそう告げると腰に携えていた剣を抜き放った。

## 第二十話：真実の名前（後書き）

やっとフェルスリユートの本名&役割の一部を書くことができました。

王城でルアンリルがフェルスリユートに彼女たちを託した時に、ソルデイスが微妙な反応をしたのはこのせいです。

人を信用はしても信頼はしないソルデイスにとり、フェルスリユートは数少ない信頼できる相手です。

## 第二十一話：星替の死

フェルスリユートが剣を抜いたことで正気に戻ったバルガスは、ぎろりと彼を睨みつけた。

「とつさの嘘か・・・」

「あいにくと、嘘じゃない。気に食わないけど、俺はあんたの息子だ」

先ほど後ろから刺された部分が痛んだ。

背中下部、腹の辺りの傷は大量の血を流しながら彼から生命を奪っていく。

「俺が死ねば、あんたは・・・2つの呪いを受ける・・・時守殺しと・・・子供殺し」

フェルスリユートの言葉に呼応して、惑いの霧がふたたび辺りを包み始める。

「嘘を！まだ突き通すつもりか」  
自分の存在を認めようとは「父」に彼は侮蔑の視線を送る。

「アンナマリア・・・その名前を聞いてもわからない？」  
フェルスリユートの口からでた母親の名前に彼は目を剥いて目の前の男を凝視する。

かつてバルガスが王子だった時分に、犯した女の名だ。

王座を棄てて消えた兄の変わりにバルガスを王にすべきかどうか、と有力貴族と聖司族の族長らが集まって協議している時、彼女の父親の後援を得るために浚い自分のものとした。

婚約者のいた彼女は父親の立場やいろんなことに挟まれ、結局発狂した。

そんな女が自分の子供を産んでいるとは思えなかった。

だが、こちらを見ている彼の顔立ちはどこことなくクラウド・ガリユーゼに似ている気がした。

では、何だというのだ？

これが自分の第一王子だというのなら、あの化物が自分の息子だ  
というのか？

そんなおぞましい事など考えたくなかった。

「嘘ばかりをつ！」

バルガスは血塗れた手で今度は彼の身体を前から薙ぐ。

血が失われ、上手く動けないフェルスリユートはそれを交わすこ  
とができない。

赤い血が自分の胸の辺りから零れる。腕も、切られたのか・・・  
熱い。

「時を・・・殺・・・せ・ば時の・・・呪いが・・・運命を・・・狂・  
・・・せ・・・子・・・を殺・・・せば・・・他・・・の子・・・に殺・  
・・・れる」

フェルスリユートは最後の気力でバルガスを指差し、呪言のよう  
に彼へと告げる。

それを厭って、バルガスはもう一度、剣を振るった。

「嘘だつ・・・嘘を・・・」

すべてを否定する言葉を発しつつづける自分の父親に、彼は諦めた  
ように目を閉じた。

もし彼が何も望まなかったら、彼の運命は変わっていただろう。

アーシア

光姫も森の精霊王も誰が王になろうと気にはしていなかったし、

ソルデイス

ソルデイスはあれでいて肉親の情が厚いから父親の王位を邪魔する  
真似はしなかつただろう。

だが彼は自分が得るべき以上のものを望んでしまった。

そして悲劇は蔓延し、今、彼自身に帰ろうとしている。

ソルデイス

霧が段々と満ちてきた。これは『時見』が張ったものよりも濃い  
霧だ。彼らを森の中に閉じ込め、里にも外にも出さないようにと張  
り巡らされていく。

その事に安心したのか、気力のみで立っていた彼の体がゆっくり  
と倒れる。

大地に、血が染み込むのが解かる・・・森が泣いている。嘆いて

いる。

その声を聞きながら目を閉じると自分を心配する大切な人の顔が次々と瞼の裏に投影された。

父親違いの弟・・・助けてあげられなかった恋人・・・そのお腹に宿っているだろう子供・・・祖父・・・義父・・・たくさん仲間たち・・・親友・・・そして、優しい異母弟の泣いている顔。

「ごめ・・・ん・・・リ・・・ル・・・約・・・束・・・」

王女に託した伝言を最期に口にして、彼は静かに息を引き取った。バルガスは息の根を止めたフェルスリュートの顔を見た。そして血塗れた自分の手を見た。

実の息子だと名乗る人物から掛けられた呪い・・・辺りは霧が満ち、自分につき従ってきた兵の姿も見えない。

彼は狂ったように笑うと、ふらふらと森の中へと消えていった。

突然訪れたその衝撃にソルデイスは顔を上げた。

心の一部が枯れていく・・・そんな感覚が全身を襲う。

「あ、ああ・・・」

胸を突き抜ける痛みは自分の大切な人の死が伝わってきているから。殺害したのは自分たちの父バルガス・・・彼はとうとうその手で『息子フェルス』を殺してしまった。

（死にたいの・・・って忠告したのに、一人で逃げると・・・）

それなのに、彼は死という道を選んでしまった。

目頭が熱くなり、嗚咽が止まらない。初めて本気で父を殺したいほど憎いと思ってしまう。駄目だと思っても大切なものを殺された狂気が自分を支配する。

「兄様・・・？」

急に涙を流し始めたソルデイスにシェリルファーナは驚いて声をかける。

この年の近い兄の泣き顔など生まれて初めて見た。いつも、どんな時でもずうっと笑っているそんな印象しかなかった。

「どうしたの？」

「なんでも、ないよ」

涙を流しながらそれでも笑う彼の姿が痛々しかった。慰めようと思ってもどんな言葉も出ては来ない。

「どうした？」

急にかげられた声にシエリルファーナは驚いて振り返る。

そこには昨日から兄と親しくなったスターリングが心配そうにこちらを見ていた。

「なんでも・・・」

「なくないだろ？」

とんとんとソルデイスの頭を撫でてやりながらスターリングは強く言い切った。

その態度は今さっき亡くしてしまった『フェルス異母兄』にどこか似ている、涙が堰を切って流れ出した。

その時になってグランテとクラウドも異変を聞きつけてソルデイスの元に訪れた。

スターリングの胸を借りて泣いている彼の姿に二人は衝撃を覚えた。

「グランテ・・・行き先の変更を・・・時守の里に向かっても意味が無くなった・・・数日、ここに逗留したら、そのままガイフィード將軍の元に向かう」

「ああ。わかったよ」

泣きながらもきちんと指示を出す彼にグランテはそれ以上訊かず、行き先の変更を一座の人間に伝えに行く。

驚いていたクラウドはすぐに我を取り戻すと、これ以上彼が隠している泣き顔を見ないようにしながらシエリルファーナを伴いその場を離れた。

## 第二十一話・星替の死（後書き）

フェルスリユートの最期です。今まで泣かなかったソルデイスが泣いています。

元々フェルスリユートは『死』を前提に書いていたのですが、書いている途中で殺してもいいのか迷ってしまいました。

しかし結局『彼の死』がないと話が進まないのは明らかなので、仕方なくこういう形の最期となりました。

## 第二十二話：竜王女達の決断

ルシルヴィリアは立ち込めてきた霧から逃げるように時守の里へと入った。

彼らが来るのを精霊たちから訊いていた里の村人たちは、現れた少年少女の姿に息を呑んだ。

「これは……」

「フェルスリユート……この護符をくれた人の血だ……バルガス王にやられた」

意識を失っているルミエールの容態を見た医者にレティアは悔しそうに報告する。

フェルスリユートが彼女に貸したシャツを開くと、無残にも破られたワンピースが目に入る。それを隠すように村の女たちがルミエールの身体に薄い布をかけた。

よくよくみるとルミエールの頬にも殴られた跡があった。

「……今から、王を殺してくる」

レティアは義姉の状態に再度深く怒りを燃やし、先ほどの場所まで戻ろうとした。

「駄目です……今、森は時と森の精霊により封鎖されました。いかな国竜だとしても入ることはできません」

遠見とおぼしき少女が飛び立とうとするレティアの腕を掴んで必死に止める。

「上空から森に入らず出ることはできませんが、森へ侵入すれば、敵とみなされます」

必死に現状を説明する村人たちに彼女はぎりりと、拳を握って怒鳴りだしたい衝動をこらえた。

「何があつたんですか？」

彼らの行動に不安を感じたヘンリーの問いに村人は目を伏せる。

「あなたに護符を渡したものの……『星替』が亡くなりました」

「フェルスリユートが、死んだ・・・」

ある程度は予測していたことだった。

あれほどの血をだしている人間を敵の前に置いてきたのだ。これは当然の結果だ。

「おや・・・この子は・・・」

ルミエールを見ていた医師が驚いたように声をあげた。

レティアとヘンリーは何かあったのかと、医師の下へと駆けつける。

「記憶を、封印されているね」

「な・・・っ」

驚く二人に反応せず、医者はルミエールの頭の辺りをずっと観察している。

「かけたのは『星替』殿だ・・・これは私たちでは外すことができない」

その言葉に王子たちは愕然とした。

彼が何を考えて、ルミエールの記憶を封じたのかは判別できないが、これでは彼女をつれて帰国することが出来ない。

内乱が起きたリディア程ではないにしろ、ロシキスの王族も大変不安定な立場なのである。

王位継承権を持つ者や、竜騎士の資格をもつ者はそうでもないが、ルミエールみたいに王位継承権もなく、竜騎士でもない王子・王女の立場は微妙なのだ。

現王・ライアンが庶出なのも影響しているが、現在ロシキスの貴族はヘンリーとレティア、それぞれを次代王の候補として派閥を作り始めている。

現在、レティアが正式に王位継承権の放棄を申し出ているから丸くは収まっているのが実状だ。

そのレティア王女派が欲しているのがルミエールだ。

彼女を自分たちの派閥の貴族と結婚させることにより、レティアが王になってもならなくても己らの保身を図ろうとしている。

更にそれを阻止するためにヘンリー王子派までもがまだ幼い少女を無理矢理にでも手に入れようと画策している。

（だからこそ、義父上はソルデイスに義姉上<sup>ルミエール</sup>を嫁がせようとしているのに」

ライアン王は国内の争い事の種となる自分の娘を、隣国に嫁がせることですべて丸く治めようとしていた。

幸いにもルミエールはすぐにソルデイスを好きになったので、これはこれでいいのかもしれないとレティア達は考えていた。

だが、記憶を失ってしまったては元の木阿弥・・・いやそれ以上の危険である。

「レティア義姉上・・・ロシキスまでこの事を伝えに言ってくれないですか・・・そして僕と姉はしばらくこの里へ留まることを伝えてください」

幼いヘンリーの申し出にレティアはぐうつと吐き出したい言葉を飲み込んだ。

確かにそれが一番最良の案だろう。彼女はこの森を飛び越えるための手段をもっているのだし、伝言して戻ってくることでだって可能だ。

だからといってまだ年齢的に幼すぎる彼をこんな里に置いておくのもどうかと思う。

それに何より次代の王に対する教育をどうやって受けさせるべきか・・・

「父様も、きちんとわかってくださるはずです。教育は・・・義姉上、教えてください」

きちんと何もかもを見据えている義弟の言葉に、レティアは「わかった」と短く答える。

それから村の長老と思しき人物に頭を下げた。

「義姉上と義弟をよろしくお願いします。私は一度、国へ戻りわが国の王に報告した後、すぐに戻ります」

「わかりました。護符と国竜さえあればいつでも入れるようにして

おきましよう」

村長の快諾にレティアは更に深く頭を下げた後、国へと戻るために自分の竜の下へと向かった。

## 第二十二話：竜王女達の決断（後書き）

迷走編の第二章にあたる霧の森の章が無事終わりました。

これではらくはルミエールとヘンリーの出番はなくなります。

それにしても、レティアとヘンリーは何気にフェルスリユートが『星替』であることを左に受け流しています。

## 第二十三話：王都の捕囚

サイラスは自分の身体に伝わる車輪からの振動で、自分が王都に入ったことを悟った。

どういう経緯なのか、自分を捕らえたオーランドは度重なる尋問はするが拷問と思しき暴力は揮<sup>ふる</sup>わなかった。

ただ食事は概<sup>おおむ</sup>ね少なく、1日1食・・・気が向いたときに与えられた。お陰で身体に力が入らず、少しずつ筋肉が落ちてきている。

ぼうつとしながら考えていると、馬車が止まった。

「出るっ！」

兵士の声に顔を上げるが、身体を起こす力が余り残っていない。

しかし声をかけた男はそれをサイラスの反抗だと思い、馬車に乗り込んで無理矢理立たせようとした。

「あ・・・」

だいぶ痩せた彼の身体に、兵士は態度を切り替えて肩を貸すような形で王子を立たせる。

もう一人入ってきた兵がサイラスの足に繋がれていた枷を外すと、彼らは「大丈夫ですか？」と小さく訊いてきた。

それにこくりと肯くと兵士達はサイラスの両脇で支え、馬車から下ろした。

「これは、どういうことだ？オーランド」

弱りきっているサイラスに出迎えに来ていたウルフレッドが刺すような視線で部下に問う。

オーランドはどうして怒られているのか判らないという風体だ。

せっかくバルガス王への情報を持つ王子を捕らえたのだ、尋問・拷問は当たり前だし、捕囚に食事なんか与えることなど勿体無い。ウルフレッドの命令があったから拷問は止めたのに、何が悪かったのか・・・オーランドの周りにいる者も彼と同意見のようでおろおろとしている。

「しかし、バルガス王の居場所を・・・」

「サイラス王子はそれを教えてくれたのか？」

自分の弁明を言おうとしたオーランドの声を遮り、ウィルフレッドがゆっくりと質問した。

「ええ、もちろん・・・」

食事を与えなくして3日目、サイラスは2箇所ほどの場所をオーランドに伝えていた。ウィルフレッドの許可が出たら自らその場所に出向き、偽者をつかまされたお礼をしてやろうと思っていた。

「それは嘘だな。サイラス王子が答えたとしても、いなかっただとしてもだ」

ウィルフレッドはオーランドが出そうとした書類を叩き落とすと、忌々しそうにそれを踏みじじる。

「何故・・・」

喘ぐように言うオーランドにウィルフレッドはこの2、3日で得た情報を彼に教えた。

「すでにあの革命の日に王と王子たちは別のルートを通ったことが判明している。この王子は兄弟たちと逃げていたはずだ」

サイラス王子の肖像画を見せながら、絵描きに彼の女装姿を描かせて検問をしていた官吏に見せたところ数人がその顔に反応した。特に馬車の内部を検査していた兵士から、彼が他に三人の少年少女と同じ馬車に乗っていたと言っていた。

これによりバルガスは従者のみをつれて山を越えて、王子たちは4人揃って門を出たと判断された。

「しかし、そのような者は一座には・・・」

その事実には驚愕したオーランドは自分が検閲した一座を思い出し、  
てみた。

居たのは馬車の外でごろ寝していた用心棒とサイラスに気を使っていた占い師の娘、後は踊子とそれを取り仕切る女主のみ。

確かに用心棒の顔を全部見たわけでもないし、荷物の中はざっとしか探っていない。

しかしどう考えてもシエリルファーナ姫が隠れる場所はあるだろう。だが、他の二王子が隠れる場所などなかった。

「先に出立したか・・・一座の中、上手く隠れたんだろう」

『隠れた』の言葉に、サイラスの肩が少しだけ揺れた。

それを見逃さなかったウィルフレッドはオーランドに嘲りの笑みを向けた。

「目と鼻の先にいながら、ソルデイス王子たちを逃したわけだ」

「今すぐ・・・一座を追います」

すぐにでも出立の許可を得ようとしたオーランドにウィルフレッドは呆れ、彼に背を向けた。

「遅いな・・・そんな危険なものと一緒に居るわけないだろう。適当なところで分かれているだろう」

彼は最後に一度、オーランドを振り返り冷たい視線で目前からの退去を命じる。

そしてサイラスを支えている兵士に指示を出す。

「サイラス王子は、アーシア姫の所へ連れて行け。それと食事の準備・・・消化の良さそうな物を食べさせてやれ。」

こんな弱っているには、詰問すら出来ぬ」

最後にイヤミの一つをつけて、ウィルフレッドは颯爽とその場を去った。

## 第二十三話：王都の捕囚（後書き）

第三章的な部分はサイラスの話です。時間的には霧の森の中でルミエールが襲われている途中ぐらいの時系列になると思います。暫くは、サイラス・アーシア・ルアンリルの行動で話が進みます。

## 第二十四話：光姫と呪われた王子

サイラスは朦朧とした意識の中、兵達に抱えられるようにしながら一つの部屋へと連れてこられた。

監獄か？と思いい顔を上げるとそこは綺麗に装飾された部屋で中には一人の少女が立っていた。

「ダイナラーデ卿からの指示でこちらに・・・」

兵たちの説明している声が遠くに聞こえている。

彼女は彼の状態に顔をしかめるとベッドへとサイラスを運ぶように指示をした。

兵たちは彼女の指示どおりにサイラスを運ぶと、丁寧に礼をして部屋を後にした。

「すぐに食事が運ばれます、それまでに果物でも食べますか？」

彼女はそういうと机の上に盛られていた果物籠の中からバナナを選んでサイラスに見せる。

「ごくりつと唾を飲み込んだ彼に、少女はにこやかに笑うとその皮を剥き、食べやすい大きさに千切ってサイラスの口に入れてくれた。ゆつくりと噛んで嚥下するとすぐにまた新しい欠片が口に入られる。2口食べたところで温かいお茶が出され、それで咽喉を潤すとまた欠片を口に入れられた。

「少しは元気になりました？」

バナナを一本食べ終えたところで、少女はサイラスに問い掛けた。「あ、はい」

その時になって彼は初めて少女の頭を彩る髪の毛に気付いた。

それは彼の大切な弟と同じ色で・・・その事実には彼の目つきが途端に険しくなった。

「あなたは、誰ですか？」

「ウィルフレッド・ダイナラーデの妹、アルフレッド・アーシアです」

突然敵意を剥き出しにしてきた少年に彼女は驚きながらも、きちんと名乗る。

だがその言葉に彼は更に警戒の色を濃くした。

「僕はサイラス・ジェラルド・・・あなたが王位を奪おうとしているソルデイスの兄です」

二人は互いの名前のみを知っていた。

王に無理矢理愛妾にされた光姫と王の寵愛をうけつつも陰で『道具』とも称される王子。

少年の素性を知った光姫はすうっと目を細めて、背筋を伸ばした状態で彼に宣言する。

「私は、王位など欲しくはない・・・私が望むのはソルデイス王子が王座に就かれる事のみ。貴方の方こそソルデイス王子の対抗馬と言われていたようですけど?」

アーシアの言葉にサイラスはぎつと彼女の顔を睨んだ。

「それこそ僕がソルデイスが王位に就くのを心から望んでるっ!」

体力がないのに立ち上がるうとした王子はすぐに寝台に倒れた。

やはりバナナ一本では体力が戻りきれないらしい。

だが、その様子を見ていたアーシアは小さく噴出してベッドに倒れこんでいる王子に布団を被せてやる。

「つまり、あなたも私もソルデイス王子に王位に就いて欲しいのですね」

先ほどのサイラスの叫びから彼の真意を読み取ったアーシアは穏やかな笑みを浮かべて見せた。

それに反応してサイラスも彼女に問い掛ける。

「弟を知っているのですか?」

彼の率直な問いに彼女は「ええ」と笑ってみせる。

「王位について私を自由にしてくれると約束してくださいました。それが私にとり、最大の心の支えだったので」

胸に手を置き、ソルデイスの言葉を思い出している彼女はその容

姿には似合わぬほど大人びて見えた。

「俺も弟がいなければとつくに自我が崩壊していた。あいつだけがソルデイスの王なんです」

自分とは違う形ではあるもののバルガスに傷つけられ、ソルデイスに救われたという点で彼らは同類だった。

そして今はソルデイスを王位につけると同じ願望を持つ同士だ。

「王子は。無事ですか？」

声を潜めて控えの間にいる侍女に聞こえないように問い掛けた彼女に彼は「もちろん」と笑ってみせる。

その言葉にアーシアはほろりと胸を撫で下ろした。

「お食事の用意を運び入れたいのですが、よろしいでしょうか」  
短いノックのあと、訊かれた言葉に彼女は「どうぞ」と返す。

それと同時にドアが開かれ、複数の食事が運び込まれてきた。ウイルフレッドの指示が徹底したその食事は確かに消化にいいものばかりだ。

「まずは体力を戻さないと、助けに行くこともできませんよ」

アーシアの言葉に彼は「そうですね」とあっさり肯定し、差し出された食事を次々に平らげ始めた。

彼はわりと食が細いほうなのだが、さすがに断食に近い状態に置かれていた身体はエネルギーを欲しがった。

だがある程度食べると、さすがに体が苦しくなりそこで食事は終了となった。

「後は睡眠・・・ですわね。私は私の寝台がありますので、王子はこちらで休んでください」

母よりも母らしい優しい優しい対応に、サイラスは「ありがとう」と心からの礼を言うと深い眠りに身をゆだねた。

## 第二十四話：光姫と呪われた王子（後書き）

サイラスとアーシアの出会いです。やはり二人とも相手を警戒することから始めています。

ただ目的は一緒の二人ですので、これから仲良くなれるでしょう。また二人ともに恋人・思い人がいるので絶対に恋愛には走りません。また王都の中にはルアンリルを始め、物語の中枢に関わってくる人が監禁・軟禁されています。

それをどうやって王都から脱出させるのがこの章のテーマです。

## 第二十五話：つき付けられた真実

サイラスが目を覚ますと部屋の外はすでに闇に包まれていた。どうやら大分寝ていたようだ。

辺りを見回すと部屋の隅で邪魔にならないようにアーシアが本を読んでいた。表紙から察するに小難しい兵法書のようだ。たおやかな容姿からは考えつかない本を彼女は真剣に読みふけている。

「あの・・・」

「あ、目が覚められましたか」

声を掛けられてようやくサイラスが目覚めたことに気付いたアーシアは読みかけの本をテーブルに伏せ、彼の元に来てくれた。

「つい先程、夕餉が届いたところです。温かい内に召し上がりませんか？」

確かにベッドの脇には料理の乗ったワゴンがあり、まだ湯気がたっていた。それに正直な腹がグウウと鳴って答えた。

途端に彼は顔を赤らめる。視界の端でアーシアを確認すると彼女はサイラスに顔を見せない様、そっぽを向いていた。

しかし、その肩が笑いを堪える為に震えている。

「・・・いただきます」

彼が伐の悪そうな顔で返事をする、彼女はなんとか笑いを治めてサイラスに給仕する。

アーシア自身も食事はしてなかったようで、一通りの給仕を終えると、ベッドの脇の椅子に座りながら食事を始める。

同一の目的を持っているためか、然程さほど気負いせず話が出る。その事実互いに少しだけ不思議に感じる。

「地下にはルアンリルも捕らえられています。いずれはあの子も開放し、私はこの城を去るつもりです」

アーシアの情報にサイラスは少しだけ憂いのある顔をした。

やはりルアンリルは自分たちと別れた後、無謀にも単身でウィル

フレッドに向かつていったのだろう。そして自分たちとは違う待遇で捕らえられている。

場所を聞くと、そこは魔術師専用の牢獄で、その上精霊との交信を封じる手かせを嵌められているという。

それにしても、何故自分は牢に入れられないのだろうか。サイラスは再び疑問に思った。

幽閉されてもおかしくない立場であるというのに思った以上に拘束らしい拘束はされていない。

「母は？」

「王妃さまは御自室での軟禁だと聞いてます。一応、あんな兄でも王族には経緯を払うみたいです」

アーシアはサイラスの質問に出来る限りの確に答えをくれた。

城内を自由に動けるようになったものの、彼女自身、常に監視されている状態だ。その中で知りえた情報を元に、彼らは次の行動をどうすべきか考えていた。

「ほう、仲良くなったみたいだな」

アーシアの思考を遮るように、からかうような声が響いた。

食事を殆ど終えたところでノックもなくウィルフレッドが入ってきたのだ。

「部屋の住人の許可を得ず入ってくるとは失礼ですよ。兄上」

アーシアは先ほどまでのにこやかな雰囲気や潜め、まるで天敵にあつたように威嚇した。

「叔母と甥が仲良くしている姿などこれぐらいのことをしないと見せてくれないだろうからな」

ウィルフレッドはそういうと二人で同じテーブルから食事をしてる二人を観察した。

彼女たちは彼が発した言葉の意味が掴めないようで、きょとんとした風貌で彼を見上げていた。

やがてサイラスの顔が少しずつ青ざめ始める。自分が聞いた時見と星見の予言を出来る限り思い出そうと頭の中の引出しを拘束で展

開する。

彼らが言ったのは『王妃の生んだこの一人だけが王の子ではない』  
・・・『クラウスは第二王子』の二つだ。

自分自身、自分の出生を疑ったことはなかったため、ソルデイス  
があのだ狂った王の血を受け継がないと思っていた。

しかし、もし、あの王に他に第一王子がいたら・・・それを、あ  
の男が知らないとしたらどうなるのだろう。

「ぼくが・・・ソルデイスの・・・不幸の、原因・・・？」

考えていると吐き気がしてきた。胃がせり上がり先ほど食べた食  
事が逆流しそうになる。

「兄様・・・いったい、何を仰りたいのです？」

一言呟いて青ざめきつたサイラスにアーシアも言葉の意味を察し、  
急に突拍子もないことを言い出した兄に問いただした。

「ソフィア王妃は、結婚する前に一度だけ私と関係を持った。その  
時の子供がサイラスだよ」

突きつけられた現実にサイラスは悲鳴に似た叫び声を挙げ、机の  
上に残っていた料理を床に投げつけた。

**第二十五話：つき付けられた真実（後書き）**

ウィルフレッドがサイラスを仲間に入れようと画策しています。しかし、あまり重大な真実だったため妹と息子はパニックを起こしています。

## 第二十六話：従うこと、従わないこと

急に暴れ始めたサイラスにアーシアは慌てて彼に駆け寄ろうとした。

しかしそれよりも早くウィルフレッドが彼に取り付き、その身体をベッドに縫い付ける。

「やはりな、私と同じ瞳の色だ。．．いや、どちらかと言えばバルガス王に殺された私の父と同じ瞳の色だな」

サイラスの目が大きく見開かれた。

確かに黒い髪の方こうに見えるのは王族には珍しい薄い緑色の瞳だ。

母クラウスンエリルや弟バルガスソルデイスが持つ深い緑色でも、父や弟が持つ王家特有の水色の瞳でもない。

サイラス自身の頭を彩るのが明るい金色の髪だから、色が薄く見えるのだろうと周りに言われていたが．．．こうしてみると彼と自分の瞳の色はそっくりだ。

瞳の色を確認して満足したのか、彼はサイラスを開放しアーシアの元へと向かう。

「近々、王妃をここに連れてきた上で、サイラスにソルデイスの居場所を話して貰うつもりだ。それまでに、私たちに協力するように指導してくれ」

ウィルフレッドはそれだけ言い残して、部屋を出た。

驚きを隠せないままアーシアはサイラスへと視線を動かした。

彼は開放された時のままの格好でただ呆然と天井を見詰めていた。その口元は幾度となく「うそだ、うそだ」と音もなく繰り返している。

それだけでこの王子が全く真実を教えられていなかったことが明確に判る。

「サイラス王子．．．あなたも、この城から出たほうがいいみたい

ですね」

アーシアは人の気配が遠ざかるのを確認してから、落ち着いた口調できつぱりと彼に進言した。

光姫の突然の言葉にサイラスはゆっくりと彼女へと視線を移す。

「出て行って、どうしろと？」

自分がダイナラーデ卿の息子だと知ってしまった上で、弟たちの元へ戻るなど出来ない。いくらあの優しい弟が知らない振りをしてくれても、あの子から王座を奪った男の息子であることはしこりとなって残るはずだ。

あの弟の下にもどれないなら、自分はここを出ても行く場所などない。

だからといって、急に自分の父親だと名乗りを上げた男に協力する気はもとよりない。

いつそ、あの捕まった瞬間に……いや、王都まで辿りつく間に殺してもらえればよかった。そうすればソルデイスに更なる苦悩を与えずに済んだ。

「あなたは、誰の臣下ですか？」

「いずれ、王となるソルデイスの……」

何を決まりきったことを聞くのだろうか、サイラスは苦悩で淀んだ瞳のまま彼女に訝しんだ。

「そう、私と同じくソルデイス王子の臣下のはず。ならば王子の下に行けなくても、王子の力となることを考えることが出来るはずですよ」

アーシアとてウィルフレッドの妹であるために今はこの城の中にいる。

だが、王城の中で助けるべき者……ルアンリルを救出したらさっさと出て行くつもりだった。

「兄上がどのように計らうかは判りませんが、あなたにもある程度の行動の自由が与えられるはずですよ。ならばソルデイス王子の有益な情報を得たり、人質となっている者を開放するぐらいできるでし

よう」

サイラスの頭に浮かんだのは弟の恋人候補でもあるソルデイスの教育係の顔だった。

次いで母親の顔も浮かんだが彼女を逃がすことが本当にソルデイスの有益になるのかを考え、浮かんだビジョンを消した。

「従う振りをして、手はずを組むこともできる？」

サイラスの言葉にアーシアはにっこりと笑う。その屈託のない笑いが曲者だとサイラスは改めて実感した。

「逆らうことばかりが脳でもなし、従うことだけが道ではない」

現在、アーシアは所々で逆らいつつも兄の命令を許諾している愚かな姫を演じている。

「有名な軍略家の言葉ですね。僕もそれに従いましょう」

取りあえずはシヨックを受けて立ち直れない王子を、やがてはソルデイスに対抗意識を燃やしている様に演じる、誰にも悟られないようにそのすべてをやり遂げなければならない。

しかしそれが弟を助けるための力となるならば、やり遂げるだけの意志はある。

サイラスは改めて自分の中で強く誓いを立てると、しっかりとした瞳で未来を見据えた。

第二十六話：従うこと、従わないこと（後書き）

サイラス、恐慌に陥ってます。最初つけたタイトルは『恐慌する王子』でした。

アーシアはもともと軍略を得意とする少女なので、著名な兵法書等はすべて読み終えています。

もちろん、サイラスは王子教育の一環としてこの手の本は大量に読まされています。

## 第二十七話：牢の中の魔術師

ルアンリルは僅かに見える空を見上げながらいろいろと考えていた。

囚われてからの日数は一応覚えている。最初のうちは頻繁にあった尋問がここ最近ではめっきり回数が減っているのは、他の情報源を見つけたからだろうか。

それとも王子の位置が知れたのか・・・

アーシアはルアンリルから情報を引き出す振りをして逆に情報を差し入れてくれた。

彼女自身が王城に軟禁されている状態なので得る情報は少ないようだが、それでも何も知らないよりはずっとましだった。

何よりも王子たちがまだ見つかっていないという情報はルアンリルにとって一番有益なものであった。

そのお陰でこんな牢獄に閉じ込められていても希望を失わずに済んでいる。

がしゃ・・・・・・・・

隣の部屋の男が寝返りを打ったのか、枷が床にすれる音がした。

そういえば、余り隣の住人のことなど気にしたことはなかった。

自分と同じく魔術師の入る牢に入れられているのだから、聖司族の一員だろう。

だが精霊族とは違うオーラに思える。彼は入ったときから尋問もされず、ただずうっと眠っているだけだ。

食事の時だけは音がするから生きているのだろうが、他は終始眠っている。

「隣の人、聞こえますか・・・・・・・・？」

興味をもったルアンリルが小さい声で隣に問い掛けてみた。

途端に寝息が止み、男がこちらへ近づいてくる気配がした。

「私は、ルアンリル・フィーナ・エディンと言います。あなたは……」

「ケイシユン・ロンファ」

問い掛ける声に重ねて、男の声が名乗った。その名前に彼女は驚いた。

「龍族の方でしたか……」

龍族はロシキスの竜とは違い、常に人型を取り、能力を出すときだけ本来の龍の姿に戻る。翼を持たず、思念だけで巨体をうねらせて浮かぶその姿は雄大だ。ロンファの姓を持つのは確か龍族でも族長クラスの力を持つ者のはずだ。

(それにしても……)

「なんで、空を飛んで逃げなかったのかって思ってるだろう？」

ルアンリルの心を読んでいるかの用に的確にケイシユンはルアンリルに訊ねてくる。

確かにそれが不思議だったので、ルアンリルも「ええ」と短く肯定した。

「パーティがかつたるくて、バルガス王に適当に挨拶してから休憩室で眠ってたんだよ……そして次に目が覚めたときにはこんな所だった……俺、バルガス王に何かしたかね」

どうやらこの男は寝ていた所をそのまま捕縛された上、説明もされずにここに繋がれているらしい。

内乱も知らないような口ぶりに、彼女は思わず呆れてしまった。

「ウィルフレッド・ディナラーデが反乱により王城を制圧……バルガス王並びに諸王子たちは現在逃走中です」

ケイシユンは言われた意味がわからずに何度か口の中で反芻すると、途端突拍子のない声をあげた。

「なんだあ！……、いつたい、なんだってんだ……」

自分が眠っている間にどうやら世界は滅茶苦茶に変化していたらしい。

確かにそんなことになっていたら、王子側の最たる人物であるルアンリルや、どちらにもつかないだろう龍族の族長に近い人物など捕まって当たり前だろう。

「でも、デйнаラーデ卿ってたしか、聖長の……あんたの従兄じゃなかったか？」

ルアンリルは悔しそうに「そうです」と肯定する。その声を聞いてケイシユンは、何かを感じたのか「大変だな」とルアンリルを気遣ってくれた。

ガチャリ……

牢へと繋がる通路の扉が開く音がした。

また、アーシアが来たのだろうかと思っただルアンリルはそこに現れた人物に愕然とした。

「久しぶりだね、ルアンリル……」  
それはあの時別れた王子の顔だった。

なぜ、サイラス・ジェラルドがここにいるのか。

そして彼がここにいるということは他の王子たちも捕まったという事なのか……。

しかしそこでルアンリルは首を傾げた。

彼は手かせも何も嵌められては居ない。虜囚としての証がどこにも見当たらないのだ。

「驚いているようだね……あいにくとクラウドも、ソルディスも、僕を見捨ててどこかへ逃げてしまった。僕だけ捕まるように彼らが仕組んだんだ」

「な……っ」

笑っているのに、ぜんぜん笑っていない顔。どこか薄ら寒いその表情にルアンリルは言葉を飲み込む。

どうして彼がこんな表情をしているのだろう。それに、彼らがサイラスを見捨てたとはどういうことなのだろうか。

呆然と見上げてくるルアンリルの牢の前でしゃがんだサイラスはルアンリルの整った顔を自分の方に向け衝撃的な言葉を紡いだ。

「どうやら僕だけがバルガス王の子供でないとはバレたらしい。内乱を起こした首謀者の子供など、いらないうってことかな？」

自分の知らないその事実ルアンリルはただただ目の前の王子の顔を凝視するしかできなかった。

## 第二十七話：牢の中の魔術師（後書き）

久々にルアンリルの登場です。サイラスの性格が一部壊れています  
があまり気にしないで下さい。

ロシキスの竜と聖司族の龍は別の生き物です。

竜は「エルマー 竜」の物語や「P f f」の歌に出てくる西洋風  
の背中に羽の生えたトカゲみたいな生物。

龍は「まんが日本昔ば し」のオープニングで龍の子太郎が乗って  
いるのや、「ドラゴ ボール」のシ ンロンみたいな東洋風の長い  
身体の龍です。

竜は最高位のものしか人型に変身することができず、常にとかげの  
でつかいののままですが、龍は普段の生活は人型で過ごし、強大な  
魔法を使う時のみどどんっと大きな身体（聖体）になります。

## 第二十八話：託された物

喉が渴くような衝撃が身体を襲った。

サイラスの言葉を咀嚼し、理解した所で、ルアンリルは喘ぐように彼に尋ねた。

「あなたが、ウィルフレッドの息子……？」

「どうということなのだろうか、と見上げてくるルアンリルの目に、サイラスはつい先日の自分を重ねた。自分もウィルフレッドから告げられた時、こんな顔をしたのだろうか。」

「そうだよ……ルアンリル。僕は父に言われて、君に協力をしてもらうために来たんだ」

彼はそういうと、ルアンリルの後ろ髪を撫でる。弟へ託した長い黒髪はもうそこにはない。変わりに若草のような柔らかい感触が掌をくすぐる。

愛撫するような指の動きが後ろの首筋を撫で、ルアンリルはびくりと身体を震わせた。

「僕はこれから他人に遠慮するのをやめるよ。欲しいモノはためらわず手に入れる。取りあえず弟の恋人である君とか……」

ルアンリルの後頭部を撫でていた手がそのまま頭を固定する。

近付いて来るサイラスの顔をルアンリルは噛みつかんばかりに睨んでいる。彼はそんな彼女の表情に苦笑しながら、更に顔を近づけた。

そして唇が触れる手前で小さく呟いた。

「君の精霊が作る大きな火柱が見たかったな。こまですれば見せてくれると思ったのに残念だ。いつかあの火柱を僕と叔母のアーシアのためにあげてくれないかい？」

「私の主はあくまでもソルディス王子です。あなたのための火柱はあげません。」

あげるとしたら自分のためのものです。今の私は閉じ込められて

いて気分が悪いですからね、機会が出来ればすぐにでも城を焼く炎をあげますよ」

ルアンリルの言葉に彼は詰まらなさそうに立ち上がると控えていた衛兵と共に牢から出る階段へと向かう。

そこには大きな姿見があり、彼はそれを1、2秒眺めてからその場を去った。

ガシャンッ！

大きい音と共に牢の中に静寂が訪れた。

静かに聞き耳を立てていたケイシユンが心配そうに隣の牢の様子を窺っている。

「それにしても、サイラス王子がダイナラーデ卿の息子とはねえ・・・何か前に遠めで観察したときは印象が違う気がするけど」

前にケイシユンが見たのは心が壊れそうになりながらも必死に耐えているガラス細工の王子だった。

しかし今の彼はどこか壊れてしまっていて、暗い雰囲気を作っていた。

「そうでもないですよ、サイラス王子はお優しい方です」

ルアンリルはそういうと自分の服の裾を引っ張り、先程サイラスが首筋を撫でながら忍び込ませた金属片を取り出す。

チャリチャリチャリ・・・

出てきたそれは複数の鍵だった。

その内容を一本一本確かめて、自分の枷と同じ番号の鍵が見つかる。

それを何とか唇で拾い、四苦八苦しなから枷の鍵穴に差し込む。今度は歯を使って穴の中でまわすとかちゃっと鍵の開く音がした。

途端に切れていたはずの精霊との回線が繋がってゆくの解かつ

た。炎の精霊が嬉しそうにルアンリルの身体に纏わりついた。

足についている普通の枷も外した上で、床に散らばった鍵をすべて拾う。鍵の中で比較的大きなものを見繕い牢の鍵穴に刺すと、いとも簡単に牢は開いた。

ルアンリルは残りの鍵を持って隣の牢の前に立った。

「優しい方だからこそ、ああいう形でこれを届けてくれたんですよ」  
ルアンリルの手にある鍵を見て、ケイシユンも彼の行動の意味がやっとわかったようだ。

そうなると彼の言葉の意味も違っていると考えるべきなようだ。

弟たちが自分を見捨てたというのは兄弟たちは無事に逃がしたという意味に、そして自分のために炎の柱を上げて欲しいというのは・

・

「今夜、盛大なパフォーマンスをして逃げますよ。たぶん、サイラス王子とアーシア姫もそれに乗じて城を出るでしょう」

ルアンリルはそういうと枷用の鍵をケイシユンに見せる。彼は自分の腕に嵌るそれを外して貰おうと拘束された手を差し出した。

カチャリ・・・と軽い音がしてケイシユンの枷も外れる。それと同時に何処からか現れた風と雨の精霊が彼に思い切り抱きついた。ルアンリルは彼分の鍵をすべて渡してやった。

サイラスが二人分を持ってきたのは、どちらがルアンリルの鍵だか判らなかつたためだろうが、いい取引材料になってくれると思っ  
てもいた。

「それじゃ、俺はあんたと一緒にパフォーマンスをしてから一緒に空を逃げてやるよ」

全てのかせを外し終えたケイシユンの言葉に呼応して、彼の額を飾る三枚の鱗が光った。

## 第二十八話：託された物（後書き）

題名の意味はそのまんま『託された鍵<sup>もの</sup>』です。

鍵はルアンリルとの謁見の後、アーシアが手に入れていたものです。彼女だと知られずに渡すことができなかったので、サイラスが渡しました。

別にサイラスはルアンリルにその手の感情を持ったことはありません。すべてが演技です。

## 第二十九話：夜を待つ二人

ルアンリルとの接見を終えたサイラスは足早にアーシアのいる部屋へと戻った。

見張りがついていているものの、彼の行動はさほど制限されていない。それ以上に不思議なのが、自分が尋問されないことだ。

現在、王都でソルデイス達がどんな格好をし、何処に向かっているのか知っているのは自分<sup>サイラス</sup>だけだろう。

それなのに最初に簡易な質問をされただけで、『後は体力の回復を待つてから』だと後回しにされている。

これならば、オーランド卿の馬車にいた時の方が酷い目にあっていたと断言できる。

ここは城の中でもウィルフレッドが人の出入りを制限している所のように侍従や侍女以外、誰とも擦れ違わない。

そしてここに軟禁されている3人はある意味、ウィルフレッドの家族とも呼べる近さの者たちばかりだ。

妹であるアーシア、息子であるサイラス・・・そしてかつて関係のあった王妃・ソフィア。

その名前を思い出して、サイラスは顔を顰めた。先日再会した母の驚愕する顔が頭を過ぎったからだ。

サイラスは拳を強く握り、豪華な壁紙で彩られた壁を殴る。

「自分勝手すぎる・・・だろう」

サイラスは密かに母のしたことに腹をたてていた。

それを表に出さなかったのはアーシアの助言があったお陰ともいえるだろう。

頼りになる叔母は、事ある毎に的確なアドバイスをくれる。王と結婚する前に身ごもり、厚かましくも王の子として生んだあの母とは大きく違う。

あの母が早く自分<sup>サイラス</sup>が王の子ではないと伝えていたら、こんな悲喜

劇は起こらなかつたはずだ。すべてを秘密にすることで自分の保身を図っている姿は到底美しくなかつた。

(それでも・・・子供を守ろうとはしてくれる、か)

内乱が起こると同時に大事な息子も娘も連れずにさっさと逃げたあの男よりはマシなのだろう。

サイラスは早足でアーシアの部屋まで行くと、控えの間をそのまま通り過ぎ、彼女の部屋の扉をノックした。

「どうぞ」

許可が下りるとすぐにサイラスは部屋に入り、丁寧に施錠した。振り返るとアーシアは丁度、お茶の準備をしているところだった。

「ただいま戻りました」

サイラスは彼女に促されるまま椅子に座ると、入れられたばかりの紅茶の馨しい匂いを堪能した。

お茶の準備を終えたアーシアはサイラスの向かいに座ると今先ほど逢ってきた従弟妹の様子を尋ねる。

「ルアンリルはどうしてました？」

「元気そうでした。僕がダイナラーデ卿の子供だと告げたら驚いていました・・・」

当然の反応だと思う。当事者の自分もだが、内乱前の王城では誰もがサイラスを『バルガス王の寵児』だと思っていたのだから。

だがすぐに彼女は何か気付いて、それを否定する言葉をあまり発しなかつた。

「アーシア姫が手に入れた予備鍵もしつかりと渡しました」

どうやって秘密裏に渡したかはご夫人であるアーシアには内緒だ。常にそんな風に女性を誑し込んでいると思われるのはいやだからだ。「準備はできていますの・・・？」

「ええ」

あの逃亡の途中で自分たち兄弟はこの城にいるときよりもずっと多くの会話を楽しんだ。

特にクラウドが常に下町に遊びに行っていたという話は、とても

興味深かった。どの通路が見つかりにくいとかクラウドスが故意に壊して作った通路などの話をサイラスはもちろん、ソルデイスやシエリルファーナまで真剣に聴いていた。

人目のつかない夜の内に、数度に分けてそのいくつかの道を確認しにいった。

クラウドスが利用していたのは城の中の侍従たちが利用する裏方用の通路らしく、本当に兵の目に付きにくくなっていた。これならばきちんと外に逃げられる。

後は夜でもまばゆい光を放つアーシアの髪だけだが、それはソルデイスと同様光の放出を一時的に押さえる魔法を使えるということだった。

「火の柱と・・・もしかしたら、嵐まで巻き起こしてくれるかもしれません。服装には防水性の外套を着てください」

サイラスはそれだけ言うとかツッキーを摘んで咀嚼し始めた。この王子の仕草はすべてが優雅だ。

アーシアが言葉の意味を取れずに見つめていると、彼はゆっくりと振り返り笑って見せた。

「ルアンリルの隣の牢に入っていたのは確か時期龍族の長ケイシュン・ロンファ殿だと思います。彼の分も鍵を残しておきましたので、上手くしたらルアンリルと一緒に暴れてくれるかもしれません」

ソルデイスの誕生の宴で主役である彼が席を外してから現れた龍族の時期族長は適当に挨拶を済ませると休憩できるところを求めてすぐにどこかに行ってしまうた。

付いてきていた彼のお目付け役に訊ねると彼は今『変体』・・・つまり蛇で言う脱皮の前の時期で日中18時間ぐらい眠っているのだそうだ。

それなのに、宴に引つ張り出された彼の唯一の抵抗がさつさと休憩室で眠ることだったようだ。

そして、彼は熟睡したまま牢へとつながれた・・・というところだろう。

ともかく、龍族は自由を愛する。開放してあげたら何がしか暴れてから自分たちの村へと戻るはずだ。

騒ぎは大きいほうがいい。そうすれば自分たちの方が見つからないし、注意が散漫するため騒ぎを起こした人間も捕まえにくい。

とにかく、決行の夜を二人はただ静かに待っていた。

## 第二十九話：夜を待つ二人（後書き）

意味深なタイトルですが実際はそれほど深くもないです。別名、アーシアとサイラスのどかなお茶会でした。

### 第三十話：決行の夜

ルアンリル達は一端外した枷をまるで外れてないかのように装いつつ、夜を待った。

食事を運ぶ侍女たちはあまりこいう仕事に慣れていないために、枷で繋がれている人物を見ないようにしてその場を去っていく。その行動も誤魔化すのに一役買ってくれた。

体力をつけるために食事をきつちりと食べ、ただ只管夜を待つ。

夜の帳がすっかりと窓を・・・城を・・・世界を覆い尽くした頃、ルアンリルは手の枷をもう一度外した。

隣の牢でもそれを外す音が聞こえる。

自由を何より愛する龍族が拘束されていることはよっぽど苦痛だったのだろう。前哨戦ともいえる魔術のオーラが牢屋の中から洩れてきた。

二人は揃って牢の外に出ると階段の方に走る。

ルアンリルはそこで一端足を止めた。

昼間、サイラスが見ていた鏡。

あの王の間やその他の通路に通じていた鏡と似ている。

もしかして、と思いルアンリルはソルデイスがしていたように順番に鏡の淵を押しした。

「おい、何やって・・・」

突然のルアンリルの行動に文句を言おうとしたケイシユンの耳にカチリ・・・と鍵が開くような音がした。

「秘密の通路です・・・こんな牢にも通じてるとは思いませんでした。が・・・」

ルアンリルはさういふと鏡の裏の部屋を確認する。適当に整理されたそこには数本の剣と路銀が用意されていた。

「少し拝借しましょう」

お金を借りたことはソルデイスには後から断りを入れればいいだ

るう。

ケイシユンもそれに習って部屋に入る。立てかけてあった剣の中から自分が使えそうなものを取り出すと、腰に携える。

ルアンリルは近くの松明に明かりを灯してから入り口を閉め、これもソルデイスがやっていたのを思い出しながらきちんと閉める。

それから反対側の扉に向かいその横の壁にかかった鍵を取る。鏡の扉とは違い重たい構造の扉を開けると上りの階段が目に入った。

ルアンリルはケイシユンを促して階段の方へ移動すると思ひ扉を閉め、施錠した。

「とりあえず、下りましょう。どこか適当な部屋に辿りつける筈です」

その言葉にケイシユンは肯くとルアンリルから松明を受け取りどこまでも続く階段を下り始めた。

牢からの道は全く分岐もなく一つの部屋へと通じていた。鏡の中から覗いてみるとどうやらどこぞの倉庫の一角のようだった。

ルアンリルは先ほどの鏡の扉のように開けようとしたが、押すボタンがない。

「その鍵じゃないのか？」

先ほどの部屋を出るときに使った鍵を示されたルアンリルは今度は鍵に対応する穴を見つけようとしつかりと扉を探り始める。

鍵穴は扉の下のほうにあった。この通路に入るときに使用した鍵を差し込みますと少しの反動で扉は開いた。

倉庫に人がいないのを確認した後、ルアンリル達はすぐに倉庫の中に忍び込み、鏡の扉を閉めた。ついでに自分の持っていた鍵を使用して施錠も済ませる。

鏡は倉庫の入り口からは見えにくい位置にあったが、念のために細心の注意を図る。

今、見つかってしまったら危険を冒してまで鍵を盗み、鍵を届け てくれた二人への恩義に反する。

「あ、これ」

ケイシユンはその倉庫の隅に数振りの剣を見つけた。それは宝石で飾られてはいないが名剣呼んでも過言でないものばかりが無造作に置いてあった。

「やった俺の剣だ」

取り上げたのは一本の質素な剣だった。

鍔つばの両側に水色の石アクアマリンが嵌め込まれその淵を黄金で飾ってはいるがそれ以外の装飾がない普通の剣だった。

「今、族長をやっている伯父さんがくれた剣・・・」ライル ヴェーダ「雷の聖剣」だ  
こんな剣が無造作に放つてあるということはこの剣を見た人は「宝剣」という飾り様の剣しか目に入っていなかったようだ。

それならば、と自分の剣をその中で探してみたが、あいにく「炎サイラの聖剣」ヴェーダはここにはなかった。

ルアンリルがウィルフレッドと対峙したときに携えていた剣をあの男がそうそう見逃すはずはない・・・

「聖長殿・・・これ、炎の剣？」

自らの剣に導かれるようにケイシユンが壁の高い所に飾られていた、質素な一振りの剣を持ってきた。

装飾は雷の聖剣と然程変わりが無いが、淵の部分に真っ赤な石ルビが飾り付けられ、その周りは黒曜石で彩られていた。まさしく、ルアンリルが求めていた炎の聖剣だった。

「ありがとう・・・」

「ど、どういたしまして」

素直に礼を言うルアンリルにケイシユンは少しだけ顔を赤らめながら、照れたように笑って見せた。薄暗い牢の中では気付かなかつたが、何処から見ても遜色のない美少女だ。

(そういえば、クラウス王子と恋仲だっけ)

恋をする女の子はやっぱり可愛いのだろうか。

だが、その恋が試練の恋であることをケイシユンは知っていた。もちろん目の前の少女だって理解しているだろう。

王族と精霊族が結ばれるのは『禁忌』<sup>タブー</sup>とされている。自分とかつての恋人が引き裂かれたように目の前の少女と王子も引き離されるだろう。

「どうかしましたか？」

首をかしげてこちらを見上げてくるルアンリルに、彼はなんでもない様に振舞ってみせる。

「いや、あの・・・いつぐらいに決行するのかなあと」

ケイシユンの言葉にルアンリルは唯一ある窓の傍に移動した。

息を潜めて、そこから見える兵たちの様子を観察する。彼らは取りあえずの仕事を終えた安心感からかどうもだらけているみたいだ。

今度は扉の傍に移動し、外の様子を耳で確かめた。

「今すぐに始めても大丈夫そうですね。今私たちがいる場所もだいたいわかりましたし・・・中庭に出て大きな炎の柱でも上げてみま  
すか」

につこり笑うルアンリルに彼は「おう」と答えた。

### 第三十話：決行の夜（後書き）

とうとうルアンリルたちの王都脱出大作戦が始まります。

ちなみにファイアソード（炎剣）は魔法の名前、サーラ・ヴェーダが剣の名前です。サーラがエレメントを示し、ヴェーダが聖剣を示します。

修正でケイシュンがルアンリルを狙っている場面は外しました。

後々考えると、必要ないし、ケイシュンの性格にちよつと矛盾が出てくるので・・・その代わり少しだけケイシュンの設定をはやだししています。

### 第三十一話：中庭に向かって

ルアンリルはケイシユンを伴い、出来るだけ人目につきにくい道を通り中庭へと向かった。

幼い頃からクラウドと遊びながら、こういう道を覚えた。彼はとにかく大人に見つかるのが嫌いな子供だったので、人目のない場所、気付かない通路、侍従のみの通路などを観察して覚えていた。

ソルデイスもそういう通路をしっかりと知っているが、彼の場合は『見つけた』のではなく『知っていた』という感じがする。

「おもしろいな・・・こんな通路があつたんだ」

ケイシユンは何度か王城に来させられたことがあつたが、王に謁見する直前に城下町に逃亡してみせたり、すぐに下城して町へと出かけていた。おかげで未だこの城の内部には余り明るくない。

伯父である現龍族の長・ナリファ・コウ・ロンファはそんな甥の態度にも甘かったが、ナリファの息子でありケイシユンの次に長候補と目されているベーシエン・ロンファはその態度を不真面目すぎるとよく非難していた。

ケイシユンとしてみれば族長の甥として生まれ悠悠自適に暮らしていたのに、ある日突然降って沸いたように次期族長に任命され辟易としていたのだ。

もともと堅苦しいことは嫌いだし、第一、時間的な自由を制約される事に不満を覚えた。

どうしてあんな王のために希少な自由を奪われ、足を折り平伏せねばならないのか。

まだ剣の腕のあるクラウドや牢での機転を見せてくれたサイラス・・・その二人と目の前のルアンリルが王につけようとしているソルデイスならそれも許せたかもしれないが、バルガス相手にそんなことをしてやる謂れはない。

ゆえに王城に行くのが億劫になり、人的パイプを作らなかつたか

ら他の龍が空に逃げるときに自分は置いていかれたのだろう。

そういえばあの日、自分についていた人間はベーシェンと仲のいい人物ばかりだった気もする。

「どうかしましたか？」

少し考え事をしていたケイシユンにルアンリルが不思議そうに聴いてきた。

自分よりも小さな型なりに精霊族すべての責任を持っているルアンリル。

その理力の高さゆえに幼い内から親元より引き離され、王宮にて勤めることを余儀なくされている子供。

ルアンリルは精霊族の成人を待たずにわずか13歳で聖長に就任した。

本来なら性の未分化の状態では大人として認められないはずなのに、大人の都合で勝手に大人としての役割を与えられてしまったのだ。

そんな子供を守ってやりたいと思うのは、その姿にどこか自分を重ねているからかも知れない。

「いや……後、どれぐらいで中庭につくんだ？」

自分の考えを相手に知られないように誤魔化そうとして出した質問に、ルアンリルは少し呆れたような顔をした。

そして我慢しきれないように小さく噴出す。

「本当にあまり城を知らないのですね……もうすぐそこから中庭ですよ」

見ると次の角を曲がったところから外が見えた。本宮の中に特別に設けられたそこは普通の家屋が数件入るほど広い庭になっていた。よくみると建物の形がとても変わっている城だと思う。これも先ほど自分たちが通ってきた秘密の通路を生み出すための仕組みなのかもしれない。

「すみませんが、かなり派手な理力魔法を使うので、しばらく見張りになつてくれませんか」

ルアンリルの申し出にケイシユンは胸を叩いて了承した。

それに安心したルアンリルは、自らの腰に携えた聖剣を抜いた。同時に辺りを紅く染めるほどの炎の精霊がその小さな身体を包み込んだ。

ケイシユンもルアンリルに倣い、腰の聖剣を抜いた。彼の使役する光と風と水の精霊が同時に乱舞し始め、天空へと上り始める。呼び寄せられた精霊たちは更に仲間を呼び合いながら、城の上に黒き雲を形成した。

その時になり、城に勤めている魔法使いたちが何事かとテラスから外を見始めた。

「それでは、いきましよう」

二人は互いに肯き逢うと、一気に中庭まで走りぬけた。

第三十一話・中庭に向かって（後書き）

もともとのサブタイトルは『炎の柱』でした。

しかしケイシユンの独白があまりにも長すぎて炎の柱がたちませんでした。

どうやら聖司族といえど何がしかどろどろとした事情があるみたいです。

## 第三十二話：炎の柱

中庭に到達したルアンリルは自らの持つ剣を中庭の中心の大地に突き刺した。

そこを中心にして綺麗な円を持つ炎の魔法陣を描く。書いている間も口の中ではいくつかの呪文を唱えていた。

ケイシユンはそれをみながら、中庭に入ろうとする兵士たちを自らの剣で打ち倒していた。

脱皮の次期を追えた龍は常の状態よりも力も魔力も増大する。今の彼には普通の人間の揮う剣など赤子が振るうような重さしか感じない。すっと剣を横薙ぎするだけで、彼らは面白いように吹き飛ばされてしまう。

（これが伯父上が気をつけて力を揮えつていった理由……）  
次期族長として選ばれている自分の能力は普通の龍族の力よりも3倍は強い。

これは下手をすれば城そのものを破壊し、国を焦土と化す力にもなりかねない。

（まあ、変に暴走させれば自分自身の身体のほうが先に持たないだろうけど）

取りあえずは剣だけ使って敵を追い払う事に専念する。

魔法使いが来たら、先ほどから自分の身体に纏わりついている精霊のどれかを向かわせればいだろう。

とにかく理力の魔法だけは使わないように心がけなければならぬ。

ルアンリルは魔法陣を書き上げたのか、今度は難しい呪文を組み合わせながら精霊たちに炎の力を増大させている。

現在、ルアンリルが発動させようとしているのは3つの魔法。普通優れた理力魔法を持つ魔術師でも2つ同時に呪文を動かすのは至難の業のはずだが、彼女はいつも簡単にその3つを完成させていく。

「炎、最高位の精霊サラ・ヴェセタ・・・我が名はルアンリル・フイーナ・エディン。炎の盟約を用いて命令を下す。我が力を与えた炎に加護を与えよ」

中庭の温度がぐつと上昇する。その不快感にケイシユンは少しだけ顔をしかめた。

ゴオオオウウウ

炎の剣を中心に大きな炎が中庭の木々を焼き尽くし始める。

炎は壁を滑め、天へと上り、火の粉容赦なく兵たちへと降らせた。

「聖長が逃げたぞっ!!!」

伝令兵の声が本宮内に木霊する。

ルアンリルはにやり、と笑うと炎の中心にあった剣を抜いた。剣は炎の柱と同じ劫火を放ち、襲い来る敵を薙ぎ払うために待ち構えていた。

腰の引けている兵の間から魔法使いたちも出てくるが、荒れ狂う炎の柱とルアンリルとケイシユンの周りを飛び交う無数の精霊の姿に及び腰になっている。

「私達に喧嘩を売りたい魔術師はどなたですか？」

静かに笑う口元が力量の差を示していた。

稀代の族長の中でもずば抜けて高い能力をもつルアンリルと変体を終えたばかりの龍族の次期族長を相手にするにはここにいる魔術師だけでは無理があった。

そうしている間にも精霊たちは風を呼び寄せる。風の精霊はいたずらに炎の柱に力を与え、水の精霊は風の精霊と共に雷雲を城の上へと移動させる。

光の精霊は雷雲に秘められた光矢いかづちを容赦なく城へと降らせ始めた。

どおん・・・どおん・・・

遠くで雷が落ちる音がしている。黒い闇のような雲は龍族の青年が呼んだものだろうか。

サイラスとアーシアは中庭で起きている喧騒を他所に人気の少ない通路を走っていた。

クラウスの教えてくれた道はソルデイスが使った道とは違い、いつ人に出くわすのかわからないものだ。サイラスは剥き身のままの剣を手に、アーシアの手を取り城を出る道を急いだ。

「大丈夫、ですか？」

時々、サイラスは自分が手を引いているアーシアに訊ねた。彼女は上がる息をなんとか押さえながら、大丈夫と笑ってみせる。

「もうすぐですから・・・」

サイラスは城から出る扉が見える位置で一端、足を止めた。

ルアンリルが起こしてくれた騒ぎのお陰で巡回が少なくなっている。門の前の見張りを確かめようと顔をだしたサイラスはそこに一番見たくない人物の姿を見つけた。

「面白い道を知っているな・・・クラウス王子の入れ知恵か？」

その声にアーシアが目を見開いた。

まぎれもなくそれは、決別を決めた相手・・・兄・ウィルフレッツのものだった。

### 第三十二話：炎の柱（後書き）

やっと炎の柱が建立されました。本当なら前話で立つはずだったのですが、ずれこみました。（仮タイトルだって、前の奴が『炎の柱』でした）

次回は暫くぶりにウィルフレッドが出ずっぱりです。はて、主人公はいつになったら出てくることやら。ソルティス

### 第三十三話：決別した道

サイラスは手の中にある剣の柄つかの感触を確かめながら、ごくりと唾を飲み込む。

「どうして……」

驚いている二人に、ウィルフレッドは不思議そうな顔をした。

ただ少し考えて答えを見つけたのか彼は可笑しそうに笑い始める。

「そうか、ソルデイス ルフィーナ 弟王子も聖長もそなたたちには教えていないのか」

ウィルフレッドの嘲るような言葉に二人は心外だとばかりに顔を顰める。

それに何よりも自分たちが知らない事実と言うものが気になって仕方ない。

「私は『見透かす心』を持っている……サイラスはこの意味がわかるな」

目を見開いたサイラスの姿に王族とはいえその辺りの仕来りにはあまり明るくないアーシアはどういうことなのかと二人に視線を送る。

その姿にサイラスも彼女が全く何も知らなかったのだということを理解させられた。

「王位を継ぐのに優先されるのはこちらの能力だろう。飾り物の『黄金』ではない。この能力を持つ最も年上の人間がもともと王位を継いでいたのだ」

だからこそ、ウィルフレッドは自分の王位継承の正しさを主張した。黄金の髪を持っているのみのバルガスはもちろん、まだ年若いソルデイスよりも優位であるはずだ、と。

兄の言葉を聞き、アーシアも漸く事態を飲み込むことができた。そして父から受け継いだ王位継承権がこのような形で分けられたことを、初めて知った。

「嘘だと思っているのか？少なくともソルデイス王子は知っていた

ぞ」

ウィルフレッドの言葉に、サイラスははっとした表情かおをした。そうだ、ソルデイスだって『見透かす心』……読心術テレパシーは有していた。それならば、その有無も知っていただろうし……。「ああ、もちろん。サイラスが私の息子だということも知っているだろうな」

サイラスの心を読んだようにウィルフレッドが答えを出す。そしてそれを微塵も感じさせずに自分を守ろうとしていた弟ソルデイスを愛しく思った。

「確かに、あなたは『力』それを持っているかもしれない。しかしその他すべてを纏めて持っているソルデイスには敵わないはずだ」

自分たちが選択したソルデイスが目の前の男より下位のはずがない。二人にとって、彼だけが唯一絶対の王なのだから。

「それがそなた達の選択、か？」

ウィルフレッドはため息と共に小さく呟くと静かに二人の傍へと近づいてきた。

途端に殺気立っている息子サイラスの横を無表情のまま通り抜けた彼は炎と暗雲に包まれた本宮に向かって静かに歩き始めた。

「捕まえないのか？」

ウィルフレッドがいなくなったことにより見張りが居なくなつた門を見ながらサイラスは振り返り、ウィルフレッドに問い掛けた。

「私の望みは、妹アイシヤを王から自由にすること……息子そなたに真実を告げること。その二つの目的はすでに果たしてある。それでそなた達が城から出ると言うのなら、それは仕方のないことだろう。

ただそなた達自身が自分の選択が間違っていることに気付いた時は城門を開けて待ち受け、二度と間違わぬようにこの城に閉じ込めてやる」

肩越しに答えを述べたウィルフレッドは二人に背を向けると、それ以上言うことは無いとばかりに颯爽とした足取りでその場を去っていった。

「いったい・・・何が、どうなっているのでしょうか」

「それは、私が知りたいです」

こちらを振り返りもせず去っていくウィルフレッドを二人は暫しの間見送っていた。

「どちらにせよ、我々は自分たちの信じた王子かたの為に進むしかないことだけは判ります」

凜としたアーシアの言葉にサイラスは無言で肯くと、誰も見張りの居なくなつた城門に近づく。元から侍女たちのために設えられた門は然程苦も無く外への扉を開けた。

二人は互いに肯き逢うと、城の異変を察知してでてきた町人の中へとその身を潜めたのだつた。

### 第三十三話：決別した道（後書き）

ウィルフレッドとアーシア・サイラスとの別れです。

彼にとつては助け出し、守りたいと思っっている相手からの別れの宣告・・・これで暫くサイラスたちは王国のどこかにいろいろと魔法を駆使して潜伏することになると思われます。

## 第三十四話：大空への脱出

死に物狂いでこちらに向かってくる雑兵を相手にしながら、ルアンリルは逃げるための頃合を見計らっていた。

あまり早すぎるとサイラス達の逃げ出すための布石にならないだろうし、遅すぎれば彼が……

(やはり……来る、か)

ある程度離れていても判る強い理力。

それを隠そうともしないウィルフレッドの気配がこちらに向かってくる。ケイシュンもそれに気付いたのかどうするのかと視線で訊ねてきた。

「これ以上の長居はまずそうですね……」

ルアンリルが近くにいるケイシュンにのみ聞こえるように呟くと、彼はそうだなと同意する。

本来なら光姫が光の精霊を使用して連絡をくれるのを待ちたいところだが、そんな悠長なことは言っていられない。

それにこの夜の闇の中では彼女の光の精霊は割る目立ちしてしまう可能性もある。

だが、もう限界だ。目立つためのパフォーマンスのための炎の柱を作ったルアンリルはまともに彼とは戦えないだろうし、理力魔法を使うのに少し支障がある自分でもあのウィルフレッド魔術師には勝てない。

「それじゃあ俺が聖体になるから、そしたら首のところに乗っくれ」

ケイシュンの言葉にルアンリルは素直に了承した。

彼はほんの少しだけその事に苦笑すると、静かに自分の額に輝く3枚の鱗に指をつける。

それと同時に彼の身体が大きな光に包まれ、辺りに突き刺すような魔法が散り始めた。

ギシギシ……という何かが軋む音と、ギツギギギギ……と

城が軋む音が重なった。光はすぐに収まり、そこにはケイシユンの変わりに一体の巨大な白龍が現れた。

その手には剣が変化したものだろつか、アクアマリン電解石の宝玉が握られている。

『さあ、乗れ』

白銀の鬣たてがみがたなびくその巨体の頭部がルアンリルの前に下ろされた。

ルアンリルは何の躊躇もせず、龍の傍に寄ると、持ち前の身軽さを生かして鎌首の後ろ辺りの位置に上った。裸馬に乗るときのようにしつかりと内腿を絞め、鬣を手綱代わりに両の手に巻きつける。

「準備できました」

ルアンリルの言葉と同時に龍は雄たけびを上げてその身をくねり上げた。

黒い夜の闇、雷を纏った雲、いきり立つ炎の柱、そしてその中で一際輝く白き鱗を持つ身……

「あれが、あの臥龍か……」

丁度その場に現れた漆黒の髪の魔術師の声に龍は反応し、その翡翠のような目を彼に向けた。『臥龍』とは面白い名で呼んでくれるものだ。

「行くのか……ルフィーナ従妹弟殿」

「ええ、私はソルデイス王子の臣民ですから……」

ケイシユンに跨った状態でルアンリルはウイルフレッド従兄を見下ろした。

優しい……『あに従兄』だった。それは今でも変わっていないのかもしれない。

しかし、道はすでに別ってしまった。自分は彼と共にソルデイス王子に……何よりもクラウス王子に剣を向けることなど出来ない。「次に逢うときは戦場だな……？」

ウイルフレッドの決別の言葉にルアンリルは視線を落とした。

「それまでに、貴方に一矢報えるぐらいに強くなります」

今のままでは決して彼に勝てないだろう。すべてを棄てるぐらい

の覚悟で彼に臨まなければ彼に勝つための道は開けないのかもしれない。

「楽しみにしている」

まるで自分の心を見越したみたいに告げられた言葉に、ルアンリルは静かに目を閉じ「行きましよう」とケイシユンに告げた。

龍は大きな咆哮をあげ、ずずずと天空へと駆け上がる。

ケイシユンの力に呼び寄せられた精霊達が彼の身体に纏わりつくように踊り、風と雨と雷の洗礼を王宮に与える。

その姿を見送りながら、ウィルフレットは周りを見渡した。中庭はすでに酷いありさまだった。焼け焦げ、崩れ、そちらこちらに死体や怪我人が転がっていた。

「魔術師たち、降りてきて負傷兵の治療を・・・それからアーシアとサイラス王子、ソフィア王妃がきちんと部屋にいるかどうか誰か確かめてきてくれ。」

自らの手で逃がした二人の不在をもうそろそろ明らかにすべきだろう。

ウィルフレットは人に見えないように寂しそうな笑みを浮かべると、自分の現在の居室である王の間へと戻っていった。

ルアンリルは夜の風の中、ただ静かに遠ざかる王都を見ていた。

本来の聖長の役目なら命を落としても・・・ウィルフレット彼と相打ちなつても彼を止めなければならなかったのだらう。

だが、それではいけないような気がした。未来が見えるわけではないのに、そんな予兆がルアンリルを逃亡へと駆り立てた。

王都を脱出した自分を精霊族の長老たちはどう思うだらう。

彼らはいつだってルアンリルにだけすべての責任を与えるが、ルアンリル自身が出した決断は聞く耳など持たなかった。

唯一、意見を聞いてくれるのは父親とあの従兄だけだった。

いろいろと頭の痛いことは山積している。そして自分自身のこと  
だつて・・・

『とりあえず、龍族の里でいいのか・・・？』

考え事をしていたルアンリルにケイシユンが訊ねてきた。ルアン  
リルはすぐに気を取り戻すと、「はい、お願いします」と答えた。

### 第三十四話：大空への脱出（後書き）

ルアンリル、辰 子太郎状態です。逃げる二人のバツクには「ぼや」よ こだねんねしな」という能動的な音楽が流れていることでしょう。

これでやっと第三章的な王都脱出リターンが終わったので次回からはやっと本来の主人公、ソルデイスの話に戻れます。

### 第三十五話・同行の為の賭け

すべての慰霊が終わり、一座が村を立つ日になった。

ソルデイスは行き先を替えたあの日からその表情を余り動かさなくなつた。常に心がけていた笑顔も殆ど作ろうとはしない。

「もう出るんだって？」

あの日以来、スターリングは常にソルデイスの事をつねに気遣つていた。

彼自身、仕事があり他の村にも行かなくてはならないだろうに、それすらキャンセルしてこの村に逗留しつづけていた。

「ああ、ガイフィード將軍の宿营地まで……」

ソルデイスの答えに彼は少し考えてから、にやりつと笑つた。

「それじゃ、俺も連れてつてくれよ。俺、もともと大將軍の部下になろうと思つてたんだ」

スターリングの突然の申し出に傍にいたグランテが目を丸くした。「どうするんだい？」

とちらりとソルデイスを見ると、彼も虚を突かれたように驚いていた。

「そんな思いつきみたいな事で兵になるなんて……」

ソルデイスが喘ぐように反論すると彼は腰に携えた剣をぼんぼんと叩いて見せた。

「本当に前々から行きたいこうと思つてたんだって。剣の腕だつて自信もつてるし……」

言い募るスターリングに対して、困ってしまったソルデイスは助けを求めるように村の長老に視線を向けた。彼は二人をみるとごほんつと咳払いをした。

「それはいい。この子はこの辺りの山賊を退治することもありますし、剣の腕はわしもお勧めできるぐらい秀でてますよ」

(いや……薦めるんじゃないなくて、止めて欲しいんだけど)

意志を汲んでくれない長老にソルデイスは肩をがくりと落とした。だが無表情の彼の顔からその言葉を読み取るものなど皆無に等しい。この中でそれが読める人間の一人は解かつていて無視しているし、あと一人は状況を楽しそうに見つめている。

「そんなに強いのか？俺も手合わせしてみたいな」  
スターリングの言葉にクラウドが反応して彼らのもとに近づいてきた。

ソルデイスはそれを止めようとしたが、一歩出たところでグランテに手をつかまれた。

「クラウド王子は当代の王子の中で一番強いんだろう？だったら彼に勝てないことを理由に連れて行かないこともできる」

手を掴む彼女に耳打された言葉にソルデイスはぼんっと手を叩くと何事も無かったかのように二人に向き直った。

「それじゃ、兄上から一本でも取れたら連れて行くってことでいい？」

「おうよ」

「まかせといて」

二人が了承すると同時にソルデイスの後ろでグランテ主催による賭けが始まった。もちろん、クラウドの剣の腕を知っている一座の人間はクラウドに、スターリングの意志を尊重させてやりたいと思っている村人はスターリングにかけた。

予測外だったのはシェリルフアーナがスターリングに賭けたことだろう。可愛い妹の行動にクラウドはどこか打ちひしがれているようだった。

「それじゃ、始めっ！」

一礼をした二人は十分な間合いを持って、睨みあった。

16歳と13歳ではリーチも力も大夫の差がある。そうなるソルデイスみたいに卓越した技能があるか、サイラスのようにスピードのある剣で来るだろうと、クラウドは相手の剣を予測する。

ざっと足元を然りと踏むと、クラウドは気合を籠めて間合いを詰

めた。

スターリングもそれに負けないように一気に間合いを詰めるために前に飛ぶと向かってくる刃を自らの刀の腹で受ける。

ギインツ

鋭い剣戟があたりに響く。クラウスが繰り出す刃をどうにか避けながら、スターリングは隙を狙って仕掛けてくる。

(こいつ・・・剣技も然ることながら、力が強い)

農村の子供が見様見真似で使える剣ではない。

しっかりと誰かに倣い、それに見合った筋肉を有している剣だ。

スピードも遅くないし、技に走りすぎる事も力に頼りすぎることも無い。常々クラウスの師匠が目指せと教える剣の形に近かった。

これは下手に嘗めてかかると間違ひなく即座に負けるだろう。

クラウスはその考えににやりと笑うと確りと剣の柄を握り締めた。

### 第三十五話・同行の為の賭け（後書き）

今まで話がジエットコースターみたいに急展開したので少しばかり足踏みです。

スターリングの剣の腕はクラウスよりやや劣ります。ただ彼は知略があるので、どこいどこいまで持つていくことができます。しかし3年の年齢差を考えると、クラウスよりも剣の腕は上の可能性が高いです。

## 第三十六話：新たなる出発

ギインツ！ギイイツ！

剣戟は暫く続いた。

当初、自分の賭けたほうだけを応援していた人たちも、二人の素晴らしい試合に息を呑み込んでいた。

どちらも素晴らしい剣の腕だ。多少力任せに打ってくるこのあるクラウスとそれを受け流しながら、自らも鋭い切っ先で切り込んでいくスターリング。

なかなか終わりそうにない試合は、やがてスターリングのスタミナが切れてくることにより状況が変わってきた。

持ち前のスピードで避けていたのが、いまでは少し受けてしまっている。このままでは惜敗を得てしまう。

スターリングは一計を案じると、残りすべての気力を籠めてクラウスの胸元へと跳躍する。

クラウスは寸でのところで何とかその攻撃を避けると、彼の首もとに自分の刃先を突きつけた。

「それまでっ！」

試合終了を告げるソルデイスの声が山村に響いた。

暫し沈黙の後、クラウスの雄姿とスターリングの敢闘を称えて彼らは声をあげようとした。

「両者、引き分け」

しかしその行動に水を挿すようにソルデイスの試合結果を告げる声が彼らの耳を打つ。

見るとスターリングは避けられると同時に自らの身をひねり、自分の刃先をクラウスの胸元に突きつけていた。

一瞬の沈黙の後、割れんばかりの喝采が村中に響いた。

「いい、試合だったね・・・」

ソルデイスの横で見ていたグランテが感慨深げに呟いた。

それから、横に居る少年王子に視線を落とすとどうするんだいと目線で訊いて来る。

「……やはり、連れて行く方がいいのかもしれないね」

彼はそう言うのとゆっくりと隣に居るグランテを見上げた。その瞳にはどことなく遣る瀬無さが秘められている風に見える。

「反対なのかい？」

「僕の運命にあまり人を巻き込みたくないんです」

自身が騒乱の星であることは自分が一番よく理解している。これから自分が選択していくだろう運命が自分と同じ年の少年の未来にどのように影を落とすのか……その未来が怖かった。

「私たちはいいのかい？」

片方の眉を器用に上げて擲掄してくるグランテにソルデイスは静かに目を閉じた。

「あなた方とももうすぐ別れるつもりです。次の街道の別れ道が来たら僕たちだけでガイフィード將軍の下へ行きます」

予測していた言葉にグランテは一つだけ息を吐いた。

時守の里への道を止めたときから、この王子は常に独りになることを画策していた。その一歩目がこの一座と別れることなのだろう。そしてガイフィード卿の下にいたら、彼は兄弟たちとも別れるつもりなのかもしれない。

今更、グランテが何かを言ったところで彼はこの決意を改めることはないだろう。

「それじゃ、4人分の食料をそちらの馬車に分けて乗せなきゃいけないね」

彼女は諦めたように肩を竦めて、食荷を管理している男にそれを分けるように指示を出しに行こうとする。

「4人分？」

自分たち兄弟は3人しかいないのに、どうして言い間違っただろうと不思議に思って問い返してきた。

グランテは何がおかしいのだろうか、指を出して確認をする。  
「連れて行くんだろう？ スターリングっていう坊やを……。だってらあんたら兄弟とその子の分で4人分だろう？」

まるでそれが決定事項であるかのように言う彼女に、ソルデイスは冷や汗を垂らしながら彼女に質問し返す。

「連れて行くって、僕、言いましたっけ？」

「連れて行ったほうがいいのかもしいっていったらどう？」

試合が終わった後に感想のように呟いた一言でそんなことを確定しないで欲しい。ソルデイスは反論するように声をあげる。

「あれはっ！」

「あんたが直感で『連れて行ったほうがいい』と言ったんだ……。自らに降りた予言だと思って、さっさと受け止めな」

グランテはそれだけ言うのとソルデイスに背を向け、荷駄馬車の方に歩いて行ってしまった。

彼は何とか止めようと考えたが、丁度いい反論の言葉も見つからず、自分たちの馬車に運ばれる4人分の食料を眺めることしかできなかった。

すべての荷駄を積み終えると、グランテは手伝ってくれた村人たちに礼をいった。

「それじゃ、食料とか金子きんすとかありがとう、恩おんに着るよ」

最後に長老と村長にも礼を言う。二人はそれ以上に丁寧ていねいに礼を述べるとグランテの傍そばにいるスターリングとソルデイスを見た。

「わがまま言つてすまないが、この子を無事に送り届けて下され」  
ソルデイスは丁寧な申し出に渋々「はい」と頷うなづいた。

自分たちの馬車に彼が乗ることを聞いたシェリルファーナは嬉しそうにこちらを見ていた。クラウドも剣を交わしたことで彼のことを気に入ったのか、同行には不満がないようだ。

ソルデイスはふうと息を吐くと、今度はしっかりと村長に向き直り、

「それではスターリングの村まで連絡のほうお願いします」と、頭をさげた。

彼らがつこりと笑って承諾するのを確認すると、ソルデイスは自分の馬車にスターリングと共に乗り込んだ。

「行くよっ！みんなっ！！」

グランテの声があたりに響いた。

村を出る一座を、村人は温かい目で送り出した。

### 第三十六話：新たなる出発（後書き）

グランテは案外、何でもお見通しです。

一応、やっと長逗留（？）していた村から出ることができました。

実際には1週間も居ないのに長く感じたのは、途中で2章分の話が  
あったからでしょうか。

### 第三十七話：時森への思い

時守の里は悲しみに暮れていた。

星見<sup>ほしみ</sup>の頂点に立つ星替<sup>ラル・シリユード</sup>の死を悼む声がそこら始終でしていた。

「もうそろそろ、義父殿<sup>ちちうぢ</sup>の所に報告に窺わないといけないな」

本来なら、フェルスリユートが死んだその日にレティアは竜王国<sup>ロシキス</sup>に戻ろうとしていた。

しかし意識を取り戻したルミエールが何かに怯えるように悲鳴をあげ、レティアの腕にぎゅうつとしがみつき離れなかった。彼女の腕から離そうと成人した男が近づくと、彼女は更に悲鳴をあげた。記憶が無くても、体が恐怖を覚えているようだ。

それ以降もずっと彼女はレティアの傍を離れず、おかげで国に戻るのが延期されていた。

「姉上しかあの竜は乗れませんから・・・」

竜を従わせるといふ『竜緋石<sup>りゅうひせき</sup>』と呼ばれる血を持ってしても国竜の背中に乗ることは易々と許されない。

逆にこれが普通の竜ならば宿めすかして乗ることもできるのだが・

・・・

「いかなきゃ、だめ？」

記憶を失うと同時に少し幼児退行をしたルミエールはレティアの傍でじいっと見つめてくる。

「ああ、行かなきゃだめだから・・・、待つてられますか？」

「う・・・？」

逆に問い返されて彼女は青い瞳をさ迷わせた。

行かせてあげたい・・・だが彼女がいないことが怖い。

「ヘンリーはここに置いていきます」

ヘンリーは置いていってくれる・・・そのことに頷いて見せるが、不安は払拭されない。

「必ず、帰ってきますから・・・」

「かならず？かえる？」

必ずと言つ言葉は怖い。それが崩れるときを自分は知っている気がする。

でもそれが優しく包んでくれたことがあつた気もする。

「かならず・・・ね、かならず・・・もどつて、ね？」

ルミエールは震える声でレティアに告げると彼女は優しく彼女の頭を撫で、今度こそ義父の元に参じるために国竜を呼び寄せた。

グランテの一座はそのまま北の街道を目指して馬車を進めた。王子の捜索隊も一段楽しめたのか、不穏な空気はまだ感じない。

「街道は後3日もすれば北東と南に分かれる。そこでグランテ達と別れる」

おおよその予測をしていたのかクラウスは静かに弟の言葉を聞いていた。シェリルファーナは仲良くなった踊子たちとの別れを寂しかったが、だからと言ってわがままが言える状況でないことをしっかりと把握していた。

ソルデイス達の馬車に同乗しているスターリングはクラウスの代わりに手綱を操りながらも、後ろの話の内容に興味があるようだ。

「俺は大將軍のところへ向かう中に入れてもらえる？」

とりあえず確認のためスターリングが出した質問に、ソルデイスは苦笑してみせた。

「そこまで、無責任じゃないよ」

あの村から最終的に連れ出すのを決めたのは自分だ。

ならば自分が責任を持って彼を大將軍あひての元に連れて行かなければならないだろう。

馬車の扱いに慣れているスターリングは、巧みに馬車を扱いながら空の一角を飛んでいく光るものを見つけた。

「あ、珍しいものが飛んでる・・・」

「なに？」

彼の言葉にクラウドスが御者台の方に顔を出す。その背中にはシェリルファーナが張り付いていた。

その微笑ましい情景にスターリングは目を細めながら、先ほど自分が見つけた方向を指差した。

「ロシキスの竜です。それも少し大きめの銀色の竜」

ロシキス王がリディア国王に謁見するときにはかりディア国土に入ってこないその竜が空を飛んでいた。それにあの大きさ、銀色に輝く鱗は、伝説で語られている国竜・ルシル・ヴィリアの可能性だつてある。

ソルデイスはその言葉を聞きながら静かに目を閉じた。国竜がロシキスに戻った・・・ということは帰郷したのはレティアだけなのだろう。

星替フェルスが自分たちの父親バルガスに殺害されたということはその現場近くにはロシキスの王子ヘンリーや王女ルミエールがいたはずだ。彼らがその騒動に巻き込まれていないはずが無い。

王城で敵に襲われたとき、自分にしがみ付いて震えていた少女。ソルデイスに対する純粋な思慕がどことなくすぐたくて、気になる存在ではあった。

(あの素直さ、純粋さが、あの王女レティアに有ったら・・・少しはましな性格になっただろうに)

ふと自分と似ていて異なる境遇を持つ友人を思い出し、暫し感慨に耽る。

自分と同じ剣の師匠に学んだ彼女の剣の腕は自分が一番把握している。命を嫁して異母兄フェルスが守った『命』を彼女はきつと守り通してくれるだろう。

まだ続く、この内乱の日々の中でも。

(時の森は閉鎖されている・・・でも、通路は作らなくちゃ・・・)

遠くからでも解かる厚い、厚い霧を用いた『時』ソリュートの結界。

その中に閉じ込められた獲物バルガスを逃がさないようにしながら、里と外界との通路を開けてあげなければならない。

遠方からの行う作業は苦難を極めることが解かっていたが、自分の父が原因した状況を改善するためにソルデイスはその作業のために集中し始めた。

### 第三十七話：時森への思い（後書き）

主人公に戻ってきたと思ったら、レティアたちです。

旅立ったと思ったらどうやら足止め食っていたようで、書いている自分でも脳内の彼らに少し面食らっています。

でも、確かに記憶消されたところで恐怖は消されていませんから・・・  
・ 幼児退行は一時的なもの・・・のはずです。

### 第三十八話：竜国王への謁見

国竜は高く空へと舞い上がると一直線に故郷・竜王国<sup>ロシキス</sup>へと向けて翼を向けた。

もうすでに慣れた天空の風を切る冷たさに彼女は微塵も動じず、心配しているだろう王の下へと急ぐ。

『レティア王女よ・・・あそこにリディア国の王子<sup>ソルデイス</sup>がおるぞ』

国竜が示したのは中規模ぐらいの旅の一座のものと思われる馬車の隊列だった。

レティアには遠くてどこに彼らがいるのか解からないが、気配のみで感知する竜<sup>かのじょ</sup>には王子<sup>ソルデイス</sup>がどこにいるのか感じられるだろう。

「無事だったか・・・」

レティアは安堵の息を吐いた。

無事でよかった。自分の命を大切にしない彼のことを少なからず心配はしていたが、どうやら杞憂で終わったようだ。

『近寄るか？』

「いや、あちらは目立つとまずいだろう・・・せつかく見つからずに逃げているのならそのままに」

公衆の面前でこんな目立つ竜<sup>モリ</sup>が降りて来たら、折角のカムフラージュが台無しになってしまう。それに馬車の向きからして彼らが目指すのはロシキスとの国境に駐留するガイフィード將軍のところだろう。

それだけわかっていれば、後から会いに行くことも可能だ。

「とにかく、義父殿の所に出向くのが何よりも優先だ・・・貴族の馬鹿共を押さえつけるための手助けも必要だろうしな」

リディアの内乱を知った貴族は、国境に駐留しているガイフィード將軍の傘下の軍が無傷であることを頭に入れず確実に国土を拡大することを国王に進言しているだろう。

自分のできることはたかが知れているが、それでも馬鹿な真似を

しないように釘を刺さねばなるまい。

「問題は山積している・・・急ごう」

当初の目的よりも国竜を国外に出していたことに、貴族達はまたイヤミの十や二十ぐらいくれるだろう。

レティアは今更ながらにうんざりしながら竜を駆った。

### 時守の里

竜の後姿を見送りながら、ヘンリーは傍らの姉を見上げた。

あの恐怖の一日から姉は男が傍によるのを怖がる。自分みたいに小さい人間はいいのだが、少しでも・・・20歳を越えているような男性に出会うとむちゃくちゃに暴れ、距離をおいて威嚇するようになった。

最悪のことにはなっていないとこの里の女医はいつたが、こんなに怯えるほどの恐怖を彼女が味わったことは間違いない。

そして記憶が封印されたことにより、恐怖の本筋が見えなくなり・・・彼女はすべての男性に怯えるようになってしまった。

「なんで、記憶を消したんだろう・・・」

その理由はヘンリーの手元に残された5通の手紙の中に記されているかもしれない。

「レティア、かえってくる？」

つい先ほど旅立ってしまったレティアのことを待つように彼女はその場に座り込んだ。

「ええ、帰ってきますよ・・・だから、義姉さまが帰ってきたら驚かせるために何かつくりますよ」

ヘンリーがそういうと彼女は「うん」と素直に頷いて、まだ幼い弟に手を出した。どうやら寂しいから手をつないで欲しいようだ。

「さ、いきましょ」

ヘンリーは遣る瀬無い気持ちを隠しながら、必死に笑顔を作って

見せた。

竜王国・ロシキス 王都・ローサリア

突如として現れた国竜の姿に、王都の市民は歓喜の声をあげた。

ロシキス国王・ライアン・ゼントリーブは王女帰還の言葉に安堵の息を吐くと、いち早く国竜の元へと駆けつけた。

「レティア・リストラル。ただいま、戻りました・・・義父殿、義母殿」

あいかわらず固い言葉で帰還の挨拶をした義娘の姿を国王夫妻はしっかりと抱きしめた。

「お帰りなさい」

「よくぞ、戻った」

歓迎の言葉をくれる二人に、レティアは少し複雑な顔をする。

今から告げる言葉を聞いて彼らはどう思うのだろうか。だが、真実を告げなくては・・・問題を明らかにしなくてはならない。

「ルミエール・フィネア王女とヘンリー・アルバルト王子のことにつきましてご報告すべきことがございます」

彼女はぎゅっと拳を握り締めると直立不動のまま、彼らに申し出た。

硬い表情のまま自分たちを見つめる義娘に国王夫妻は訝しげな顔をした。

周りに控えていた貴族達も何事かとレティアに注目する。彼女は下唇を噛みながら、それでもなんとか国王へと視線を送る。

「なにか、あったのか？」

ただならぬ様子のレティアにようやく事の大きさを悟ったライアンは、彼女を伴い王の執務室へと移動した。

### 第三十八話：竜国王への謁見（後書き）

レティア、とりあえず帰郷です。

ライアン王夫妻は前王の娘であるレティアの伯父・伯母にあたる人たちですが、即位と同時にレティアが義娘となることを宣言したので、ちち義父・はは義母と呼んでいます。

ちなみにレティアの父親は病死、母親は健在です。あまり社交が好きな人間ではないので王宮の奥でひっそりと暮らしています。

### 第三十九話：戦回避への提言

その場には国王と王妃、竜神殿の神官長、侍従長、有力貴族の内数名と將軍職を持つ貴族数名のみしか入ることを許されず、扉の前では人型となったルシル・ヴィリアが立って人払いをした。

「なにが、あつた？」

先ほどとは違う断定的な問いにレティアは意を決した。

「時守の里にて、ルミエール王女は記憶を封じられました。

封じたのは星替ほしかえ・・・おそらく、リディア王国内に彼女を留めようとしたのだと思います」

彼女の衝撃的な発言にその場にいた全員が息を飲んだ。

記憶が封じられた事も勿論憂慮すべきことだが、もつと彼らにとり重要な内容がその言葉には含まれていた。

「星替、ですと？そんなものまで現れていたのですか・・・」

ロシキスの地にルシル・ヴィリアが復活した時も、彼らはそういつて驚いていた。

あの時は自分がこれで開放されるという喜びから深く考えなかったが、今、思えばそれも変調の序曲とも捕らえることはできる。

「ただし、星替は殺されました・・・殺したのは、バルガス王です」  
更なる証言に、貴族の口から「そんな・・・」と畏怖する声が零れる。

次々に知らされる懸案にライアンは頭を掻きながら、執務をするときに使用する椅子にどっかりと腰をおろした。

有力貴族の一人が王の前に跪くと鼻息を荒くしながら、ライアンに進言する。

「これで、リディア国王家と時守の里との決別は確定ですな・・・  
上手くすれば、彼らを使い内側からリディアを崩すことも・・・」  
「できませんよ」

その言葉を遮ったのはレティアだった。

非難の視線を投げかける貴族に彼女は大きく首を振る。

「星替の死により、時守の里の周りには強大な結界が張られています。そこを通り抜けることは如何な時守の民とはいえ不可能だと彼らは言っていました。」

私はルシル・ヴィリアがいたからここまで来ることでも可能だっただけで、彼らは結界により里に囚われた状態になったと言っただけではないでしょう」

王に進言した貴族はぐうつと言葉を飲み込む。反論したいのだが、伝えられる状況を知るに連れて自分の案がどれだけ不完全なものか証明されてしまう。

「更に言えば、もし結界を越えることが出来たとして彼らが『王家』に協力してくれるか怪しいものです」

彼らはすでに『権力を持つ者』を警戒している。自分たちがあの村に居られるのは一重にフェルスリュートの護符を持っていたから・・・彼の同行者であったからだ。

そうでなければ、彼らは自分たちを村に入れるなど・・・<sup>リディア</sup>自国と対立する立場を明確につくることなどしないだろう。

「もし、彼らが従つとすれば・・・伝説で語られている残り二人の兄弟・・・<sup>ときかえ</sup>時変と<sup>ときみ</sup>時見だけでしょう」

そう締め括った彼女に全員が口を噤んだ。

<sup>ほしかえ</sup>星替が出ただけで異変だというのに、他の者までこの世に生まれている可能性はあるのだろうか。

そしてそれが誰であるのか、どの国で生まれるのかわからない状況では探し様もない。

「それは置いておいても・・・現在のリディアは内乱の渦。攻め込むには絶好ではありませんか」

先ほどとは違う貴族が会議の中心となっている王と王女に進言した。

「言ったと思うが、全く無傷のガイフィードの騎士団とどう戦うつもりか？」

国王は冷静に言葉を紡ぐ。

將軍職を持つ貴族達もそのことを理解しているので勝手に述べている有力貴族に冷たい視線を送った。

「ルミエール姫とヘンリー王子はどうしますか？」

レティアはライアンとその王妃に視線を送る。

内乱が激化すれば、この国の貴族たちはこぞって先ほどの案を押しつけてくるだろう。そしてリディアとロシキスとの戦が始まれば、火種の元となる王子王女を里の者たちが匿ってくれるか怪しい。

ゆえに彼女は状況が悪化する前に指示を仰ぎにきたのだ。

「そうだな・・・せめてルミエール姫が普通に行動できるまでは里に書く待て貰うほうがいいだろう。それもまではロシキス国王の名前において、戦を起こす真似はしないと誓う」

レティアの望む答えを述べてくれた王に貴族達は全員色めきだつた。

今すぐではないにしろ、内乱が長引いたらその時には戦を起こそうと考えていた將軍職の者たちも王の意見には反対だった。

「そうだ、せめて・・・二人を国に連れ帰ることは・・・」

「国竜に私以外の者を乗せると？・・・そして飛べと命令するのは？」

冷たいナイフのような切り替えしで答えたレティアに彼ら全員が言い返すことなどできなかつた。

「それでは、私は義姉上たちの元へ戻ります」

「頼んだぞ・・・」

「頼みましたよ」

国王夫妻の懇願をレティアは一礼で受け止めると、王の執務室から去っていった。

後に残された貴族達は彼女が去つたのを確認すると口々に王女への疑惑を口にした。

「本当は、彼女が国の主権を得る為の芝居では有りませんか」

王の猜疑心をくすぐる言葉を選んだはずの貴族にライアンは傍に

あつた剣を抜いた。

「聞き苦しいぞ、諸兄ら・・・あの子がそのようなことをしないことは王である私が知っている。それ以上言葉を紡げば、王族への不敬として取るが・・・よいか？」

国王の言葉に随意するように王妃もきつい瞳を貴族達に向けていた。

彼らはその迫力に押され、それ以上の讒言を打ち切ったのだった。

### 第三十九話：戦回避への提言（後書き）

ロシキスでのレティアの肩書きは王女兼竜姫將軍です。

ロシキスでは国防の要たる竜騎士は特別で、いろんな意味での優遇と自分の意志による将来の選択が許されます。

ちなみにガイフィードが率いる軍はリディア内で最高の騎士団です。

## 第四十話：時見の混濁

あの悲劇の伝わった日から、ソルデイスは何度も時森を守る精霊たちとコンタクトを試みていた。

だがその作業を行うたびに星替フェルスの死を目の当たりにした精霊たちの狂気が彼の心にも痛いほど伝わってくる。

しかし精霊達これをそのままに放置しておけば、外界との接点を無くしたあの里は滅びに向かう。それだけではどうしても避けなければならなかった。

「あれ・・・」

その変調は急激に起こった。目の前が暗く染まる・・・すうっっ  
と意識が途切れる。

『精霊魔法と言っても、時の精霊とのコンタクトは気力も消費される。つまり、使いすぎれば、ぶっ倒れることになるから、気をつけろよ』

そういえば昔、そんなことを星替にいさんに言われた記憶があった・・・  
ソルデイスはそう思い出しながら、ゆっくりと意識を手放した。

「兄さま？どうしたの・・・？」

急に馬車の中で倒れこんだソルデイスの様子に気付いたのはシェリルファーナだった。

静かにしているとは思ったが、何が起こってこうなったのか解からない。

「どうした、シェリル」

「僕、様子見てきます」

クラウスに手綱を渡し、御者台の上で休憩していたスターリングは持ち前の身軽さでさっさと馬車の中に入っていった。

彼が傍に寄ると、突然のことにパニック気味のシエリルファーナが青い顔をして倒れているソルデイスに縋って泣いていた。

スターリングは彼らの傍に近寄るとその顔や、体の状態を確認する。

(あれ・・・これって・・・)

こういう症状を前に見たことがあった。

(昔、兄さんが似たように倒れて・・・確かあの時は・・・)

「精霊魔法の使いすぎ・・・?」

「は?」

スターリングの所見に先ほどまで兄の体に縋って泣いていたシエリルファーナが間抜けな声をあげた。

「だから、この症状・・・たぶん、それだと思うよ。ここ数日、なんかずうつと瞑想して魔法を使っていた見たいだから」

彼に指摘されてシエリルファーナは此処ソルデイスの所の末兄の行動を振り返ってみた。

反乱を起こした人間に見つからないようにするため、彼は常に占い師の格好をして馬車の中にいるようにしていた。

しかしあの特別な日・・・何かを知り、兄が泣いた日からそれはもつと酷くなつたように感じる。

表情が動かなくなつた・・・笑顔がなくなつたことだけが突出していたため気付かなかつたが、彼は極力馬車の内にこもって静かにしていた。

つまり、彼はその間ずっと魔法を使っていたというのだろう。第一、王族である自分たちが魔法を使えるのか・・・そのほうが問題だ。

デインラーデ卿みたいに母親が精霊族というのならまだしも、普通、王族は魔法を持たない。それを使うものを従わせるだけの『何』カリスマかが国王たるものになれば十分だからだ。

「魔法なんて、兄様使えるの・・・?」

「理力魔法じゃなくて、精霊魔法のほうじゃないかな。占いができ

るんなら、時の精霊とかとコンタクトを取っていたかもしれない」  
普通、精霊魔法は理力を使わない。精霊はその人間の魂に従うのだから。

しかしそれゆえ、精霊一人一人とコンタクトするたびにその人間の魂は疲弊することとなる。彼があれば長い時間をかけて瞑想をしていたとなると、一体だけの精霊にコンタクトを取っていたとは考え難い。

許容量を越えるほど大量の精霊とコンタクトを重ねて魂を疲弊させきつたのだ。

「とりあえず、2〜3日ぐらい休養させないと・・・それからまだ回復してないのに魔法を使わないように見張りをつけなさい」

この倒れている自分と同じ年の少年が自分自身に無理を強いているのは解かっていた。

兄弟たちにも、一座の長たるグランテにも頼らないその姿勢は見ている何処か可哀そうなぐらいだ。

スターリングはソルディスの身体を負担がかららない形に寝かせると、まだどこかおろおろとしているシェリルファーナにグランテを呼んできてもらうように頼んだ。

#### 第四十話：時見の混濁（後書き）

ソルデイス、ぶっ倒れています。

どうやら異母兄おにいちゃんであるフェルスリユートは彼のそういつとこ  
ろを十分把握していたようです。

編の名前のとおりに話が半分迷走しています。ソルデイスがガイフ  
イードの元に辿り付き、それぞれの固定位置にスタンバイするまで  
は、まだ少し場面展開の多い話になりそうです。

## 第四十一話：舞い降りた聖長

スターリングから大体のことを聞いたグランテとクラウドスは同じように「はあ」と息を吐いた。

「無茶をしすぎる子だとは認識してたけど・・・ここまでとはねえ」  
グランテは少々呆れたように意識を失っているソルディスの顔を覗き込む。気力を使い切っている王子はいつものように人の気配で目覚めることもできないようだ。

「少しぐらい頼ってくれてもいいのに・・・な」

クラウドスは弟に頼られないことを少し寂しく思っていた。

サイラスが捕まった時も、今回も、結局ソルディスは他人ひとを頼らない。自分一人で全部を解決しようとする。

まだ幼い肩に乗っている荷物を感じさせずに、ずっと我慢しつつける。

「頼りないのかな・・・俺は」

ソルディスを支えるのに必要な力はまだ自分には何一つ備わっていない。幾ら剣術を極めようとも、それでは彼を支えられない。

それは今回の内乱で、ひしひしと実感していた。

「そんな・・・こと、ない」

クラウドスの言葉に反応するようにソルディスはうつすら目を開けた。

馬車の振動が感じられない。どうやら自分が倒れたせいで彼らの足を止めてしまったようだ。

「兄上が頼りないなんてことは、ない・・・僕が、頼る方法すべを知らないだけだ」

クラウドスが『王子以外の場所』でいろいろと頼られていることは知っている。腕っ節だけではない、今は然程開花していないが彼には知略もある。

そして何より、自分と少しでも関わったもの全てを守ろうとして

くれる度量の深さもある。

頼もしい相手だと思ふ。だが、それに頼れるほど自分が素直でないだけだ。

「つまり、頼りないってことだろ。ほら、寝てる・・・お前は体調が悪いんだから」

クラウスは無理矢理起き上がるうとするソルデイスの身体を寝具に戻すと、頭まで毛布をかけてやる。

まるで汚い外界からソルデイスを守ろうとするように・・・  
『寝てる・・・俺がついていてやる。お前、体調悪いんだろ？』

自分が信頼する『異母兄』<sup>フェルス</sup>もよく、体調が悪いときにそう言つては毛布をかけてくれた。クラウスは異母兄<sup>フェルスリョート</sup>とあまり面識がないはずなのに、こういう所で血の繋がりを見せてくれる。

「ごめ・・・」

「謝るなつて」

クラウスはそういつて毛布に隠れたソルデイスの頭をぼんぼんと撫でてやると、みんなを促して馬車の外へと移動する。どうやらソルデイスが回りに他人がいると、しっかり眠れないことを見抜いているみたいだ。

(信頼<sup>たより</sup>はできないけど、信用<sup>信用</sup>ならずつとしている)

クラウスにかけることの出来なかつた言葉を胸に秘めながら、ソルデイスは静かに目を閉じた。

体が悲鳴をずつとあげている。気力を消耗することがこれほど身体に影響するとは思わなかつた。

目を閉じると、スウーッと意識が遠のいた。また深い闇が彼の意識を包み込み、眠りの深淵へとソルデイスを連れて行った。

一方王都を出たルアンリルは王子たちの様子を知らずにケイシュンの背中に乗り、一路、聖龍族の里を目指していた。

龍の飛ぶ速度は地上のどの乗り物より早い。これに勝てるのは口シキスの竜達だけだろう。

『ほら、見えてきた・・・あれが、俺の里だ』

ケイシユンの声にルアンリルは雲の合間から里を一望した。ルアンリルは聖長に就任して以来殆どの時を王都で過ごしていたため、こんな大きな里は初めて目にした。

(こんな大きな姿になるから里も大きめに作っているのか)

ルアンリルが取りとめも無いことを考えている間にも、ケイシユンは里の広場に向かって急降下を開始した。

広場には幾人かの人だかりが出来ていた。

その中の一つに向かって飛んでいくケイシユンに、人だかりの中心に居る人物を守ろうとする兵士たちが刀に手を書けた。

だがその人物は兵たちを片手だけで制すると、嬉しそうに降りてくる巨体に向かって笑って見せた

『族長！ただいま、帰りました』

「ケイシユン、無事で何よりだ」

目を細めて帰還を祝う言葉を述べてくれた聖龍族・族長：ナリフア・コウ・ロンファはケイシユンの背中で動く影を認めると興味深げにその人物を観察し始めた。

「ケイシユン、あまり遅いから、あの謀反人に寝返ったか・・・」

自分が嵌めて捕らえさせたはずの従弟の登場にナリファの息子・ベーシエンはイヤミ交じりに彼を迎えようとして言葉を止めた。

ケイシユンの背中から降りてきたのは少女に見える人物だった。

身なりはそれほど華やかではないが、それが彼女の清楚な美しさを際立たせているようにも見える。肩口で揺れる黒髪は、ややざんばらに切られていて少し痛々しさも感じさせた。

そして、何よりもケイシユンが『聖体の際に背中へと乗せた』という事実。

「ケイシユンっ！これはっ！..!」

「黙りなさい、ベーシエン」

ナリファ  
族長は息子を制すると降りてきた少女に頭を下げた。

「お久しぶりですね、聖長殿」

「お久しぶりです、ナリファ殿」

ルアンリルは龍族の中でも族長という立場ゆえに面識の深いナリファの姿を認め、にっこりと笑ってみせた。

## 第四十一話：舞い降りた聖長（後書き）

前半は主人公<sup>ソルティス</sup>。後半は聖長<sup>ルアンリル</sup>。どちらでタイトルを付けようか迷ったけど結局聖長の方でタイトルを付けました。飯タイトルまではちゃんと主人公系のタイトルだっただけに何処か憐れです。

## 第四十二話：龍族の歓待

族長・ナリファが少女の事を『聖長』と呼んだことにより、龍族の中からざわめき起きた。

最初は戸惑いの声だったが、段々とそれは驚喜の声に代わっていった。逆にベーシエンはそれを苦々しげな顔で受け止めていた。

「な、な、な・・・なんですか？」

周りの騒ぎ様にルアンリルは驚いたようにナリファに問い掛ける。きよるきよると周りを見回しているルアンリルの肩をいつのまにか人型に戻ったケイシユンが支えてやる。

「ちよつと、勘違いしているだけさ・・・それより、ナリファ叔父上殿に話すことあるんだろ？とりあえず、族長の屋敷に行こう」

ケイシユンはそう言うのとルアンリルの肩を押して、ナリファの家に行くように促す。

どこか引つかかる部分があったものの、ルアンリルとしても龍族の族長と話したかったのでとりあえず彼に従うことにした。

族長であるナリファの家は里の一番奥に位置していた。

広々とした玄関を抜けると清楚に纏められた客間に入る。ルアンリルは促されるまま、ナリファの前に座った。

「本当にめでたきことです」

まだ状況を把握してないルアンリルにナリファは笑顔で慶事の挨拶をする。

「まさか聖長たるルアンリル殿がケイシユンの元へ嫁いで下さるとは・・・」

「はい？」

突然の言葉にルアンリルは間抜けな返答をしてしまった。

一体何処をどうしたらこのような誤解が生まれるのだろうか。

(そういえば・・・)

ここに来る前にケイシユンが彼らは誤解していると言っていた。先程は気にしなかったがそれがどうして起きたのかきちんと聞いて置く必要がある。

「ケイシユン・・・殿？」

笑顔のまま自分で自分を見てくるルアンリルに彼は少し後じさった。

笑顔なのだが・・・目が完璧に笑っていない。白状しないと何をされるか解からないほどだ。

「あーっと、だから俺たちの登場の仕方のせいで、誤解があった・・・

・というか。普通、聖体の背中に乗せるのは互いの番の相手だと・・・

・・・」

「なんで、そういうことを黙っておくんですか！それなら私は自力で移動しましたっ！！」

ルアンリルの怒声に、ナリファも聖長がこの事を知らなかったのだと悟った。

しかしこれほどの良縁を羽後にするのは勿体無い。彼はとりあえずケイシユンを床に沈め終えたルアンリルに視線を送る。

「確かに誤解していたようですが・・・それを現実にするのもできるのではないでしょうが」

伯父として族長として、弟の遺児であり自分の後を継ぐ唯一の存在に最高の縁組をするためにナリファは提案を試してみた。

「と、いいいますと？」

ルアンリルは聞くだけ聞いてみようとして、ナリファの前に座りなおすと目の前の龍族長に強い視線を送り先を促した。

「婚約だけでもしていただき、互いが互いを知ったところで結婚してくださいませれば・・・いや、恋人がいらっしゃるなら、話が別ですが・・・」

「恋人は、いるけど・・・まずい相手だよな」

ナリファの言葉を切るように、床に倒れ臥していたケイシユンが

発言をした。

ルアンリルはその言葉に視線を下に落とした。そんなこと、言われなくても解かっていた。

逆にナリファは理由がわからずにルアンリル ケイシユン聖長と甥へと交互に視線を送った。僅かの沈黙がその場に訪れた。

「どうということですか？」

沈黙を打ち破ってナリファがルアンリルにその真実を問いかけた。しかしルアンリルは視線を落としたまま口を噤んでいた。ケイシユンを見ると彼は肩を竦めてから、隣の牢で聞いていた内容を思い出しながら答えを紡ぐ。

「精霊族と王族は結ばれてはいけない・・・ルアンリルの恋人はクラウス王子・・・それにしっかり該当してるじゃないか」

あの別れの時、自分は死ぬものだと思っていたからクラウスの告白を受けることができた。

しかし、生き延びてソルデイス王子の下にて参戦するに辺り、その事実は自分に重くのしかかってきている。

「迷信、かも知れないけど、唯一の例外だったバルガス王の兄・アルガス王子と元聖長ベネーシャとの間に生まれたディナラーデ卿が反乱を起こしたのだから、精霊族は躍起になってルアンリルの結婚を止めるだろうな」

自分の後ろに忍び寄っている現実には、ルアンリルは静かに目を閉じた。

#### 第四十二話：龍族の歓待（後書き）

ルアンリル、ケイシユンの嫁だと完璧に誤解されています。

どちらにしろ性別が決まっていけない状況でルアンリルが嫁かどうかは不明ですが・・・

精霊族と王族が結ばれてはいけない、という迷信のため、ディナラーデ卿の父と母は駆落ちしました。

そついうのが迷信がなければ名門貴族と同じだけの権力を持つ聖長と王位継承者の王子が結婚できない謂れはありません。

## 第四十三話：結ばれることの禁忌

その当時唯一の王位継承者だったアルガス王子と聖長アルム・ベネーシャ・エディンとの恋愛は精霊族にとり前代未聞のスキヤンダルであった。

事情を知った回りは彼らを引き離そうとし、それぞれに縁談を持ち込んだり誤解を生むように画策したりとした。

しかし彼らの行動とは裏腹に二人の絆は深まり、やがて彼らは互いの役目を放棄する形で王都の外へと駆落ちをってしまった。

その事がきっかけで王侯貴族たちは一斉に精霊族を王都から追い出す計画を立て、精霊族は最高神官の名の元に殆どの役職を剥奪された。

当時の王でありアルガス・バルガスの両王子の父親であるコウラス・エンドルグ王が騒ぎの沈静しなければ、王都で精霊族の虐殺が始まってもおかしくないほどだった。精霊族は王の寛大な処置に礼を言う一族すべてが王都を出た。

しかし、それが逆にまずかった。

精霊族の魔法で支えられていた王都はその基盤が少しずつ崩壊し始めたのだ。急遽精霊族は王都に呼び戻され、聖長に対しては王都を長く離れてはいけないという条例が制定されることとなる。

そして今度は精霊族の中の騒動が起きる。アルムの生家であるエディン家に連なるものを役職から排除し始めたのだ。

もちろん、これも長くは続かなかった。アルムの次の族長となったエリオット・パステル・ガネーシャは周囲の反対を押し切り、アルムの弟・グランティオ・エディンと結婚。そしてその第二子として一族最大級の理力を持つ・ルアンリルが生まれると精霊族の長老たちは母親から子供を奪い族長に祭り上げた。

『母にとり私は子供を守れなかつた罪の具象・・・父にとり私は一族を救うための犠牲者』

王城に単身入れられた時、ルアンリルはそう心の中で呟いていた。だからこそ自分は道に外れないように生きてきた。

次代王となるソルデイスを守り、精霊族の地位を元の位置までとす事がルアンリルの聖長としての役目だと信じ・・・それを達成するためにはただ只管ひたすらにまっすぐに・・・

『絶対に、無事で、生きて再会しよう・・・そして、ルアンの性別が決まったら、結婚しよう』

別れ際にクラウスが言った言葉が呪縛のように押し掛かってくる。答えを先送りにしたのは、本当に正しい判断だったのだろうか。

本当はきちんとその場で断らなければならなかったのではないのだろうか。自分の気持ちなど押し込めて対応することが自分のすべき事ではなかったのか。

クラウスの為に切った髪が肩口で静かに揺れている。

「わかっていきます・・・これが罪だということも。精霊族の族長が・・・それもエディン家の者が王族と結ばれる事などないと・・・

「まだ幼い頃、長老たちはこぞってルアンリルに楽器を習わせ、吟遊詩の一説を歌わせていた。

とくに王族と精霊族の悲恋を歌った『太陽と月の詩うた』は何度も何度も、飽きるほどに繰り返し歌わされてきた。

それが彼らの牽制であることは、王都に召され、クラウス王子の遊び相手をさせられていた時に気が付いた。自分と同年の彼に恋心など抱いてはいけない。自分は男としての性別を得て、ソルデイス王子とクラウス王子を支える忠臣になるのだと言い聞かせてきた。「ケイシユン・・・言葉が過ぎるぞ」

苦痛に顔をゆがめているルアンリルを見てナリファがケイシユンを嗜めた。

彼は流石に言い過ぎたと思ったのかすぐに「ごめん」と謝罪し、その部屋から出て行った。

「すまぬな、聖長殿ルアンリル・・・あれも下らぬ讒言ざんげんのため恋人と引き裂か

れた過去を持つゆえに」

だからこそ、傷が深くならないうちに引き離そうとしたのだと、その瞳は言外に告げていた。

ルアンリルはどういうことなのかとナリファの目を確りと見据えた。

「少し昔話をしましょうか」

ナリファはそう告げると椅子に深く座り込み、少しぬるくなってきたお茶を口に含んだ。

#### 第四十三話・結ばれることの禁忌（後書き）

ルアンリルが別れ際に返事をしなかったのは、王族と精霊族が結ばれると不幸なことが怒るといふ迷信のためです。

ちなみに「太陽と月の詩<sup>うた</sup>」は大体、光を放つ太陽と闇に沈む月が惹かれあうが、やがて神が現れ鉄槌を下し彼らを引きさいた、みたいな内容だと思ってください。

## 第四十四話：引き裂かれた過去

ナリファは居住まいを正すとゆっくりとした口調で過去を語り始めた。

「あれの父親・・・私の弟は私と同等以上の力を持つ龍族だった。もちろん聖体にも変化でき、長となるべき人物として育てられてきました。いずれは龍族か他の聖司族から嫁を取り、結婚させようとした矢先に彼は一人の女性を自分の妻として連れてきたのです」

その当時、ナリファはすでに一族の一人と結婚をしており、副長としての責務を果たしていた。将来は弟のことを支えられる存在になろうとすっかり学び、その日を待っていた。

しかし、弟が連れてきたのは普通の、本当に普通の人間の女性だった。顔は確かに綺麗ではあり朗らかな性格はナリファの妻ですら「いい女性ね」と言わしめるほどだった。

しかし、普通の人間である彼女を前にして、龍族の殆どは嫌悪を示した。

単なる人と気高き龍が結ばれるなど、きつと不吉な事が起こるに違いないと口々に言った。

「旅芸人の踊子の一人であるその女性に我々の父は大激怒し弟を閉じ込め、その女性とそ的一座を自分たちの支配する土地から追い出しました」

彼女たちを見送ったのはナリファ夫婦だけだった。泣いて泣いて、それでも「彼を好きになった自分が悪いのだ」と彼女は自分を責めながら龍族の村から去っていった。

「弟は閉じ込められた場所から抜け出すと、その女性的一座を追いかけて飛んでいった。自分を閉じ込め、彼女を侮辱した龍族を棄てて」

弟の牢の扉を開けたのはナリファだった。彼は自分を助けてくれた兄のことを心配しつつも、聖体となって大空を掛けていった。

牢を開けたことでナリファは謂れない批難に遭う。

自分が族長になりたいが故に弟を解放したのだ・・・いやあの女自体を嗾けたのはナリファではないのか、と。

そんな中でナリファの妻は第一子であるベーシエンを産み落とし、当時の族長はその子供を夫妻から取り上げ、自らの手で教育を始めた。二度と龍族の輪を乱す子供に成長させないように。

「やがて弟が死に、自らの死を悟った女性は唯一自分の存在に理解をしてくれた我々のもとに現れ弟の息子・ケイシユンを託していった」

やがて時が経ち、あの女性が一人の少年を連れて龍族の村を訪れた。

彼女は弟が死んだことと、自分の命がもう残り少ないことを注げると弟の遺児であるケイシユンを夫妻に託した。子供を奪われ気落ちしていた夫妻は、彼を自分の子供のように育てた。

「一族の誰もが弟を逃がした我々の代わりにベーシエンが一族を継ぎ、合いの子でもあるケイシユンは成人とともに村を出て行くだろうと予測していた。」

しかし、そうはいかなかった。成長したベーシエンには一向に聖体になる兆しが現れなかった」

普通、族長クラスの力を持つ者の額に常に浮き出ているはずの鱗が、彼の額には現れなかった。

逆にケイシユンの額にはくつきりとした鱗が生えてきた。試しに聖体になる術を教えてみると彼の父親よりもずっと立派な龍の姿へと変体した。

「私の父である前長は急遽、私を次期長に指名し、その副長としてケイシユンを指名した。もちろんそれはケイシユンへと長の座を引き継ぐための布石だ」

そうなる今まで彼らを腫物でも扱つかの様に接してきた周りの態度が激変した。

ナリファ達を側にも寄せなかった前族長は掌を返し、彼を次期族

長に任命した上で今まで接する事すら赦さなかったベーシエンを夫妻の元に返した。

程なくして前長は病に倒れこの世を去った。ナリファは宣言どおりに次の長に任命された。そしてケイシユンを自分の後継ぎとして選定しようとしたところで問題は起きた。

「私が長になった後、ケイシユンが恋人の話をしてきた・・・あの子の話では彼女は自分が母親と旅芸人として過ごしていた時、同じ一座に居たと言っていた。私は弟のことがあり反対はしなかった。だが回りは2代連続して人間の血が入ることに懸念を感じた」

ケイシユンの恋人と会ったナリファの妻は彼女はとても美しく、立てもよく頭のいい少女だと言っていた。黒い髪は腰までウエーブし、穏やかな紫色の瞳は不思議な力を持っているように見えたらしい。

ケイシユンの母親に対しても好印象を持っていた彼女は、いいお嬢さんを選んだとケイシユンの見る目を誉めていた。

妻の目を信じているナリファはそれならばケイシユンの妻に相應しいだろうと思ひ、彼を伴い彼女を里に迎え入れるために彼女が済む村に出向いた。

しかし、そこで知らされたのは自分達よりも先に『龍族』からの使者が来て彼女に罵声を浴びせ、金を突きつけて村から追い出してしまったという事実だった。

「彼女の住む村に龍族の誰かが赴き、彼女へケイシユンと別れるように強制し、村から追い出した。それを知ったケイシユンは・・・あの子は私たち夫婦しか信じないようになった」

あれ以来、ケイシユンは里の人間を信じない。今回王都から逃げる過程でこの村によったのもナリファとその妻に自分の無事を知らせるためだろう。

「あの子がルアンリル殿に禁忌を犯す前に引き返せというのは自分と同じ傷を貴方に負わせたくないからでしょう」

あの子の不器用な優しさは幼い頃から彼を育ててきた自分だから

察することができると話をして聞いていたルアンリルも「そうですか・・・」と呟いた。

#### 第四十四話：引き裂かれた過去（後書き）

今回はずっと龍族の昔話でした。

ケイシユンはクラウスとルアンリルに自分と恋人を重ね合わせているようです。

ベーシエンが人のいいナリファの實の息子なのに性格が悪いのは幼い頃、親から引き離され讒言・諫言・暴言の中で生きてきたためだと思われます。

## 第四十五話：探すべき者

精霊族には龍族とは違い人と交わってはいけないという決まりはない。

もともと数が少ない部族でもあるし、そのようにすれば血が濃くなりすぎて逆に一族の消滅にもなりかねないことを知っているからだ。

「私たちの過去の話は以上にして、本来の目的について話をしましょう？」

聖長殿、どのようなご用件でこちらにお越しになったのですか」ケイシユンとルアンリルが恋人ではないとしたら、ルアンリルは他の用事があつてこちらに訪れたはずだ。そうでなければ今すぐにソルデイス王子の下に馳せ参じるか、危険を顧みず王都の基盤を守るため、王都市街地に潜伏するだろう。

「ええ、幾つかお頼みしたい事があります」

本来の用件に話題が代わり、ルアンリルは表情を引き締めた。

「まずは、龍族としてディナラーデ卿と協力することのないことをお願いしたい」

王都に残っている魔術師……精霊族は今のところディナラーデ卿かソルデイス王子、どちらにつくのか考えあぐねている状態だ。ルアンリルの言葉で終結することはするだろうが、きちりと足並みが揃うのは難しいだろう。

「お受けしましょう。」

彼は我が一族の次期長・ケイシユンを捕らえたという事実を持っている。それを理由に龍族として協力を断りましょう」

実は龍族の中でも意見は二つに分かれていた。

ソルデイス王子の正当性は認めるものの、あの問題の多いバルガス王の息子だという点と彼が始終笑っていて頼りないという意見から『ディナラーデ卿に荷担したほうが得策だ』という意見がちらほ

らと長であるナリファの耳にも届いていた。

この聖長からの申し出はディナラーデ卿からの申し出を断る時の『重要な理由』にできる。

「それから、ある人物を探していたいただきたい」  
ルアンリルがもう一つ提示した頼みごとにナリファは目を丸くした。

人との係わり合いをあまり持たない龍族にそれを頼むことなど普通はない。特に最近の龍族は里と血への固執が強く、先ほど離れたケイシユンの生い立ちなどその苦難はそのことに起因している。

本気で人を探すというのなら時守の里に居る『遠見』や『星見』に頼むのが筋だが、あの森は今、時見の霧に守られている。それに何といつても時守の里での虐殺を行ったバルガス王に仕える形となっていたルアンリルに力を貸すとも思えない。

次に思いつくのは精霊族なのだが・・・彼女がここでこうして自分を頼っている以上、それにも何らかの事情が生じているということだろう。

ナリファの考えを他所にルアンリルは探して欲しい人物のデータを述べ始めた。

「その者は今から15年程前にこの近辺で行われた祭りを見学中に行方不明となった。彼女はディナラーデ卿に匹敵するほどの理力を持っています。多分、自分が魔術師であることを知りません」

「ほう、それは・・・」

自らの理力を・・・それもディナラーデ卿に匹敵するぐらいの能力を秘めている状態で過ごしているとは危険極まりない。

もし、何かの感情の起伏により理力が暴走したら、彼女の澄む地域は壊滅的なダメージを受けることにもなる。

「その人物がこちらよりも先にディナラーデ卿に見つけられ、利用されるといっていると戦力の均衡が変わってしまいます。精霊族としても度々搜索はしているようですが、彼らが本気で彼女を探そうとしているのかは私にはわかりません」

ルアンリルはそういうと少しだけ視線を落とした。

自分と精霊族の間にはまだまだ確執がある。能力ある者として敬つておきながら、裏でエディン家の台頭を訝しむ言葉を発する人間を何度も何度も見てきた。

「いったい、それはどなたなのですか？」

そんな彼女の状態を把握してくれたのか、ナリファは必要以上に話題を広げないでくれた。

その心遣いに感謝しつつ、ルアンリルは目的の人物のことを話した。

「私の姉・アディリアード・エディンです。髪は黒、瞳は董色、顔は・・・私に似ています」

顔は似ているのだと思う・・・父も似ていると聞いていたし、母あのみことが彼女が行方不明になった以降、自分ルアンリルを姉の名で呼びかているぐらいだから。

一方、ナリファは別の懸念を感じていた。

確かに精霊族が彼女を真剣に探しているのかは怪しい。エディン家の者がこれ以上力をつけないように、謀った可能性だつてある。

そして何よりも見つけた少女に浚つた人間が何か吹き込んでいる可能性もある。そんな者が今の脆弱な龍族いせへの攻撃の要とされたら一族すべてを守りながら対抗できるか微妙なラインである。

「わかりました、龍族もその探索を手伝いましょう」

快諾してくれたナリファにルアンリルはほうっと胸を撫で下ろした。

#### 第四十五話：探すべき者（後書き）

ルアンリルの予測どおり、精霊族はアディリアードを探していません。

やっとルアンリルのお願い事が終わったので、後は龍の里をどうやって出るべきか、思案中です。

## 第四十六話：龍長の思いと、次期長への軌轢

ルアンリルは深々と頭を下げると「ありがとうございます」と礼を述べた。

これで一つの問題と悩みが少し解決した。次はこの村を出て、自分が仕える相手ソルデイスの元に合流するだけだ。

決意も新たにするルアンリルにナリファは静かに言葉を発した。

「そうだ、ルアンリル殿。私からも頼みたいことがあります」

ナリファの申し出にルアンリルは不思議そうな顔をした。

だがこちらの勝手な申し出を受けてもらった拳句に私用まで頼んであるルアンリルとしては無碍むげにはできない。

「なんででしょう」

目の前の龍長に向け、ルアンリルは静かに微笑んで見せた。

「ソルデイス王子の元にケイシユンを連れて行ってくれませんか・  
・今、この状態の村にあの子だけを置いておくのは危険かもしれない  
せんから」

これは龍長としての頼みではなく、彼をずっと養ってきた養父としての頼みだった。

現在、ベーシエンとケイシユンの周りは自分と弟の時よりも酷い状態になっている。

前長の意思により次期長はケイシユンに決まっているが、それでも人間の血が入っている彼を認めないものも居る。

それらは無駄に竜族の精神こぢかを培ったベーシエンを祭り上げ、内乱の際に王都へケイシユンを置いてくるという暴挙を行った。それもあまりに手際がいいほどの実行力で、だ。

つまり、ベーシエン自身が直接ではないにしろダイナラーデ卿の陣営と通じている可能性を示唆しうさしている。

それなのにケイシユンは助かり、更には花嫁を乗せるようにしてルアンリル聖長を連れてきた。それを目の当たりにしてベーシエン側が何か仕

掛けないとは考え難い。

先ほどの説明でその辺りをすべて察知したのか、ルアンリルは僅かに微笑んだ。

「私が行く先はガイフィード將軍の砦です。それでよろしければ」

「お願いします」

ナリファがそう返したことで、二人の会談は終わった。

ケイシユンは屋敷の外で少しだけ頭を冷やしていた。

あれほど酷いことを言うつもりなど無かった。ただルアンリルのいたいけな心と、その容姿がかつての自分の恋人と重なり、何もしらずにのうのうと迎えに行った自分の間抜けさを思い出させた。

「はあ……」

「気の抜けたものだな」

大きなため息と共に自らに与えられた家へと戻ろうとしたケイシユンの前に苦々しい顔をしたベーシエンが現れた。彼はいつも連れられている取り巻きを背後に控えさせ威圧的な視線でケイシユンを睨み上げていた。

「……あんたか……何か用か？」

ケイシユンは不快さを隠しもせず、自分よりも背の低いベーシエンの顔を見下ろした。

「上手くやったものだ……聖長を連れてくるなんて。わざと捕まえられたのはそのためか？」

ベーシエンの言葉に後ろの男たちはくすくすと笑っている。確かに自分を置き去りにして逃げた従者だったような気がする。

「わざと捕まえさせた……の間違いだろ？変体のために繭化すいみんしていた俺を起こそうともしなかった奴を連れているだけで事が知れるぞ？

ケイシユンの言葉にベーシエンの後ろに控えていた中の二人がぎ

くりと顔色を変える。案外、わかりやすい奴らだ。

「ディナラーデ卿とつながりがあるんだったら早めに切っておくとだな。長殿はルアンリルナリッアに付くことを決めたぞ」

ケイシユンはそれだけ告げると、これ以上の不愉快な接触を避けるために彼らの横を抜けようとした。

しかしその腕をベーシエンが掴んで止める。

「聖長殿あのかたはお前が人間の女にうつつを抜かしていたものだ、その前におまえ自身に貴い龍の血が半分しか入っていないことを知っているのか」

嘲る顔は彼がケイシユンを格下だと思っている証だ。

実際、彼らの祖父である前長にそう言われながら彼は育ったはずだ。考えてみるとある意味、彼が哀れな存在にも思えた。

第四十六話：龍長の思いと、次期長への軌轢（後書き）

サブタイトルはもう、内容そのままです。

もともとタイトルつけるのは得意ではないですが、これだけつける  
と、語彙のストックがなくなっていくと思います。

本当はルアンリルだけを旅立たせようと思ったのですが、どうも伏  
兵が勝手についてきました。

クラウスと合流したらどうなるのか、自分でも予見つきません。

## 第四十七話：龍族の旅立ち

ケイシユンはもう一度ため息をつくときと哀れな男に今の長の家の中で行われていることを説明してやる。

「たぶん、今、長が話してると思うけど？それに精霊族では人間と交わることは禁忌ではないから逆に龍族のその風習の方がおかしいと思うかもね」

この数日間、過ごしている中でルアンリルが本当に優しく、聡明で、いい子だと知った。

多分、あの子なら養父ナリファの妻である養母シエンファと同様に血筋とかを気にせず自分に接してくれるだろう。

「本当に・・・貴様は」

「ケイシユン殿！」

長の家の扉が開き、ルアンリルが飛び出してきた。

どうやらベーシエンとにらみ合いをしている間に彼らの話も終わったらしい。そのままルアンリルはケイシユンの元まで走ってくるにつこりと笑って見せた。

「ナリファ殿の許可は取れました。私と共にガイフィード將軍の元へ行きましょう」

何がどうなっているのかわからない状態ながらも、ケイシユンは「お、おお」とルアンリルの言葉に了解の意を見せる。見下ろすとベーシエンの位置から見えないその表情かおが見えない位置に陣取ったルアンリルの瞳には何か含みのある光が宿っていた。

「でも、よく族長が許してくれたな」

「交換条件を・・・いろいろと出したんです」

強引な自分の態度が恥ずかしくて照れているような仕草に見えるが、ケイシユンの位置から見えるそれは笑いをかみ殺しているようにしか見えない。

それにしてもここまで来る道中で自分がルアンリルと共に旅に出

るなんてことは話題にも上がらなかったのに……

(あ……そうか)

ケイシユンはそこで閃いた。

彼の身を案じた養父ナリファがルアンリルの出した他の見事の交換条件として自分を同行させるように頼んだのだろう。

「そんな、勝手なこと……」

ルアンリルの言葉に、ベーシエンは唸るようにそう呟いた。

しかしその言葉を聞いたルアンリルは彼の方をゆっくりと振り返り、鋭い視線で彼を射抜く。

「龍族長・ナリファと聖長である私との会談によって決められたことに対して、勝手なこととはどういう意味ですか、ベーシエン殿？  
・すでに取り決めた約款に意義を申し立てるといふならそれなりの理由を持った上で聖席排除の覚悟し意見を述べなさい」

ルアンリルの厳しい言葉にベーシエンもその取り巻き達も異論を返すことなどできなかつた。

まだ幼いとはいえ、この目の前の少女のほうが立場は上なのだから。

「まあ、いい。どうしてベーシエン殿は族長の申し出を勝手と思つたか、聞いてあげましょう」

ルアンリルは美しい造詣の顔の上に鼻も綻ぶような笑みを浮かべながらベーシエンに一步近づいた。普段なら見惚れるような美しさだが、ルアンリルの顔には他を圧倒する迫力があつた。

「あ、いえ……ケイシユンの過去の女性遍歴と申しますか……その行状につき聖長殿に付き添わせるには相応しくないかもと思つたのです」

ベーシエンは直接人間と関わるのが嫌いなためケイシユンがかつて心に決めた女性とは会つたことなどないが、彼女は里の近隣の村に滞在していた旅一座の踊子であつたという。ケイシユンの母親といい、その恋人といい、踊子など男の性的欲求を満たすこともするばいた売女ばいたみたいな者だと前の長やまわりの人間は教えてくれた。

「その方のことは、ナリファ殿から先ほど聞きました。しかしそれでも私は彼を連れて行きたいのです」

ルアンリルがそう言うのとベーシエンは「そうですか」と笑って見せた。ケイシユンとしては案外すんなりと事を承諾した態度と、始めてみる笑顔に少しだけ彼への評価を上げる。

「いつ、旅立たれるのですか？」

「時間が無いので、用意が済み次第すぐにも」

案外素直なのだ、とルアンリルは思いながら彼の問いに答えてやる。ケイシユンはというと彼も同意見だったのか少しだけ肩を竦める姿を試みせた。

そこで会話を区切ったルアンリルにケイシユンは大きく伸びをし  
てみせる。

「じゃあ、急いで着替えてくるか・・・ルアンリルはそのまんまの  
姿で行くのか・・・？」

二人とも囚人服のまま逃げ出してきたため、お世辞にも綺麗な服  
を着ているとはいえない。

「いえ、ナリファ殿が奥方の服を貸してくださいと聞いていました  
ので、遠慮せずに貰っていくつもりです」

ルアンリルはそう答えるとケイシユンに「また後で」と告げて長  
の屋敷へと戻っていった。

#### 第四十七話：龍族の旅立ち（後書き）

初っ端の雰囲気とは違い、ベーシエンが丸くなっています。

もともとベーシエンは人のいいナリファと朗らかな母親との間に生まれているのでそれほど性格は悪くならないはずですが。

ただ『一族にこだわる所為で息子に出て行かれた哀れな老人』と『龍族至上主義の長老』たちに育てられたゆえにああいう性格になっただけです。ある意味、純粋な子なのかもしれません。

これにて第四章：別離と旅立ちと・・・が終わり。次からやっとうご無沙汰していたソルデイス達に戻ってきます。

## 第四十八話：街道の分岐点

ガラガラと馬車の車輪が土を食む音を聞きながら、ソルデイスは意識を浮上させた。

これだけ人の気配がしているのに、熟睡したことだけけぶりだろうか。あの『信頼』している人たちが傍にいるわけでもないのに「目が覚めた？兄様」

心配だったのだろう、ぎゅっと自分の手を握り締めて問い掛けてくる妹にソルデイスはぎこちなく笑って見せた。

「ごめん、心配掛けた・・・僕はどれくらい寝てた？」

こんなときでも笑顔を作ろうとする兄に、シエリルファーナは少し悲しくなった。それをできるだけ悟られないようにしながら彼女は首を横に振った。

「そうね、あれから丸つと一日半・・・眠っていたわ。お腹すいたでしょ？もうすぐ街道の分岐点だからそこで一泊するそうよ・・・踊り子のお姉さんたちが私たちのお別れの宴を開いてくれるんですって」

「そんなに、長く・・・」

確かに起きるのが億劫なぐらい疲労が貯まっている。だがお腹は空いているが、思った以上に飢餓感はない。

「・・・？」

ソルデイスがお腹を押さえながら首を傾げるのを見て、シエリルファーナは久々に明るい笑顔を見せた。

「お食事はね、兄様の眠っている口の中に流動食をいれてあげていたの。上半身を立ってあげると兄様少し目と口をあけるから、その隙間に食事を流し込むとね・・・」

「シエリル、もういいから」

妹の口から告げられる恥ずかしい自分の姿にソルデイスが音を上げる。少し顔が赤いのは照れたからだろうか。

馬車の外から号令が聞こえた。どうやら街道の分岐点についてらしい。

ソルデイスが馬車の幌の後ろを開き外を見ると、そこはこじんまりとした集落の中だった。

どうやら分岐の手前に作られた旅籠街はたしがいのようだ。店は雑貨と旅道具の店、各国の通貨の両替商、物産の交換所などとその交流のために訪れる人のための宿屋が立っている。

「おや、目が覚めたようだね」

馬車から顔を出しているソルデイスにグランテは軽く声を掛けた。その手にはお盆に寄せられた件の流動食を持っている。

「はい、もう目が覚めましたから普通に食事しますよ」

ソルデイスはそういうと馬車の外に出た。

「よう、身体はもういいのかい？」

「もう、無理しちゃだめよ？」

馬車の外ではやっと目を覚ましたソルデイスに踊子や用心棒が気楽に声をかけてくる。本当に気のいい一座だ。

ソルデイスはその足で宿営の準備をしているスターリングの元に向かった。先ほど馬車の中で見た『過去とぎ』では彼が自分の状態を見て事を大きくせず居てくれたのがわかったからだ。

「スターリング」

ソルデイスが呼びかけるとスターリングはにっこり笑って手を振ってくる。

どうやら宿営の準備だけではなく宴の準備まで彼は引き受けているようで先ほどから右へ左へと忙しく動いていた。

「もう、大丈夫そうだな・・・あんな無茶はもうするなよ」

「うん、気をつける」

同い年なのに何処か大人びた口調で彼は彼を嗜めた。ソルデイスもそれに素直に頷いてみせる。

焦りはまだ解消されていないが、今回のように、術の途中で倒れてしまつては元も子もない。きちんとセーブしつつあの村と外界と

の道を開いていかなければならぬだろう。

(それに・・・)

バルガス

それに、森はあの王を虜囚として閉じ込めている。下手に術を失敗し、森にかかる霧の結界を開放してしまい、時守の里やこの内乱の最中に出てこられては困る。

少なくとも、自分が内乱を平定するまでは王にはあの森の中に居てもらわなければ成らない。

(あの森の中だと・・・時が止まってしまっけど)

森と霧の結界は元々時守の長老である先見のおばばと予知見の姫、そして自分が、時の精霊の協力を得て作ったものだ。

あの霧の中では時は外の時間よりもずっとゆっくりと過ぎる。あそこの一日は外界での一週間に値する。そういう風になるように自分はその結界を作った。

ソルティス

それに影響されないのは時守の里の民と自分の異母兄・星替のフェルスリユート、そしてその護符を持つ者のみだ。

彼と同行していたロシキスの王子と姫たちも彼の護符を貰っているはずだから、それが有効の間は結界の影響を受けない。

(後は、上空を飛んでいけば大丈夫だけどという無茶な手段だけど、そんなの聖龍族か龍騎士しかできないだろうし)

その時、遠方の空に銀色に輝く龍を見つけた。どうやらレティア姫はロシキスでの会談を終え、森に残してきた姉と弟の所に戻るようだ。

(しばらく、彼女にがんばってもらっしかないか)

ソルティスはそう心の中で決定付けると、自分も宿営の準備の手伝いをするためにクラウドの元へと向かった。

#### 第四十八話：街道の分岐点（後書き）

やっと王国迷走編の目的地が見えてきました。というか久しぶりの主人公グループです。

前の章では何度も、そっちに視点を向けようと努力しましたが、話の流れ上他のグループ（アーシア組・ルアンリル組・レティア組）に行ってしまう・・・ありやあな状態でした。

しかしこれ以降は大丈夫だと・・・大丈夫かと・・・きつと・・・うん、きつと大丈夫でしょう。

## 第四十九話：別れの宴

その日、村は明るい歌と踊りに満ちた。

最初、何事が始まったのか解からなかった村人たちだったが、グランテが

「うちの占い師が大将軍の元へと出仕するのが決まったんだ。その祝いだよ」

と偽りの理由を述べ、踊り子たちが大盤振る舞いで食事を勧めてくるので、彼らも久々の祭りとはかりに盛り上がった。

何分にも内乱が起きたばかりで交通がいろいろと制限されており、商売が上がっている状態ではこういう明るい話題はありがたいものだ。

さらにここはガイフィードの宿営地の管轄であるため、大将軍の人気は高い。その彼のもとへと出仕する占い師がいるとなれば、否が応にも盛り上がるだろう。

グランテは占い師についていく用心棒たちも騎士として受け入れられるだろうと付け加えたため、村は上へ下への大騒ぎになった。

「元気でね」

「成人したら、子供、作りに着てね」

踊り子たちは好き勝手なことを言いながらも、別れと景気づけにふさわ相応しい見事な踊りを披露していく。ソルデイスはグランテの隣に座ると回りに聞こえないように声を潜めた。

「ここまで、ありがとう。星見のグランテ・・・」

普通の会話をするようにそう告げた王子にグランテは苦笑して見せた。

「やっぱり知っているとは思ったよ」

この王子を見た瞬間に『ふれてはいけないもの時見』だと彼女には解かった。

だからこそどんな協力も惜しまなかったし、彼が『それ時見』であることを誰にも告げなかった。

もともと自分はあるの嫌で、大恋愛の末、里「りき」と名前を棄てた者だ。それが今更、なぜあの里が一番欲している『星見』と一緒に行動することになるのか正直、戸惑うことも多かった。

「ごめんね、僕はあなたのお母さんを助けることができなかった」  
時守の里の大量虐殺・・・それはソルデイスの存在が引き金となつて起こつた事件だった。

だからこそ彼は里を・・・人々を守ろうと、努力したのだけれど、結局はすべて徒勞に終わってしまった。自分は時守の長老であるおばば・・・彼女の母親によって守られ、彼女は替わりにその命を落としてしまった。

「・・・謝る方が失礼だよ。母さんはあなたを守ることを覚悟して無謀な賭けにでたんだ。そしてあなたは生き残り、母は念願が叶つた状態で命を落とした。あの人は絶対に満足している。それを謝るなんて無作法なことしないでくれ」

覚悟したものの死に対して、生者ができるのは感謝することのみだ。謝るなんてことは、その死の価値を貶めることになりかねない。  
「感謝・・・する？」

グランテの考えを『読んだ』ソルデイスが不思議そうに彼女を見つめてくる。

「そう、日々生きていることをその人たちに感謝するのさ。例えば、王子「あんた」が自らの死を望んでいたとしても、ね」

グランテの言葉にソルデイスの目が見開かれる。どうやらこの王子は自分がそういう態度を示していることに気付いていないらしい。  
「やるべきことはやるだろうけど、その先の無駄な生を望んでいるようには見えないよ・・・あなたの死にたがりは見ていれば解かる」  
大切な者を守るために今は生き続けるという道を選択しているが、それさえ無くなれば彼は生に対しての執着を失うだろう。

ソルデイスは恥ずかしそうに視線をずらすと、楽しそうに踊る踊り子たちに視線を移した。

「たしかに、生に執着はないです。死にたがりつて言葉は当たって

る」

呟く言葉はどこか悲しそうに響いた。その口元は苦笑しているように小さく歪んでいた。

「でも、どうやって僕も死ぬことはできない・・・意志の問題ではなく、真実の意味で永劫の時間を生き長らえる運命にあるんです」  
永劫の繁栄、無限の生を求めている父の元ではなく、普通の生と死を望む自分のところに降りてきてしまったその星をソルデイスは小さい頃から憎んでいた。

信頼した人をすべて失っても生き長らえることはどれほど苦痛なのか・・・今、改めて実感する。

「だからこそ、生に執着がないのかもかもしれません。どうやっても死を迎えられない生は逆に死んでいると同じぐらい無に等しいですから」

グランテは「そうかい」と呟くとどこ遠くを見ている王子の頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜてやる。

今の彼にはどんな言葉も慰めにはならない。ただ静かに見守るところだけが、彼が受けてしまった『無限の生』という地獄を知った人間ができることだ。

ソルデイスはそんな彼女の優しさに、少しだけくすぐったそうな顔をして静かに瞼を閉じ、宴の音色に心を休ませた。

## 第四十九話：別れの宴（後書き）

もちろんソルデイスはグランテの正体を知った上で、ずっと行動してました。そうでなければ猜疑心の強いソルデイスはあんなにいっぱい内情を喋りません。

旅は佳境を迎え、まだまだ登場人物達は交錯していきます。

## 第五十話：いざ、北へ

翌朝、ガイフィードの宿営している砦に辿り付くまでに必要な食料を分けてもらったソルデイス達は、短い挨拶と共に此処までの路銀としては十分な金貨をグランテに渡すと街道の村を後にした。

一座はこれから南に下ると言っていたから、丁度間逆の道行きとなる。

「後、5日、何事もなく過ぎてくれれば」

すでにガイフィードの管理している地域に入っているとはいえ、この混乱に乗じてディナラーデ卿の手の者が潜んでないとは言いきれない。注意はどれだけしても無駄にはならないとこの旅で深く実感した。

ただでなくとも子供だけの一団は目立つ。その上本人達にはあまり自覚はないが、スターリングを含めた全員が人目を引く容姿の持ち主だ。

それに気付いて出て来るのが敵か味方かは神のみぞ知るところだ。いや、実際は弟にはその『未来』<sup>とき</sup>が見えるのかもしれないが、クラウスは彼に時を読んで欲しくなかった。

兄がさらわれた時の嘆き、あの夜、自分は目を覚ましていた。用心棒の一人が咄嗟に嘘をついてくれたが、あの鋭いグランテが気付いていただろう。あの時、半信半疑ながらも自分はソルデイスを・  
・いや自分の身の安全を優先した。

（さすがに目の前で拘束される兄を見たときにはその選択を忘れて助けようとしてしまったが）

クラウスは自己反省をしながらひたすら馬車を走らせた。

街道沿いにある宿泊施設は概ね、占い師の格好をしているソルデイスを歓迎してくれる。何事も無く馬車は3日進み、予定よりも早くガイフィード將軍のいる砦に到着できそうだった。

砦に近づくと複数の街道が一つの大きな街道に合流してゆく。ソ

ルデイス達の通ってきた街道も例には外れず、リディアの首都とロシキスの首都をつなぐ大きな街道へと昼頃に合流した。

「後、もう少しだな」

クラウスは目の前に見えてきた砦を囲む高い城壁に少し心を躍らせた。他の二人も目を輝かせたが、ソルデイスだけは眉間に皺を寄せ、自らの傍らに置いておいた剣に手をかけた。

「でも、もうすぐ・・・来るよ」

彼の一言にスターリングが自分の剣を手に持った。

クラウスは馬車馬に先ほどよりも鞭を入れると一気に砦に向かってスパートをかけた。自分たちに気付かれたことがわかったのか、追手は馬車隊と騎馬隊に分かれて必死にソルデイスたちの馬車に追いつがる。

「ルシエラーラ！」

ソルデイスは自分たちの馬車に併走しながらついてくる神馬の名前を呼んだ。馬車の横から聞こえる嘶きに、ソルデイスはそちら側の幌を一刀のもと切り裂くと、シエリルファーナの身体を掴み、その馬の背に投げる。

何が起きたのか解からないまま、ルシエラーラの手綱を捕らえて馬上の人となったシエリルファーナにソルデイスは砦を指差した。

「急いで援護を呼んできて、大丈夫、神馬の足に追いつけるものな  
どいない」

やっと兄の意図を汲むことの出来たシエリルファーナはしっかりと手綱を握ると、足で馬のわき腹を軽く蹴ってやる。それを合図にして、神馬は風を裂くように走り始める。

ソルデイスはそんな彼女へと矢が向けられないように、開けた幌から何本もの矢を彼らに向かって放って擁護する。スターリングも同じ様に、上手に弓を使い次々に馬上の人間を落としていった。

クラウスは馬車に追いついてきた騎馬の騎士の刀を自らの刃で受け止めると上手に弾き、右へ左へと受け流す。

（さすがに不利な状況だ・・・いつそ、馬車を棄てるべきか？）

棄てたところでこんな野原で弓兵と騎馬兵から逃れられるだろうか。クラウドスは馬車を操りながら必死に自分たちが取るべき道を詮索していた。

その時、馬車の両側からまるで挟み込むように騎馬が突っ込んできた。

崩れるバランス。クラウドスは何とか手綱を操りながら、その一騎を薙ぎ払い、もう一騎の方へと刀を薙ぐ。

しかし、その刀が届く前に騎馬の持っていた槍は彼の腹部を貫いていた。

第五十話：いざ、北へ（後書き）

今のところ予定で通りクラウスが怪我をしてくれました。

最初の予定では矢を受けるだけの設定でしたが、やっぱり瀕死の重傷って言うのは槍で腹部を貫かれるぐらいじゃなきゃ駄目ですよね？  
ちなみにシェリルファーナはまだその事実を知りません。

## 第五十一話：砦前の攻防

砂埃を上げて近づいてくる馬車・・・さらにその前を尋常でないスピードの騎馬がこちらに近づいてくる。

目を見張るほど立派な馬に乗った子供に見張り台に立っていた門衛は驚いた。

「助けて！お願い！助けて！！兄様たちが乗っている馬車、襲われているの！！助けてっ！！」

馬の上に乗っていた子供は少女だったようで、彼女は必死に砦の人間に助けを求めてきた。

どうやら後ろで暴走している馬車は彼女の兄弟たちらしい。襲っているのは・・・どうも名のある騎士に見える。いったいこれはどういふことなのか。

門衛は再度、馬と少女を見た。彼女の目には恐怖と憤りの為に涙が浮かんでいる。

きっと何か事情があるのだろう。門衛はそばにいた上司に指示を仰いだ。

「しかし、あれは・・・」

確かに子供たちを助けたいのは山々だ。しかし、その馬車が騎士に襲われていると成れば話は変わってくる。

目の前の少女や彼女の兄達という人物が盗賊で、これがなんらかの罠になるといふ可能性もあるのだ。

「門を開けよっ！」

逡巡している彼の後ろから鋭い声が門を管理する塔へと飛んだ。見ると砦の最高責任者ガイフィードが馬に乗った少女に門の内へと入るように指示していた。

將軍は門が開き始めるのを確認すると見張り台から一気に門の前へと駆け下りる。

馬は僅かの隙間が開くと、ひらりとその隙間から入り將軍の前で

その足を止めた。

「ご無事でしたか」

「私は、大丈夫。お兄様たちを・・・」

神馬の速度で駆けて来たため、大分離れてしまったが兄達はまだあの騎士たちに襲われているはずだ。

見上げてくる王女をそばにいた侍従に託し、ガイフィードは僅かの兵を連れて馬車へと向かい駆け出した。

腹部を貫かれたクラウスは自らの身体に刺さった槍の柄を持つと固定し、自らの刃でその部分を鋭角に切り落とす。腹に槍を受けた苦しい状態で彼は刃を失った槍の柄を持つと、勝ち誇った顔をしている男に向かって投げつけた。

反撃を食らうとは思っていなかったのだろう。

鋭く切り取られた柄は見事男の喉を貫き、もんどりうって男は騎馬の上から転げ落ちた。

「兄上・・・!?」

ソルデイスはあまりの出来事に少し我を失う。

違う、彼はこんな風には死なない。自分の見た未来<sup>とき</sup>では彼は行き続けることになっている。自分の見た未来が変わる？そんなはずはない。

「グレイさんっ!」

呆然としているソルデイスを他所<sup>よそ</sup>にスターリングが矢を番<sup>つが</sup>えたままクラウスの元へと駆け寄る。

傷を受けても尚、馬車を走らせようとしている彼の手から手綱を奪うと、

「ソリユード!彼を横に寝かせてっ!それから胴体の傷の上と下を紐で縛ってな止血をっ!!」

我に返ったソルデイスはスターリングに言われた通り、手近にあ

った幌の切れ端を裂いて長い布を作り、止血を行った。  
傷口からの出血のせいかクラウスはぐったりとしている。

(早くなんとかしないと)

止血を終えたソルデイスは兄の血で濡れた手で弓を持ち、兄を傷つけた者達を無心に……ただ機械的に射殺しつづけた。

ケイシユンの背中に乗ったルアンリルはやっと見えてきた砦がざわめいているのに気が付いた。

何があつたのだろう……と考えていると、かなり上空を飛んでいたケイシユンが砦の手前から高度を落とし始めた。

「ケイシユン殿？」

『あれを、見る』

訝しげに問い掛けてくるルアンリルに龍は砦へと駆けていく馬車を示した。

(あれは……っ！)

その馬車には見覚えがあつた。あの内乱の日、王子たちを乗せて王都を脱出した馬車だ。

手綱を握る少年には見覚えがないが、後ろの幌から顔を出して、次々に敵を落としているのはソルデイス王子に間違いなかった。

しかし一緒にいるはずのクラウス王子の姿もシェリルファーナ姫の姿も見えない。

もしかして彼らは逸れてしまったのだろうか。それともサイラス王子が捕縛されたのを受けてばらばらに行動することにしたのか。

何故か言いようのない不安がルアンリルの胸に去来した。

「すみません、あの馬車の上に降りて下さい」

焦りを含んだ声にケイシユンは理由も聞かず『了解した』と答えたのだった。

## 第五十一話：砦前の攻防（後書き）

クラウドス、重体です。ソルデイス、茫然自失です。

機能が低下した兄弟のかわりにスターリングががんばっています。

そんな中でアンリルが合流目前。

いろいろと話が交錯し過ぎててどこから書いていけばいいのか困っています。

## 第五十二話：衝撃的な再会

急に馬車の上にかかった陰にスターリングは何事かと視線を上空に向けた。

「え……り、龍？」

人間同士が争いしている所に聖体を持つ龍族が降りてくることなど珍しい。見るとその龍の背には黒髪の美しい少女が乗っている。

「ルアンツ！」

今まで機械的に弓を弾いていたソルデイスが突如現れた龍の背に乗るルアンリルを見つけその名を呼んだ。

「兄上が槍で腹を突かれてっ！早く、治癒魔法をっ！！」

ソルデイスの言葉にルアンリルは目を見開いた。

近づいた馬車の中からは確かに覚えのある気配オーラが存在している。だがその存在は今にも消えそうなほど弱い。

どくんっ

心臓が不思議なほど大きく鳴った。

破られた幌の隙間からクラウドスが横たわる姿が見えた。馬車の中は彼の血で紅く染まり、倒れている彼の顔からは血の気が失われている。

（いやだ、こんな……）

どくんっどくんっ……

体の中の血が怒りで沸騰していく。

大切な者の命を奪う者への怒りが爆発しそうな勢いで増して行く。ルアンリルは無意識に大量の炎の精霊を呼んでいた。怒りに因って召喚された精霊は、その感情を受け、馬車を取り囲む騎士たちを次

々に屠っていった。

突然、現われた炎に騎士たちの馬はもちろん、馬車の馬までもが足を止めた。

ルアンリルはケイシユンの背から飛び降りると、腰に携えた剣を引き抜き炎の中で逃げ惑う騎士に襲いかかろうとした。

「ルアンリル」フィーナ、それは炎の精霊に任せて早く治療を」  
聖体から人の姿に戻ったケイシユンはルアンリルの腕を掴むと炎の壁に守られた馬車の中へと連行した。

馬車の中ではソルデイスとスターリングが懸命の手当てをしていった。

クラウドの腹部からは未だ夥しい血が流れている。衝撃的な光景に真っ白になりそうな頭を今度はなんとか冷静に保ちながら、ルアンリルは彼らの側に駆け寄った。

近くで見ると傷の深さが明らかになる。

「ケイシユン殿、治癒魔法の詠唱同時に幾つ出来ますか？」

ルアンリルは魔法の複数発動の準備をしながら、傍らで治癒の能力のある風と水の精霊を呼んでいるケイシユンに問い掛けた。

「理力魔法の同時詠唱って・・・そんなこと可能なのか？」

少なくともそんな方法は聖龍族には伝わっていない。

もしかして精霊族独特の魔法なのだろうか。

「手順さえ踏めば簡単です。ケイシユン殿なら・・・この『水の石』を利用し、力を分散させて魔法を発動させるんです。やってみせま  
すから真似してください」

ルアンリルは赤い石を4つ、自らの前に置くとそれに絡めるように自分の理力を発動した。

「大地を司りし力よ、癒しの波動よ、かの者へと宿りてその傷を癒  
せ。治癒泉」

呪文と同時に石が光りそれぞれの石から治癒魔法の波動がクラウドへと流れ込む。その一つ一つは並みの魔術師が一人で行う治癒魔法よりも強力そうだ。

ルアンリルの魔法が発動すると同時に、傍にいたソルデイスがクラウスの腹に刺さったままの槍の先端を抜いた。それにより更に出血するが強力な魔法のお陰ですぐに回復してゆく。

ケイシュンもルアンリルに習ってとりあえず3個の石に自らの理力を絡めてゆく。頭で分散させるイメージをつけ、魔法の詠唱に入る。

「治癒を持つ風、命の泉よ、森の加護を持つかの者に治癒の恩恵を、  
バイラ・ウエイン  
治癒風」

石が光りだすと同時に大量の理力が急速に失われてゆく。

こんな魔法は余程の理力を持つ者じゃないと行えない。下手な者が手を出せば理力が空になりぶっ倒れることになりかねない。

ケイシュンは自分よりも多くの理力を取られているはずのルアンリルへと視線を移した。この急速な消耗でルアンリルが倒れるのではないか、という心配が頭を擡もたげたからだ。

しかし、目の前の聖長はその気配を微塵も感じさせなかった。

とりあえず、ケイシュンは自分の後ろに控えている先ほど呼びつけた精霊にもクラウスを直すように指示を出し、自らも治癒魔法への集中を高めた。

## 第五十二話：衝撃的な再会（後書き）

サブタイトルはルアンリルとクラウドスの再会ということでした。

治癒の理力魔法は水・風・大地の所屬エレメンツを持つ者が使えます。ちなみに水は血・風は皮膚・大地は肉を治癒してゆきます。ルアンリルが治癒魔法を唱えて直ぐにソルデイスが槍を抜いたのは肉の形成に槍が噛んでいる状態ではまずかつたからです。

ちなみに一番強い治癒魔法は森の所屬エレメンツを持つ者が使う治癒魔法です。

## 第五十三話：治癒の光、怒りの炎

馬車の中が治癒の光に満ちて数分の後、馬車を守る炎の壁の向こうが急に騒がしくなった。

「剣戟けんげきが、聞こえる・・・ガイフィード將軍がついたみたいだ」

全員の疑問に答えるように目の前の黒髪の少年はぼつりと呟いた。

（・・・少年？）

ケイシユンはその顔立ちと水色の瞳をしつかりと覚えていた。

この子・・・いや、この方は間違はなくソルデイス王子だ。光なす黄金を隠している事もあるが、いつもとは違う無表情さに判別が遅れた。

表情一つで全く気付かない程、彼の印象は異なっていた。

（後ろの少年は知らないが寝ているのはクラウドス王子だろう。サイラス王子に少し顔が似ているな）

ケイシユンは改めて馬車の中の人間を再確認する。

ルアンリルが教えてくれたこの石を利用した理力の発動法は、魔法が発動してしまえば後は目的が達成されるか唱えた人間の理力が切れるまでは何もすることはなくなる。普通の詠唱ならば手を翳す場所を替えなければならず、第一媒体が自分の身体になるからつねに意識は魔法に集中しなくてはならない。そういう意味ではとても楽な魔法だが、逆にいえば限度をしない危ない魔法ともいえる。

もともと利用をしていたルアンリルならばそこの加減はわかるのかも知れないが、とりあえずケイシユンには限界がどの辺りで来るのか境目がわからなかった。

ソルデイスはしばらく治癒魔法の進行を見ていたが、傷が大分塞がり、クラウドスの顔色が少しずつ赤みを帯びてきたのを確認すると傍らの剣を持ち立ち上がった。

「僕も参加してくるよ。スターリングは悪いけどこの二人の世話を

お願い」

彼はスターリングに支持を出すと、そのままの勢いで炎の壁の中へと飛び込んだ。

ルアンリルがそれに気付き止めようとしたが、一瞬遅く、彼は普通に炎の中で佇んでいた。

「大丈夫、僕は炎の加護を貰っているから」

ソルデイスは炎の中で微妙に顔を歪めて笑って見せると外で戦う將軍達に加勢すべく壁の向こうへと消えていった。

ルアンリルは心配そうに彼が消えた先を暫く見ていたが、今はクラウスの治療に専念すべきと判断する。

「すみません。普通の治療用具もだしていただけますか」

スターリングはルアンリルの指示通り馬車の隅に載っていた救急用品の入った箱を持ってきた。

ルアンリルはそこから包帯とガーゼを選び出し、治療魔法をかける腕や足などの怪我の治療を始める。

「普通の治療なら俺もできます・・・」

「いえ、それよりもあなた自身の怪我の手当てをケイシユン殿にしてもらってください」

スターリングはその言葉にはつの悪そうな表情かおをした。

今、上着で隠しているが先ほど馬車を操っている最中に右の二の腕を矢で射られた。とりあえず矢は抜き、腕の根元で止血していたがこの人にはばれているようだ。

「案外無茶するな、お前」

ルアンリルに言われてスターリングの傷の具合を見たケイシユンは呆れ声で文句をいいながらも彼の腕を手当てし始めた。

急に現れた龍と炎の壁に守られた馬車を見ながら、ガイフィードは焦っていた。

シエリルファーナ姫の訴えで飛び出して来る直前、見張りに立つものからの馬車を繰る者がわき腹を槍で刺されたとの報告があった。混乱している王女の話からは得られる情報は少なかったがあこの馬車にはクラウス王子とソルデイス王子それから近隣の村から同行している少年が乗っているらしい。

それを報告の内容から照らし合わせて考えると、馬車を操っていたのはクラウス王子、そしてソルデイス王子は荷台にて弓で応戦しているということになる。あまり芳しくない状況だ。

そして馬車を助けるために飛び出した彼の目の前に、龍族が聖体で現れた。それと同時に馬車は厚い炎の壁に包まれる。

騎士たちはやっと追い詰めた獲物を捕らえようと外から矢を番えるが、その全ては炎に屠られた。

ガイフィードは自らの手綱から手を離すと足の力だけで馬を操り、大きな弓で炎を取り囲む騎士へと矢を放った。その矢は見事に敵の一人の剥き出しの目的の中し、その死骸は馬の上から吹き飛ばされる。

「我が名はフランシエンド・ガイフィード！腕に覚えのある者はかかってくるがいつ！」

その言葉と同時に弓を棄て、腰に携えた剣を引き抜き騎士の中へと切り込んでゆく。將軍の引き連れている部下たちも彼に習えと剣を手に騎士達へと切り付けた。

炎の壁を囲む形で戦場は拡大する。最初は逃げようとしていた騎士たちもガイフィード達が思った以上に少数で出てきているのを知ると踵を返して攻めへと転じた。

だが少数といえど精鋭固められたガイフィードの騎士たちは多数の攻撃に怯む事無く、存分に剣の腕を披露してゆく。

「ちいつ」

大きい獲物を諦めきれない一人が無茶を覚悟で炎の壁に挑もうとした。

しかしその瞬間、炎の中から飛び出してきた徒かちの少年により馬の

手綱が切られた。男はもんどりうって落ちたところを首を掻ききられ絶命した。

少年は騎士が持っていた槍を奪い取ると、手短にいた騎士へと向かってそれを投げつける。突然の攻撃を喰らった騎士は何が起きたか解からないまま馬から落とされた。

第五十三話：治癒の光、怒りの炎（後書き）

ソルデイス、静かに怒っています。

怒りの矛先は自分達を襲って来た騎士たち＋守り切れなかった自分です。

## 第五十四話：炎から出し鬼神

炎の壁を越えて現れた少年の姿を見てガイフィードは自分の目を疑った。

黒髪ではあるが確かにあれはソルデイス王子だ。彼は怒りに満ちた目で死んだ騎士の槍を拾いあげると次々に馬上の敵へと投げつけてゆく。それは的確に急所へと命中し、少年が投げたとは思えない力で突き刺さった。

「あの少年はいつたい・・・」

傍で控えていた副官のストラウムが鬼神の如き力を振るう少年をみて嘆息する。

少年の近くに主を落とされた馬が近づぐ。狂ったように走るその馬の手綱を彼は淀みない動きで捕らえると、まるで羽でも生えているように優雅にその背に飛び乗った。

彼は一、二度その背を撫でて馬の気を宥めると、將軍の近くまで走ってくる。

近づいてくる少年に警戒しているストラウムを他所よそに、彼は何も持っていない手を差し出した。

「その槍、貸して」

急な申し出に「なにをつ！」と反応しかけたストラウムの手からガイフィードは槍を取り上げると王子に向かって差し出す。

「ありがとう」

ソルデイスは能面みたいに無表情のまま等閑なおいさじの礼を告げると未だ残っている騎士の群れに単身で切り込んでいく。先ほどまでの力わざとは違い、的確に急所を捉えながら馬上から風ぎ落としていく見事な馬上の戦法だ。

「まさか『あの方かれ』にこのようなことが出来るとは・・・」

クラウス王子の勇猛果敢さは元々王国内でも有名だ。彼に一目も二目も置いている武人は多い。

しかしソルデイス王子といえば、勉強・武術において中の下ぐらい、その上練習・鍛錬が嫌いだと有名だった。

だがそれもどうやら彼が自分を『実父』<sup>てき</sup>から命を守るための芝居だったようだ。

将軍は感心しながら自らの剣を抜き、王子の手助けをするために彼の後方へと自らの騎馬を進めた。ストラウムも近場に落ちている槍を拾うと、ガイフィードの後をついていく。

戦神の如き剣術と荒ぶる神の如き気迫を突きつけられた騎士たちは今度こそ、逃げを打った。しかし時はすでに遅く、逃げようとする先にまるで心を読んだようにソルデイスが先回りをして、彼らを一網打尽にする。

投降してきた騎士を除き、すべてを切り捨てたソルデイスは慣れた仕草で槍についた血を払うとそれをストラウムに差し出した。

「助けてくれて、ありがとう」

差し出されたそれを奇妙な感覚で受け取りながら、ストラウムは傍らにいる自分の指揮官ガイフィードへと視線を向ける。

「ご無事で何よりです。王女が飛び込んできたときにはどうなるのかと思いました」

将軍は声を潜めながら少年に敬語で話し掛けた。まだ少年の正体<sup>ソルデイス</sup>がわかっていないストラウムは何事なのか理解できていないようだ。「無事とは言い難い。兄上は未だ重体。ルアンリルと次期龍長殿<sup>ケイシユン</sup>が懸命に治療をしているから大丈夫だろうけど」

ソルデイスは自分が乗ってきた馬車の方へと視線を移した。そこは先ほどよりも小さくなっているとはいえ、未だに炎の壁によって守られていた。

「あの状態では、助け様ありませんな」

「そうだね」

ガイフィードの呟きに、ソルデイスは苦笑すると炎の壁の前まで馬を近づける。

「ルアン、炎の結界を解いてくれないか？馬車を襲ってきた奴らは

全部やつつけたから」

先ほどまでの大人びた口調ではなく、いつもの少しだけ甘えた感じの残る口調でソルデイスは炎の壁に向かって呼びかけた。その声を聴いて、ようやくストラウムにも目の前の少年が誰なのか理解できた。

「以外、ですね・・・」

「ああ、生き抜くために必要だったのだろうな、あの演技も剣技も・・・」

副官の言葉にガイフィードは相槌を打つと、事後処理をするために行動を開始した。

炎の外から聞こえる剣戟の音が止んだ。スターリングはそのことにほうつと息を吐き出した。

目の前の青年は先ほどよりも顔色がよくなり、大きく開いていた傷も殆ど塞がりかけている。後は彼自身の治癒能力でなんとかなるだろう。

ルアンリルは飲み水として持っていた水筒の水を十分に使い、綺麗なガーゼを濡らすとそれで脂汗の浮かんでいたクラウドの顔を拭いてやる。首筋、額、頬・・・続けて拭いていると微かに彼の瞼が動いた。

## 第五十四話：炎から出し鬼神（後書き）

ソルデイス、怒りのままに剣っていうか槍を奮っています。

彼は5歳ぐらいの時から城を出る直前までずっと父親からの刺客相手にほとんど一人で戦っていましたので強いのは当たり前です。実戦で強くなった人です。

ゆえに人を殺すことにあまり抵抗はありません。

## 第五十五話：炎の結界の開放

臉は少し震えると深く美しい緑色の瞳をうつすらと覗かせた。

「あ……」

ルアンリルは彼の名を呼ぼうとして躊躇した。

ここにはケイシユンだけではなく何も知らないだろうスターリングもいる。ソルデイスが頼み事までする相手を疑うわけではないが、それでもわざわざ公表すべき事ではない。

「ル……アン？」

彼は自分を覗き込んで来るルアンリルに少し目を細める。

「そうですね？」

ルアンリルはクラウドスの手を取ると自分の頬に当てた。自分の体温が触れる指から伝わるようにと、その指に自分の指を絡めたりした。

「これは、夢？」

「現実です……さ、眠ってください……」

まどろみへと誘うようにルアンリルはその頭を優しく撫でてやる。彼もそれで安心したのか、静かに目を閉じた。

「えっと……目のやり場に困りますね」

「そうだな」

誰もいない中でやるのならまだしも、狭い馬車の中、視線を移動させるのも困難な状況で行われたいちゃつきにスターリングは顔を紅くし、ケイシユンは呆れたように息を吐いた。その言葉にルアンリルが顔を紅くした瞬間、外から穏やかな呼びかけが聞こえた。

「ルアン、炎の結界を解いてくれないか？馬車を襲ってきた奴らは全部やつつけたから」

それは聞き間違えるはずも無いソルデイスの声だった。

ルアンリルはその声に急いで馬車を包む結界を解除した。炎の壁がルアンリルの命令であっさりと霧散するとうやく外の様子を窺

い知ることが出来た。

ソルデイスはどこで調達したのか軍馬に跨りこちらを見ていた。その後ろで部下たちに指示を出しているスラリとした体躯の男性はガイフィード將軍であろう。大將軍は捕らえたばかりの騎士を遅れて送れて到着した馬車の中に手足を縛った状態で乗せるように指示をしていた。

ルアンリルは眠ってしまったクラウスを残して馬車を降りるとガイフィードの近くへと赴く。

近づいてくるルアンリルに気付いた彼は馬を下りると、にっこりと人のよさそうな笑みで迎えてくれた。

「お久しぶりですな、<sup>ルアンリル</sup>聖長殿」

「この馬車を助けていただき、ありがとうございます」

ルアンリルは丁寧な礼をすると先程まで乗っていた馬車のほうへと視線をやる。

「怪我は治りましたかな？」

視線の先を読み取ったガイフィードにルアンリルは「ええ」と短く応える。

見るとルアンリルと入れ替わりでソルデイスが馬車の方に向かっていった。彼はスターリングと呼ばれた少年に2、3言話すと大きく頷いた。その瞳には安堵の色が浮かんでいる。

「それにしても、驚きました。あの方が真剣に剣を揮うのを始めてみました」

ソルデイスの知識は勿論、剣術・戦略・騎馬術まですべてルアンリルが教える担当となっていたはずだ。ガイフィードはそう思い誉めるために言葉を紡いだのだが、ルアンリルは微妙に苦笑するのみだった。

「私も、あの内乱の日、初めてあの方が戦う姿を見ました。私とは一度も剣を合わせて下さない方ですので・・・」

今更ながらに王子がとことん武術の授業を抜け出していた理由がわかる。

訓練が苦手だったのではない、自分の剣の技量を父親であるバルガスに隠すために逃げていたのだ。

「そうでしたか・・・」

ルアンリルの応対に事実を読み取ったガイフィードは慰めるようにルアンリルの細い肩をぽんつと叩いてやる。

「しかしその隠れた武術の腕のお陰で我々も被害が小さくて済んだ、よいことです」

炎から出てきたソルデイスを弱輩者だと侮あなごった騎士たちは彼の手により悉ことごとく命を落とした。すべてが彼らの慢心が招いた結果ではないと思うが、やはり驕おごった報いは少なからずあつたはずだ。

味方である自分たちですら、彼の行動に一旦、攻撃の手を止めてしまった。敵である彼らには効果こうか覲きめ面めんだっただらう。

「お兄様~~~~っ！スターリンググ~~~~っ！」

見張りからクラウドス王子の怪我を耳にしたのか、シエリルファーナは自分の愛馬に跨り、涙をいっぱい溜めながら現場へと舞い戻ってきた。

彼女の乗っている馬を見てルアンリルは眼を見開いた。

あれは神馬・ルシエラーラだ。いったい何がどうなれば、神馬が自らの色を変え、翼を仕舞い、王女を背中に乗せるのだろうか。

どうやらほんの少し離れていた間だが様々な事件があつたようだ。

## 第五十五話：炎の結界の開放（後書き）

ルアンリル、クラウド人目を憚らずイチヤイチャしております。  
砂糖を大量に履きそうな雰囲気を馬車という限られた空間の中で強  
引に堪能させられた二人は未だに気の毒としか言い様がないでしょ  
う。

## 第五十六話：舞い戻った王女

王女を乗せた神馬ルシエラーは風の如き速さと軽やかさで馬車の元へと舞い戻ろうとしていた。

『おや、聖長がいる・・・龍までいるとは珍しいな』

元から乗っているあの高貴な人たちが皆から救援に向かった十羽じゅっぱ一絡ひとからげの人間とは違う気を読み、ルシエラーは自分の背に乗る愛らしい王女に話し掛けた。

「え、ルアンが来てるの？」

龍族の人がどうして来ているのかは知らないが、ルアンリルの脱出・来訪はシエリルファーナにとり待ちに待った嬉しい知らせだ。

王都を脱出する時、別れを惜しんだ恋人未満な二人の姿が彼女の目の前に飛来する。

『森を内包する王子も時を支配する王子も無事のようだ』

神場が形容する『人物』が二人の兄だということは何となく理解できた。

旅に出る前の自分では理解できなかったことだ。目の前で起きていたはずの物事を何も知らなかった・・・いや見ようとしてもしなかった自分が恥ずかしく情けなかった。

人の集まっている場所に近づいてくると先日別れたばかりのルアンリルの姿が見えた。服の前の辺りが血に染まっている。クラウスの治療をしているときについたものだろうか。

馬車の近くでは自分と同じように馬に跨ったソルディスがスターリングと何事かを話していた。

「お兄様~~~~っ！スターリング~~~~っ！」

とりあえず叫んでみると、將軍の隣にいたルアンリルがこちらを見た。何か驚いているようだ。馬車のところにいる二人は苦笑を浮かべながらこちらに手を振ってくれる。

ルシエラーは一足飛びに大地を駆け抜け抜けると、ルアンリルの傍

で足を止めた。

「ルアンリル・・・よかった。ちゃんと王都から抜け出してくれたのね」

シエリルファーナだって聖長が王都の基盤を支えていることは重々承知している。

だがあの場所にルアンリルが居続けることがどれほど危険かも理解していた。

「あそこにいる次期聖龍族の長であるケイシユン殿の力を借り、なんとか逃げることができました」

本当はもう二人の人物の協力があったのだが、それを今ここで告げるのは危険だった。

それに捕縛中に新たに知らされた事実・・・サイラス王子の出生の秘密を説明してもいいのかすらルアンリルには判断がつかなかった。

「よかった・・・それよりも、兄様と出会わなかった？」

「！・・・」

王女の素直な質問にルアンリルは息を呑んだ。

それを察知したガイフィードはパンパンツと手を叩くと二人の会話に割って入る。

「とりあえず、捕縛のほうは済みましたな・・・遺体のほうは専門の役人を手配して手厚く葬りましょう」

ガイフィードの突然の割り込みにシエリルファーナはきょとんとした。

訳も解からずに首を傾げていると、ルアンリルの後ろでソルディスが静かに首を横に振った。どうやら自分がした質問はこんな開けっぴろげの場所ですべきものではなかったらしい。

彼女は慌てて口を噤むと「ごめんなさい」とルアンリルに聞こえるように囁いて兄たちが待つ馬車へと入った。

馬車の中は血で濡れていた。

むんつと立ち込める臭いにシエリルファーナは思わず顔をしかめた。馬車の後部では血塗れた床の端で兄・クラウスが眠っていた。

彼の周りには不思議な色を放つ石が7個ほどふわふわと浮いている。

「あー・・・とその石触れるなよ、それから治癒魔法が出るから不思議そうに眺めていたシエリルファーナの背後から見知らぬ男が声を掛けた。

振り返ると珍しい衣装を来た男がにっこりと笑いながら手を振っていた。長い黒髪、不思議な赤い目を持つ青年の額には龍族でも高位の者しか持たない鱗がどうどうと浮かんでいる。これがルアンリルの言っていた『ケイシユン殿』という人だろうか？

「お姫さん・・・って呼べばいいのかな？」

「シエリルよ、大怪我負っている兄がグレイと、馬に乗っている兄がソリユードよ」

自分の素性を知っている相手に、声を潜めながら彼女は偽名を教えた。

先ほど、ルアンリルは上手く『名』を呼ばずにいてくれたが、目の前のこの人がそんな器用なことが出来るように見えなかったためだ。

しかし、その名前を聞いた彼は少し眉間に皺を寄せた。

第五十六話：舞い戻った王女（後書き）

はつきりいって話が進まない回のサブタイトルをつけるのは至難の業です。

せめて主人公が動いてくれれば、いいのですが段段と影が薄く・・・と、これは禁句か。

それにしても彼らはいつになったら皆に入れるのでしょうか。

## 第五十七話：意味を持つ眞名

ケイシユンの表情を訝いぶかしむ王女を他所よそに彼は黙り込んだ。

クラウス王子の『グレイ』もシエリルファーナ姫の『シエリル』も名前として問題はない。極一般的ごく一般的なな庶民が使う名前だ。

だが、ソルデイス王子が使用している『ソリユード』は違う。それは特定の『意味を持つ名』で役目に準じる者以外が使用すること事態、非常に危ぶまれる。

直に接した印象で、『分ぶを弁わかめた頭まのいい王子』だと思ったのだが、彼はこのことを知らなかったのだろうか。

「シエリル、移動が開始するからルシエラーラに乗ってくれ。スターリング、馬車の手綱は頼んだ」

ケイシユンが何かを言おうとした瞬間を見計らってソルデイスが馬車の中の妹に呼びかけた。

彼女は兄からの指示に二つ返事で応えると、ケイシユンに向け一礼してからその場を去った。代わりにルアンリルを伴ったソルデイスが馬車に乗込んで来る。

「ちよつといいですか」

年若き王子はクラウスの傍で逡巡しているケイシユンを手招いた。動き出した馬車の、それも誰からも一番離れた場所まで誘ったということは自分たち以外に聞かれたくない内容なのだろう。

「まずは、ルアンリルの件、そして兄上の治癒の件、礼を言わせてください」

王宮の噂とは違い、優雅でその上何処か言い知れない迫力を持っている……それがケイシユンがソルデイスを見たときの所見だった。

「いや、別にルアンリルの脱出の件は俺も便乗させて貰っただけだし、彼の治癒ケイの件は本人に礼を言って貰う予定だからな」

砕けたケイシユンの物言いにソルデイスは少し目を細める。

常に笑っている王子だと聞いていたのだが、今の彼は上手く笑えないようだ。これも内乱のせいなのか、それとも笑う必要がなくなっただけだろうか。

そのどちらでも、王としての資質を感じさせるのだが、だからこそ、あの『名前』をわざわざ使う理由が判別できない。

「それよりも、王子に言いたいことがある。何故あんな『偽名』なまえを使っているんだ？」

あの『名前』は時守の中でも特定の役目を持つ者のための名前だ。かの一族はそれを『役目』を持たないものが使うのを許さない。

まして今は王族と時守の一族との間には修復するのが難しいほど深い亀裂が入っている。彼が『名前』ナミンを使用していることを時守側<sub>わらう</sub>に知られば、取り返しのつかない火種になる事は必至だろう。

「名前、ですか？」

そういえば偽名を聞いていなかった、とルアンリルはソルデイスに視線を向けた。

「サディア、グレイ、ソリユード、シエリル……ってつけた。今後呼ぶときは間違えないようにして欲しい」

順番に偽名を告げたソルデイスの言葉に、ルアンリルも彼の危惧を理解した。

確かにこれはまずい名前だ。それを王子も知らないはずは無いのに、なぜ、敢えてその名前を名乗るのか。

「王子、『ソリユード』という名前は……」

困惑する二人にソルデイスは小さく「大丈夫」だ、と呟いた。

「ソリユードは僕の真名の一部だ。正式にはリル・ソリユード・ソルデイス……解かっているだろうけど、許可しないうちは口にしないで欲しい。その名をどんな形で呼ばれても僕は相手を切らなくてはいけないから」

リル・ソリユード……『時を定めし者』の名前。

その名を持つ者が無限の時を支配すると言われ、彼の見た未来は『必ず』その通りに動く。それは人に関わらず、物や国や世界まで

に影響を及ぼすといわれ、時守の中でも『特別』な力として知られている。

『人の未来を操る悪魔・・・』

ルアンリルは今この時になり、やっとバルガス王の罵しりの意味が理解できた。

しかし彼とは違い、自分は彼を理解している。

あの王はソルデイスが能力を使い人間の運命を自由自在に変えるのだと信じていたが、ルアンリルは絶対にそんなことをしない知っていた。

むしろ、彼は出来る限り運命を見ないように心がけていたようだった。

「とりあえず、『定』<sup>リル</sup>の位置にある僕の存在では偽名を使用することはできない。

だから、真名の一部でもある『ソリユード』を利用しようと思う。そこだけならあまり制約も無いし、誰が呼んでも大丈夫だからね」  
本来ならば真名など他の人に使われないように隠し続けるのが定番だ。

しかし稀にその魂自体が強大すぎて『偽名』をつけられない者もいる。目の前の王子やルアンリル、ケイシユンのような存在だ。だがそれは本当に稀な存在である。

普通の人やある程度の役目しか持たないものは勿論、『替』<sup>ラル</sup>や『変』<sup>ディル</sup>のみたいに変質の位置に居る者ならばいくらでも偽名を利用する。

その辺りの普通の理は複雑な上に覆すことなど出来ない厄介なものである。

衝撃的な告白に顔色を変えている二人にソルデイスは何の感情も映さない瞳を向けた。

「それよりも頼みたいことがある」

自分の名前のことなどどうでもいい。魔術に関わる者や占術を行うものが聞けば簡単に判ってしまうことだ。

それよりも大切なことがある。

彼はそのために二人をクラウスやスターリングに声が届かない後ろの方まで呼んだのだから。

二人の視線が自分のほうに向くと彼は一つ息を吐いてから、年長の二人に頭を下げた。

## 第五十七話：意味を持つ眞名（後書き）

この世界では実名（本名）と眞名二つの名前を持っています。実名は親がつけた名前、眞名は魂に刻み付けられた名前です。

ソルデイスの持つ『リル・ソリユード』やフェルスリユートの持つ『ラル・ソリユード』は眞名になります。

この眞名を自分と同等レベルの魂の規模の人間に使われるとその人は運命を握られたと同然の状態になります。

だが、逆に下位のものが上位者の眞名を口に出して言うとな人あるいはその場に居る精霊に殺される可能性を秘めています。（本文中ソルデイスが切ると言ったのはこのせいです）

もちろん、本人が許可すればそれを呼ぶことも出来ますが、普通はあまり許可しません。

また、眞名の中には実名と眞名以外の名前を排除するものもあります。

ソルデイスやルアンリル、ケイシユンは実にそれに該当します。

ゆえに『ルアン』は略称のぐらいいしか偽名として使えません。

ちなみにウィルフレッドがルアンリルを呼んでいた『ルファイーナ』はルアンリルの眞名の一部です。

## 第五十八話：馬車の中の密約

頭を下げた王子に困惑する二人に、ソルデイスは潜めた声で頼み込む。

「あなたたちが王城で知ったことを黙っておいて欲しい」

それが「何」を示しているのか二人にはすぐ理解した。

そして彼が「彼」<sup>サイラス</sup>の出生の秘密を知っていることにも・・・

(当たり前・・・か)

ケイシユンはその事実をいち早く納得する。

目の前の王子が「時見」<sup>ソルデイス</sup>だというのなら、兄の過去・母の過去など手に取るくらい簡単に知ることができただろう。その上で父親からの疑惑の目を自分に向けさせていたに違いない。

それぐらいのことをやってのけるだけの頭脳と包容力を彼は持っている。

「もとより、話すつもりはありません」

ルアンリルは最初からそう心に決めていたようでソルデイスの願いに即座に答えた。こういう素直さがルアンリルの愛らしさの所以だと思つた。

「話すつもりはないが・・・隠しておくのか？」

「彼を、反逆者の子供にする訳にはいきませんから」

それは彼の中での決定事項なのだろう。

抑揚の無い言葉で告げられるそれらに、ケイシユンは「そうかと頷いて見せた。

話をそこで終わらせるようにソルデイスは今度は普通の声でケイシユンに話し掛ける。

「それよりも、先ほどの登場の仕方はなんですか？」

その問いにケイシユンは「おやおや」と嘆息した。

どうやらこの王子はルアンリルが知らなかった龍族の掟を熟知しているらしい。

「婚約したんだ、俺たち・・・」

「冗談は必要ないです」

肩を抱こうとしたケイシユンの手をルアンリルは叩き落とす。ソルデイスも顔を引きつらせた笑顔で自分の腰に携えている剣の柄に手をかけていた。

「ただ単に乗せてきてもらっただけです」

ルアンリルは顔を真つ赤にしながら、必死の思いでケイシユンの言葉を否定した。ここにはクラウスがいるのだそんな戯言で彼に誤解されたくない。

「まさか、ルアン・・・龍族の村でも彼の背中に乗ってないだろうね」

ソルデイスはそんなルアンリルの慌て振りに何となく不安になり問いただしてみた。

するとルアンリルは彼の言葉に少しだけ視線を逸らした。

「知らなかったんですよ。今ごろは族長殿ナリファが誤解を解いてくれます」

自分がクラウスと恋仲に近い関係であると告げてあるのだから、きつとあの優しい族長は誤解を解いておいてくれるはずだ。

しかしソルデイスとケイシユンはそんなルアンリルの淡い期待を打ち破くように呟く。

「解いてくれたら、いいね」

「そのまま放置するってこともあるから・・・」

ナリファがどれだけ誤解を解こうとしても龍族の長老が絶対に阻止するだろう。

もしかしたら実まことしやかに『事実』をでっち上げて精霊族の方に婚約を申し入れている可能性だってある。それが『次期長』という位置に引つ張り上げられてから見てきた、龍族の体質だった。

（それを思うと俺の父親おやじや義父殿ナリファの夫妻は本当に『普通の常識』を持っていてくれるよな）

『血』という理屈バシナルでしか自分たちを守れなくなっている龍族、彼

らにはケイシユンの父親が何故他の血を持つ者を選んだのか理解できないだろう。

淀みきった血・・・それが自分たちから龍としての聖体を紡げなくしていることにも。

(すべての一族が過渡期に入っている。おれたち龍族も、ルアンリルたち精霊族も、そして一角獣族も・・・)

龍族は聖体を作れるものが少なくなり、一角獣族は子供の絶対的な出生率が落ちていく。そして精霊族はエディン家以外、強い力を持つ魔術師を輩出することができなくなっていた。

そして各種精霊をあがめる神殿の台頭、王家の中に生まれた時見・

「僕たちの身の振り方は後で大將軍を交えて話し合おう。とにかくあの件だけは他言無用に」

ソルデイスはもう一度念を押すと、揺れる馬車をものともせず身軽に立ち上がり、手綱を握るスターリングの元へと移動してしまっ

た。  
「いろいろと食えない奴が多いと思ったけど、ソルデイス王子はそれ以上だな」

ソルデイスが御者席へと移動したのを見届けてから、ケイシユンは喘ぐように呟いた。

感情を一片たりとも映さない瞳、あれが本気を帯びたときどのように輝くのか正直、見るのが怖い気もする。

「そうですね」

ルアンリルもケイシユンの意見に同意した。

まだ幼い肩に全ての責任を負ってしまった王子・・・彼のこの先のことを考えるとルアンリルは心配せずには居られないのだった。

## 第五十八話：馬車の中の密約（後書き）

別名、主人公復活週間・・・やっと主人公が主人公らしくいっばい出てくれました。

王国迷走編は誰が主人公なのか迷走する話でしたので作者としてもこれでやっと落ち着けます。

後、もう少ししたら王国迷走編も終り、国土鳴動編へと移行します。早く16〜17歳のソルデイスが書きたい。

## 第五十九話：別離の宣言

砦の中では宴の準備が始まっていた。

砦の人間たちは誰が到着したのかわからない状況だったが、將軍自ら出迎えに向かったことで到着したのが位の高い人間であろうと判断したのだ。

実際、馬車に乗り現れたのは王都から脱出したばかりの聖長と龍族の次期長という話を聴きつけ、砦やそれを取り囲む城塞の町は活気に湧いた。

砦の中に連れてこられた客人はそのままガイフィードの執務室へと移動した。そこは大きなテラスから砦の町・ブロージエカが一望できる場所にあった。

ソルデイスは部屋に入ると適当な椅子を引つ張り窓際に陣取った。その瞳は町から、外へ・・・自分たちが最初にいた場所・王都に向けられている。

部屋の中にはソルデイスを始め、部屋の主人たるガイフィードと補佐のストラウム、聖長・ルアンリル、龍族のケイシユンというメンバーが揃っていた。重傷を負ったクラウスはシエリルファーナとスターリングの付き添いのもと、砦内の医療施設に運ばれている。

外から聖長と龍族の来訪を祝う声が引つ切り無しに聞こえてきた。その声は王子の耳にも届いているだろうが、彼は僅かの反応を示さなかった。

「よろしいのですか？ソルデイス王子がここにいと知れればもつと士気はあがりましょうに」

ストラウムは当然湧き上がってくる疑問を思い切つてソルデイスに進言してみた。ソルデイスは椅子に座つたままの状態で見上げると、どこか面倒くさそうに説明をする。

「僕がここにいといるということはここが重点的に攻撃されることの証明みたいなものだ・・・それよりも聖長と龍・・・砦の守りを強固

にする二人の登場のほうが民衆も受け入れやすいだろう」

「いずれ此処から蜂起ほじきするにしても、今はまだその時ではない。

「即座にディナラーデ卿に対して攻撃はなさらないつもりですか」  
ソルデイスの言葉を受けてガイフィードはそう結論づけた。

すぐに戦を始めるというのならここにソルデイスがいることを当然民衆に知らせるはず。それをしないのはこの内乱を暫く静観するということになる。

「時期がまだ満ちていない。今のまま内乱を鎮めたところで、また同じような事件が起こるだけだ。せめて王族としての成人・・・18歳になるその日まで僕はこの国を取り返すべきではない」

森の中に閉じ込められている父親バルガスのこともある。

自分が王座に継いだ反動で森の結界が解かれれば、あの男は自分の権利を主張しソルデイスの補佐となりあの誕生日の前夜に計画していたことを行うだろう。それでは王国を取り戻す意味は無い。

「民衆に長く内乱の苦しみを与えるおつもりか？」

ストラウムは鼻白みながら王子に問いただす。

やはりこの王子もあの国王の息子なのだ。民衆のことを考えていない。彼には目の前の無表情の王子に不満を持ち始めていた。

「父上の治世があの人々が死ぬまで続くのを民衆が望むのなら今すぐにでも兵を立てるけど？」

王子の言葉にストラウムはぐつと言葉を詰まらせた。

確かにそんなことを民衆は望まないだろう。特に謂れの無い理由でこの辺境の最前線まで送られたガイフィードとその部下たちはそれを一番実感させられていた。

ソルデイスはそれだけ言うと言葉が椅子から立ち上がった。それから二人の遣り取りを黙ってみていたガイフィードの傍まで歩を進めた。  
「でも僕がこのままここに留まればそれも出来ない。僕はここから一人で離れようと想っている」

「そうですね、その方がよろしいでしょう」

ソルデイスの言葉にガイフィードも頷いて見せた。

前々から聡明だとは想ってみたがここに来て本来の彼の姿が明らかになったようだ。

「何を言ってるんですか!？」

しかしその言葉にルアンリルが異論を唱えた。

折角安全な場所まで辿りつけたのに何故この王子はそれを放棄しようとするのだろうか。

「もともと王都を出る時から決めていたんだ。ルアンリルが間に合っつてよかった。これで二人のことを任せて、僕は旅立てる」

ゆるぎない決意の言葉にルアンリルは瞠目した。

もう王子の心を動かすことはできない。自分の不甲斐なさに下唇を噛みながら、ルアンリルは視線を床へと落とした。

## 第五十九話：別離の宣言（後書き）

もともとソルデイスは一人で行動する予定だったので、兄と妹を信用できる人の元に届けたら姿を消します。

勝手な発想ですが、彼が傍に居ることによって彼らが王子・王女とばれることを少なくするための措置でもあります。

## 第六十話：王女の嘆き

成り行きを黙って見ていたケイシユンはガイフィードの傍に立つソルデイスに問い掛けた。

「旅に出るって、どこに行くつもりだ？」

「ベネシエンドです。あそこでは随時、兵役志願者を募集していると聞きましたので、そこで仕官先を紹介して貰おうと思っています」  
ベネシエンドはリディアでも南のほうに位置する要塞都市だ。砦の大きさは今居るブロージェカより少し劣るものの、その兵の多さはここにも負けていない。

都市を守るのはガイフィードとも親交のあるオージェニツク卿だ。彼もバルガス王に適当な理由をつけられて地方に飛ばされた貴族の一人である。その性格は勤勉実直であり、質実剛健な部分と才色兼備の部分を兼ね備える人物だった。

「オージェニツク卿ならディナラーデ卿の内乱に共鳴することもない。そして何よりも僕の顔を知らない」

事を起こすその時期まで自分の居場所は最小限の人にしか知られてはならない。それでもここにいる4人とスターリングぐらいには告げていかないといけないだろう。

「通行証と紹介状を作ってくださいか。『ソリユート・アドラム』という名前で」

クラウドが使う姓と別の姓を用いてまで、完璧に兄弟たちと決別する。それが今の自分が選択すべき道なのだ。

「なんなの！なんなのよ、それ！兄さままで、私達と離れるつもりなの！？」

叫んだのはクラウドの元にいた筈のシエリルファーナだった。

彼女の後ろではスターリングが「すまない」と手を合わせて謝っている。

どうやら彼女たちはクラウドが目覚めた事を知らせに来て、ソル

デイスが通行証と紹介状を欲しいと言っているのを聞いたようだ。

サイラスに続きソルデイスまでもが離れて行くことに少なくない恐怖を感じていた。このまま全員がバラバラになってしまうのではないかと不安になった。

「ごめん、シエリル」

ソルデイスは短く謝ると呆然と立ち尽くしている彼女の横を擦り抜けた。

シエリルファーナがその腕を掴もうとするのを横にいたスターリングが止める。文句を言おうと振り仰いだ彼女に、彼は無言で首を振った。

スターリングには彼の考えが少しだけ理解できた。

彼らがいったい何に追われているのかまでは判らない。だが、彼が王国を守るはずの騎士に狙われているのは事実だ。そして今回の兄の傷を見た彼が彼らと袂を分かち決心をするのも・・・必然のことだろう。

少なくとも彼は兄妹を守ってくれる人の元まではちゃんと同行した。その力量を判断した上で、彼はこの砦に彼らを託したのだ。

この別れで辛いのはシエリルファーナではない。

そんな答えしか出すことが出来なかったソリユードのほうが辛い思いをしている。

第一、彼女はソリユードに文句をいえる立場には無い。自らを守る術を持たず、戦場で彼らに守ってもらっただけの立場の人間には守る立場の人間が出した答えに反論する余地など与えられていない。

「スターリング、これから僕は兄様のところにこれを話してくる。後のことは頼んだ」

ソルデイスはそれだけ言い残すと部屋を出て行ってしまった。残された6人の上になんともいえない沈黙が残される。

「えつと・・・君は何者かね？」

最初に気を取り直したのはガイフィードだった。流石に年の功を重ねてきただけあり、このような状況でもそれほど慌てている感じ

も無かった。

「精霊の森、ラベレット村の住人でスターリング・キャレットと言います。騎士にしてもらいたくて3人と一緒にこちらまで来ました」  
スターリングは空いているほうの手で敬礼してみせる。

片手になった拘束にシエリルファーナは再度の脱出を試みるが、その腕はびくともしなかつた。

「放してよっ！」

「だめだっ!!！」

強く言えば放してくれると想っていたシエリルファーナはスターリングにきつぱりと断られその大きな目に涙を溜めた。

「守られているだけの君がソリユードの決定に口を挟むことはできない。もし、それを否定できるとすればグレイだけだ」

言い聞かすように告げられた言葉に彼女は大粒の涙をこぼしたの  
だつた。

## 第六十話：王女の嘆き（後書き）

とうとう60話にまで達してしまいました。

こんなに早く登場する予定でなかったスターリングと当初ちよい役のつもりで書いたケイシユンが中々出張ってくれます。

## 第六十一話：見抜かれた思い

ソルデイスは一人で医療施設までの道を歩いていった。

自分の去った部屋からは泣いているシエリルファーナの思念がずっと伝わってきている。スターリングに頼んできたが彼にはまだ早すぎただろうか。

それでも自分は一人で離れなければいけない。自分の持つ『狂乱の星』が誰かに影響を及ぼさないようにするためにも。

とぼとぼと歩きながら、医療室の前につくとそこにはクラウド独特の明るい緑色のオーラが存在した。

あの男そっくりの容姿を持ちながら、自分みたいに呪われず誰からも愛される王子。彼の持つ瞳と同じ色のオーラは常に人に明るい気持ち植え付けてくれる。

本当ならば自分や父のように歪んだ人格の持ち主ではなく、彼のような人が王位を継ぐべきなのだろう。彼ならば民を大事にし、国土を豊かにする力量を備えている。

ソルデイスは小さく笑うと医療室のドアをノックした。

中から明るい女性の声が出て、ドアが開かれる。現れたのは白衣に身を包んだ朗らかな感じの女性だった。年のころはグラントと同じくらいだろうか、医療に携わってもう何十年も過ごしているベテランとしての貫禄があった。

「どのような御用？」

「あ、ここに兄が・・・グレイ・エイセスがいるはずなんですけど」

ソルデイスがそういうと彼女はぱあつと顔を明るくさせ、通りやすいうちにドアを大きく開いてくれた。

「ああ、今日、運ばれてきた男の子だね？聖長たちの魔法で大分回復しているよ」

目の前の少年がどことなく意気消沈しているのを、兄が大怪我を

負っているからだろうと勘違いした彼女は、安心させるようにソルデイスの頭を撫でた。

彼女が示すほうを見ると、クラウスは普通に起き上がっており弟の姿を認めて手を振る元気もあつた。

「大丈夫？」

ソルデイスはとりあえずクラウスのベッドまで行くとその傍に置いてあつた丸椅子に腰掛けた。

「ああ、それより・・・ルアンリルが来ているって？」

いつもどおりの明るい口調で、クラウスは普通に話を進める。

そのことに肩の力が少しだけ抜けたが、逆に話を切り出すタイミングを逸してしまった。

「うん、龍族の若君の背に乗って派手に登場してくれた。兄上の怪我の殆どはこの二人が治したんだ」

とりあえず、兄の振つた話題にのるつもりでルアンリルの登場シーンに兄に教えてやる。

クラウスはソルデイスの話を聴くと眉間に皺を寄せて、「うーん」と唸り声を上げた。

「それって・・・誤解されないか？」

様々なところを自由気ままに旅行するクラウスは以前、龍族の里の近くまで行つた事があつた。

その近くの宿屋の親父は1/8が龍族の人間でその風習などに詳しくあつた。その中の一つに聖体の状態の龍の背に乗ることの意味も含まれていた。

「あ、知ってんだ……ルアンリルは知らなくて、龍族に誤解されたって」

「ははは」

知らないと思つていたのだが、どうやらこの兄は想つた以上に博識らしい。

彼はソルデイスの言葉に軽く笑つと「誤解をちゃんと解かないとな」と的を射た応えで返す。

とりあえず和やかな会話の後、ソルデイスはそのままの勢いで切り出した。

「ところで、兄上、これからなんだけど」

たぶん、クラウドもシェリルファーナと同じように自分たちは離れないと想っているだろうと、考えていたソルデイスに彼はそのままの笑顔で問い掛ける。

「お前はどの町に移動するんだ？」

「……え？」

ソルデイスが驚きのあまりその視線をあげた。普段はセーブしている人の心を感じる力が解放され、クラウドの心の中が垣間見えた。「お前が俺たちと共に旅をする目的は、この皆に俺とシェリルを連れてきたことで終わっただろう？」

ならば次にお前が考えるのは俺たちから離れることだ。ここに来る前に將軍と頼んだんだろ。身分証を作ってもらったことを」

いつもは見せない弟の驚いた顔にクラウドは静かに笑ってみせた。

第六十一話：見抜かれた思い（後書き）

ソルデイス、兄・クラウスが出来がよかったことに初めて純粹に驚いています。

ある意味、とつても失礼な奴です。

クラウスはソルデイスがどうしたのか、どうするべきかをわかっているのです、彼が負担にならないように笑って話をしてくれます。

## 第六十二話：病室での約束

ソルデイス自身王都を出る時には兄弟と離れるかどうか迷っていたはずだ。

しかし長兄サイラスが捕まり、あの村でソルデイスが泣いた時からクラウスはこの未来を予測していた。

それなのにここまで彼が付き従ってくれたのは、自分が今回のように大怪我を負う事を予知していたからかもしれない。

実際、彼がいてくれて助かった部分は多い。先にシエリルファーナをルシェラーとともに皆へと向かわせてくれていなければ・・・もしスターリングと自分だけで馬車を操っていたら、間違いなく全員があそこで死んでいただろう。

そして役目を果たした現在、ソルデイスが向かうべき選択みちは自分たちと別れることだ。

ソルデイスはこの戦いをきつと長引かせようとする。

バルガス父王の補佐が必要としなくなるぐらいまでは絶対に王位には就かないだろう。そうすることが王国のためであるし、彼が守ろうとする全ての人間のためでもある。

まだ守られる立場に居る自分には彼を止める手段はない。どんな手段で止めたとしても、彼の心をより一層苦しくさせるだけだ。

ならば、笑って送り出してやるのが自分の役目だと思う。

「お前のことだから、一人で・・・俺とシエリルに行き先も告げずに出て行くつもりだろ」

クラウスの鋭い指摘にソルデイスは視線を落とす。

全てが凶星だった。それなのに兄は激昂したりせず淡々と言葉をつないでいく。

「お前が選んだ道がそうになっているのなら、仕方の無いことだと思う。だがせめて一年に一度ぐらいは俺たちの元に顔を出して欲しい・・・それが最低限の条件だ」

このまま兄弟一緒に過ごせないというのなら、せめて逢いに来て欲しかった。ソルデイスが無事に生き続けている事をどういう形でも知っておきたかった。

ソルデイスはその申し出に少し戸惑った。本当はクラウドスにだけなら行き先を告げて大丈夫だと思っている。

だが、彼の口からシェリルファーナに自分の居る場所が知れるのがまずいのだ。

彼女はまだこの内乱の本質がわかっていない。それに父王がどれほどのことをやってきたのかも理解できていないだろう。

だからこそ素直にソルデイスを止めることも出来るのだが、その素直さが仇になる可能性は低くない。

「半年に一度の手紙じゃ、だめかな」

出した答えは自分の中でも妥協できる範囲の提案だった。

「手紙だったら、3ヶ月に一度だ」

クラウドスもその辺りが妥協のしどころだろうと弟の提案に乗った。ソルデイスはクラウドスの案に「わかった」と返すとくるりと踵を返した。

「すぐに発つのか？」

クラウドスの言葉にソルデイスは振り返らずにこくと頷いた。

「通行証が出たら、すぐに出る。少しでも時間は惜しいから」

ソルデイスはそう言い残すと病室を出て行った。クラウドスは笑顔で手を振りながら彼の足音が遠ざかるのを聞いていた。

「ふ・・・はは・・・」

笑っている自分の頬を温かい液体が伝う。

「はは・・・」

笑っているつもりなのに、声が震えてしまった。

クラウドスは振っていた手を布団の上に落とすとぎゅっつとそれを握り締めた。握った拳の上に透明の液体が降り注いだ。

（どんな時でも笑い続けるって、こんなに辛いのか）

それをソルデイスはもつと幼い頃から自分自身に科して来た。

笑って送り出したつもりだったがどこまで平静に笑っていたか覚えていない。話している間もどんどん引き裂かれるように痛くなっていく心に自分は何度負けそうになっただろうか。

（せめて・・・せめて・・・こんな傷を負わないぐらいに強くならなくては）

どうどうと胸をはって守る立場だと示せるぐらいには強くなりた。そのためには習う武術ではない、実戦を経験しなくてはいけないだろう。そうでなければいつまで経ってもこんな所で悔し涙を流しつづけなければいけない。

クラウスはぎりつと唇をかみ締めた。血の味が口内に広がったが、それが逆に自分のしなくてはいけないことを思い出させてくれる。

（強くなるう・・・全てを・・・せめて自分の中に居る者を守るだけ強くなるう）

クラウスは何度も心の中でそう繰り返しながらベッドの中へと潜り込んだ。

今は、止まらない涙を誰にも見られなくなかった。

## 第六十二話：病室での約束（後書き）

やっと上げることができました。62話目です。

この話を書いている時、4度もキータッチのミスで何度も文章を消してしまうというポカをしてしまい、終いには何を書いているのかも思い出せないぐらい落ち込んでしまいました。

私としては2度目に書いた文章が気に入っていたような気がします。  
・ ・ 思い出せないけど。

明日、明後日とまた忙しいので、次の更新は月曜日です。

## 第六十三話：一つ目の決着

ソルデイスの通行証はその日の内に完成した。

『ソリユート・アドラム』

そう刻まれた名前に指先を這わせながら彼はしつかりとそれを自分の中に刻み付ける。ソルデイスは馬車に乗っている荷物の中から必要最低限の物だけ纏めた。

そして、まだ翌日の朝が開けきらぬうちに砦の出入り口へと向かった。

門の前には早朝の出立を察していた將軍とストラウム……それと馬を連れたルアンリルが待ち構えていた。

「街道を行くのに徒歩は無謀。馬は必需品です」

將軍がそういうとルアンリルが心配そうな顔をしながらもソルデイスの手から奪い取った荷物を馬に括りつけた。掛ける言葉が見つからないのか、二人とも終始無言だった。

門の前にはいつの間にも現れたのかケイシユンが佇んでいた。彼は一人旅立つ王子に、静かに頭を下げる。馬に荷物を括り終えたルアンリルも彼に倣って頭を下げた。

ソルデイスはそんな二人の姿に申し訳なさそうに笑って見せると手馴れた動きで馬に跨る。

「それじゃ、二人をお願いします……」

ソルデイスは短く言い残すと馬に鞭を入れる。

それと同時に馬は嘶き、砦門から駆け出した。軽快な足音があたりを響く。彼はただ夢中に街道に向けて馬を走らせた。

砦を出てどれくらい走らせただろう。砦から自分たちの姿が見えなくなる位置でソルデイスは徐おもむきに馬を止めた。

「まだ、残つてるとは・・・思いませんでしたよ」

彼の言葉に附随するように近くの物陰から数人の兵士が現れた。先ほどの騎馬を有す騎士とは違い、こちらはどちらかというと傭兵の要素が強い気がする。

「気が付いているとは思いませんでしたよ、王子？」

兵士の一番後ろから現れたのは貴族然とした男だった。ソルデイスはその顔に見覚えが合った。サイラスを捕らえたあの男だ。

「オーランド卿・・・でしたね」

彼はそういうと馬から下りて、左手で剣を構えた。ソルデイスは大きな目をすうつと細め、睨めつけるように全ての顔を確認する。

「あなたはあの時、一座に居たそうですね。私としたことが見落しましたよ」

オーランドは昨日の騎士たちとの乱戦を見なかったのか、侮つたような態度でソルデイスに臨む。

ソルデイスは口元に笑みを浮かべると流れるような動きで兵士の群れの中に切りかかった。

鮮やかな動きが男たちの身体を薙ぎ払い、腕を切り落とす。その間も王子の顔は少しも変わらず、口元に笑みを浮かべていた。

「惜しかったですねオーランド卿・・・本当に目の前にいたのに僕を捕まえられなくて」

嘲りの言葉にオーランドの頬に朱が走る。彼の怒りを受けて残りの兵士たちが次々にソルデイスに切りかかる。

しかし彼はその切っ先を悉くかわすと、そのまま向かってくる体を自らの剣の餌食として屠つていった。

「あの時、クラウス兄上は用心棒たちと外で寝ていた、シエリルは踊り子さんたちに隠してもらっていた・・・そして僕は占い師の格好をしていたんですよ」

頬についた返り血を手の甲で拭い去りながら彼は静かにあの時のことを説明した。

その間でも剣の動きは止まず、一人、また一人とオーランドが率

いてきた兵士は討たれていった。

「あの時の・・・」

たしかにサイラスを連れ出す時に占い師の『少女』が駆け寄ってきた。造作の整った顔立ちの、少し表情の乏しいその少女・・・それは今の王子と同じ顔だった。

オーランドが驚愕している間にソルデイスの剣は最後の兵士を捕らえた。

彼は及び腰のままソルデイスに切りかかる。しかし一閃の動きで彼は男の息の根を止めた。

ソルデイスはそこで一つだけ息をつく、オーランド卿に向き直った。

「せつかく助けてもらったグランテに悪いから・・・僕たちがあそこにあったことを知っている人間には死んでもらわなきゃ、ね」

ソルデイスはそういうと無邪気な笑顔で彼に笑いかけた。

オーランドはその表情を見て、かつて王バルガスが言っていた言葉を思い出した。

『末王子は化け物だ』

その言葉が今、現実となつて目の前に居た。目は何も感じないように澄み切った状態で、無限の笑みを浮かべ、返り血を浴びながら自分へと向かつてくる者。

オーランドは逃げ場を探したが見つからず、やがて恐怖に慄き、奇声を上げてソルデイスに切りかかった。

王子はそんなオーランドに驚くことも無く剣を閃かせる。

勝負は一瞬にして終わった。

喉笛を掻き切られた男の体が絶命し、他の死体の上へと倒れてゆくのを王子は何の感慨も見せずに見送る。

彼は一旦、剣に付着いた血を手馴れた仕草で払うと静かに辺りを見回した。

「全滅・・・させないと、ね」

ソルデイスは敵兵の一人が落とした剣を拾い上げると、言葉の通

りに僅かでも息のある兵士の命を絶っていく。

「これだから・・・悪魔、なのかな」

すべての息が絶え、その場にある者が自分自身になったのを確認すると彼は小さく自嘲してその場を去っていった。

## 第六十三話：一つ目の決着（後書き）

誰も見て無い時のソルディスはクラウドスなど較べ物にならないくらい強いです。

彼は味方がいる所では怖がられる・奇異の目で見られるのを恐れて、実力を出し切る事ができません。

精霊の森の中で一人生き残らせたのは、自分の汚い部分を兄弟たちに見せないためと、彼の未来を見て命がすぐに絶えることを『定めた』からです。

修正に辺り、見送る人を少し替えました。

スターリングが將軍たちと聖長の中にいるのはおかしいので、ケイシユンに入れ替えです。

スターリングのやっていた部分をルアンリルに、ルアンリルがやっていた部分をケイシユンへとスライドしました。

## 第六十四話：時守の里の開放

砦を出てから10日を過ぎた頃、ソルデイスは最初の目的地である時森の入り口へと到着した。

一人になつたらすぐに赴おもむこうと決めていた場所だ。

森は時見として自分が結界を張った時よりももっと強い・・・まるで呪詛のような結界に包まれていた。

森の外側には常に時の精霊・森の精霊を中心としたすべての精霊エレメントが行き交い、少しでも森に踏み入れようとする者がいれば、凶暴な手口で排除していた。

ただ時の守護符や時守の民は森からはじき出されるだけで怪我を負わされる事はなかった。

その様子を暫く見ていたソルデイスは小さく溜息をついた。

彼は全て人が諦めて帰る姿を見送ってから、本来森の中にある里へと通じる道があつた場所に立つてみた。

とたんに精霊が彼を排除しようと集まってくる。

『ワレラノ……憎シミ…… ……失ツタ……奪ワレタ』

狂つたように言葉を紡ぐ精霊の頭をソルデイスは軽く撫でてやる。

『コノ手ハ……時見リル……ドノ？』

一人の精霊が呟くと一斉に精霊達がソルデイスの前に集まってきた。彼らはソルデイスの身体に触れることで少しずつではあるが正気を取り戻してゆく。

「星替にいさんの死は僕にも伝わっている。父王あのおひとをここに捕らえてくれて、ありがとう」

バルガスがこの森に閉じ込められたことにより、ソルデイスは内乱を治めるまでに5年間の猶予を得ることが出来た。この猶予期間を無駄にせず『彼』を凌ぐほど強くなれば、呪いの成就是なくなる可能性も出てくるはずだ。

「ただ、里に通じる道だけは確保しなければならない。この奥に

いる僕が守るべき人たちを飢え死にさせるわけにはいかない」

馬車の中から遠隔操作で修正しようとした時は失敗したが、この場にいればそれほど難しいことではない。自分が姿を現せば、精霊達はソルデイスの思念をきちんと理解してくれる。

「森は閉じたままでいい……時守の力を持つ者と『星替』か『時見』の護符を持つ者だけここを通すようにしよう」

折角閉じられている森を開放することなど愚の骨頂だ。精霊たちも彼の心を理解し、道を作るための準備を開始する。

「すべての時とすべての精霊を司りて結界を修正する……円環は時空を歪め、通じし道は『能力』又は星替か時見の護符を持つ者だけに通行を許可する……『ラムル・リエ・フアード時空転換魔法』」

重々しい詠唱とともにソルデイスの身体は金色に光り輝く。

その光は精霊達の存在と交じり合い、森全体を包んでいった。

森の外で起きている異変に一番最初に気がついたのは里長だった。大きな時の魔法が森を包むように発せられる。彼が驚いて外に出ると同時に感知能力が強い時守の里の民が一斉に顔を出していた。その様子に気付いたのか、感知能力の低いものや、彼らとともに過ごしていたロシキスの王子たちも外へと出てくる。

「何かあったのですか？」

ヘンリーが村長に尋ねると、彼は森の方を見ながら頷いた。

「森の外に『時見』様が見えられている……どうやら孤立したこの里と外界との道をつなごうとなさっているようだ」

その言葉に様子を窺っていた村人たちが一斉に歓声をあげた。

里は霧の影響であまり食物の育ちはいいほうではないし、結界が張られているため森に食料を取りに行くことも出来ない。

いくら備蓄としての食料が用意してあるとはいえ、いつ明けるとも知らぬ森の結界に少なからず不安を抱いていたのは確かだった。

まして助けしてくれるのは自分たちの一族を救うとされる『時見』なのだ。盛り上がるなというほうが無理である。

「もうすぐ、あそこの空間だけが開く……そうすればこの里も前のように外界と行き来できるだろう」

ヘンリーはその言葉を聞いてほっとした。

『星替』であるフェルスリートをむざむざ死なせ、精霊達が境界を張る原因を作ってしまったという罪への呵責が彼にはあった。

もしこのまま閉じ込められ、食料がなくなったときにどうすべきか、唯一空を飛ぶルートを持っているレティアと話し合ったりもした。

不意にふわりと匂いの違う風が吹いた。

「ああ、もう道が開いた」

村長の言葉に全員が胸を撫で下ろし、その道を通ってくるだろう人を待ち受けた

## 第六十四話：時守の里の開放（後書き）

森の結界はそのまま道を開いて、その右と左に出来た空間の切れ目をえいやつとくつつける・・・そう言う作業を彼は精霊の力を借りてやりました。

一種のワープみたいなものと考えてください。

ちなみにソルディスは全力で精霊魔法を使うと、髪の毛が元に色に戻ってしまいます。

## 第六十五話：王子の旅立ち

ソルデイスは道が里まで達したことを感じ、ほつつと息を吐いた。もう一度、通路の精度を確認してから強大な精霊魔法を使った所<sup>た</sup>為<sup>め</sup>に元に戻ってしまった金髪を再び黒へと変化させる。

彼は一度だけ森を眺めてから、傍に繋いでおいた馬に跨り森に背を向けた。

本来なら時守の里に顔を出していくべきだろうが、今はまだロシキスの王子たちと再会するときではないという判断が彼の中で働いた。

「後はあいつがなんとかするよな」

定まった時しか見えない自分には現在の星<sup>ひと</sup>の位置がはつきり確認できる訳ではないが、あの森の中での惨事後、ロシキスの王子たちが里に入った過去<sup>すがた</sup>は見える。

ならば里の中に幼馴染みの王女がいる可能性は高いだろう。

もしも竜で出かけていたとしても義姉<sup>きょうだい</sup>弟が残っているのだからすぐに戻って来るはずだ。

ソルデイスは最後にもう一度だけ道が安定したのを確かめるとベネシエンドの砦へと向けて出発したのだった。

星見である時守の里の長は去ってゆく『時見』の星に小さく溜息を漏らした。

この里の者でも『時見』と『星替』<sup>そのあに</sup>の素性を知っているものは少ない。

だが逆にバルガス王が行った虐殺の記憶を持つ者は多く居る。

その里に彼が気軽に顔を出してくれるなどと甘い考えは持ち合わせていなかったが、実際、去っていくその星を見ると悲しい気分に

なってしまう。

「里長殿・・・」

同じく星見の者が『時見<sup>かれ</sup>』が去っていくのに気付き、不思議そうに彼を見つめてきた。

「あの方はすべきことをして、去られた。あの方の中では今はまだこの里に立ち寄る時期ではないのだろう」

里長はそれだけ告げると開いたばかりの道に向かって歩き出す。

森に近寄ってみると時の精霊たちが少しでは有るが正気を取り戻し、こちらにぎこちない笑みを向けてきた。彼らは彼らなりに閉じ込めてしまったことを反省しているようだ。

開放された道には前に森全体に仕掛けられていた霧の結界よりも、もっと緻密でもっと強力な『結界』が張られている。

運が良ければ辿り着けてしまうという間違いが起こらないように通り抜けれる者を限定してある。

「これで外に出られるようになりましたが、王子たちはどうなされますか」

彼らにとり自分たちが異質な異邦人でしかないことをヘンリーも理解していた。

だが記憶を無くした状態の姉を連れて内乱勃発で混乱しているリディアで潜伏することも貴族達の悪意が渦巻くロシキスに戻ることもできない。

「今しばらく、ここに置いて下さい。出て行く時は、義姉の判断を仰ぎます」

幼い王子の判断に里長も「それがいいでしょう」と答えてくれたため、彼らは一時的とはいえそのまま滞在する権利を得たのだった。

時守の里で魔法を掛けてもらい茶色の髪を得たレティアは近隣の村でいろいろな情報を仕入れていた。

長い髪を無造作に後ろで縛り、薄汚い格好をしている彼女を王女だとわかる人は居ない。誰もが王都から戦火を逃れてきた一般階級の少年だと勘違いしてくれた。

そんな彼が買い物しながら話を聞けば、大抵の人間は訝しむことなく喋ってくれる。そのお陰で普通の役人では聞けないようないろいろな情報を得ることが出来た。

（王子たちのうち、捕まったのはサイラス王子のみ・・・その王子は『光姫』とよばれるウィルフレッドの妹を連れて逃亡、その折にルアンリル殿と龍が逃げ出している）

どういう経緯で光姫がサイラス王子と逃げることになったのかは判明しないが、同日にルアンリルと龍族の青年が暴れたのは王子達を逃がすための陽動に違いない。

「それじゃ、一旦、時守の里に戻ろうか」

レティアはそういうと傍にいた馬の背中をぽんと叩いた。少年のみすばらしい格好とは対照的な立派な白馬はその言葉に一度だけ嘶きをあげた。

『買い物はすんだのか？』

義姉弟を匿ってくれている里の人たちへの生活物資を大量に背中に積んだ馬は、彼女の脳に直接質問を投げかけた。

「ああ、馬に化けてもらってすまないな、ルシル」

馬はその言葉に構わないとでも言うように鼻を鳴らす。竜かのじよに取っ  
てみれば大切な王女きんじょうの頼みなど苦痛ではないようだ。

『それよりも、私を狙っている一団がいる』

「ああ、村の傍のあの茂みですべてどうにかしよう」

注意を勧告する国竜ルシルウイリアに王女は残酷な笑みを浮かべてみせた。

## 第六十五話・王子の旅立ち（後書き）

この後が本当の意味でのソルデイスの旅立ちになります。  
レティア姫は買出しのために時守の里にいなかったようです。

## 第六十六話：時守の里の異変

大方の予想通り、村から見えず誰にも干渉を受け難い茂みの中に入った途端、後ろから着いてきた一団が彼女の前にその姿を現した。見る限り普通のちんぴらのようにみえる。

馬に変身したルシルヴィリアを横から搔つ攫い、転売する目的のようだ。

「お前みたいな奴にそんな立派な馬、いらないだろ」

青年たちの中でもリーダー格と思しき者が彼女の前に踏み出した。彼には彼女が精霊の森の集落から買出しに来ている下位層の少年に見えるらしい。

「ついでに荷物と金も貰ってやるよ、感謝しろ？」

男の一人が馬に手を伸ばそうとした瞬間、レティアは俊敏な動きで剣を抜き放った。その鋭い閃きは馬に伸ばされていた腕を見事に切り落とす。

「ぎゃっ！！」

不恰好な声をあげて彼女の手前で倒れた男にレティアは冷酷な笑みを送る。

「今、私は気が立っているんだ・・・少しだけ時間をやるから剣で切られて死ぬか、竜の炎に焼かれて死ぬか決めてくれるか？」

その言葉と同時に馬はぐんぐんとその身体を膨張させ、銀色の鱗を持つ巨大な竜へと変化した。銀色の巨体はとりあえず、荷物の位置を羽で調節した後で目の前に転がっている男を踏み潰した。

「さん、に、いち」

歌うように告げられる数字に彼らは最後の『逃げ出す』という選択肢を選び取った。

「ゼロ」

レティアの最後の掛け声とともにルシルヴィリアは白く輝く猛烈な炎を吐き出した。炎は木々の合間を縫い、彼女たちにちよっかい

をかけようとした男たちを飲み込んだ。

「うわああああああつ！！！！」

断末魔のような叫びが森の至る所からあがる。彼女は叫びをあげている男たちを開けた顔で見ると、炎を吐いている竜の首の部分をぽんぽんと叩いてやる。

「お仕置きはそれくらいでいい」

その言葉と同時に竜の口から吐き出されている白色の炎は止まった。それと同時に炎に包まれていたはずの男たちの身体が崩折れる。どうやら気を失っているようだ。もともと彼女たちは竜の身体に触れようとした人間以外は殺す気などない。

「しばらくしたら目が覚める。私たちはさっさと里へと向かおう」  
レティアはそばにいるルシルヴィリアにそう告げると銀色の鱗を纏った背中へと慣れた仕草で騎乗した。

里に戻ると村は出発前とは違いどこか違い活気に満ち溢れていた。

『境界の形が変わっている・・・』

里の上空を旋回していたルシルヴィリアは知らず知らずに眩きを得た。

レティアにはルシルヴィリアの言葉の意味がわからず、暫く不思議そうにしていたがいつまでも上空を旋回しているわけには行かないのでいつもどおり村の中の広場へと降り立った。

「ああ、王女。戻られたんですね」

ここ暫くで親しくなった村の娘が気軽にレティアに声をかけてくる。その手には村特産の絹の反物が抱えられていた。

レティアが聞くと、彼女はそれを行商にでる恋人の荷物に入れてもらうために運んでいる最中だと答えた。

「どうしたんだ？ いったい」

だが聞いてみたところで能力の薄い予知見予知見でしかない彼女はただ

「道が通れるようになった」としか答えない。

(道が通れる・・・?)

森の結界が外れたのだろうか。

しかしそれならあの結界に囚われている男が出てくる危険性を村が警戒するはずだ。彼女は真相を知るために、ルシルヴィリアの背から村長に届ける荷物だけ下ろすと一路いちろ彼の家に向かった。

「えーいつ！やあっ！！」

村長の家に近づくくと少女の気の抜けるような掛け声とともに木刀を打つ音が響いてきた。

どうやらルミエールが村長の家の傍で剣の練習をしているようだ。彼女は記憶を失った状態で目を覚ましてからずっと、強くなるための努力を始めた。彼女にその理由を聞いても、「きつと元からそうだった」とどこか男っぽい口調で答えるのみだ。

「あ、レティア。帰ってきたんだ」

荷物を持って駆けてくる義妹に気付いたルミエールは満面の笑みで彼女を迎えた。

レティアもそれに笑顔で答えると、有無を言わず彼女の手を握り村長の家のドアを開けた。

## 第六十六話：時守の里の異変（後書き）

暫くぶりにレティア視線での話の展開です。

普通に馬で移動していればレティアとソルデイスの再会はあったの  
でしょうが、上空ではあまり騎馬等は見つけられないようです。

（以前、馬車をみつけられたのはそこに『能力を押さえていないソ  
ルデイス』と『神馬をつれたシエリル』そして『クラウド』が居た  
ためです）

## 第六十七話：予知見の姫の警告

レティアが里長の所を訪ねると、彼は待ち構えていたように彼女たちに椅子を勧めた。

「いったい、何があつたのですか？」

お茶が出揃うのを待ってからレティアは目の前にどっしりと構える村長に疑問をぶつける。

彼は淹れたての茶を啜りながら「まあ、落ち着いて」とレティアを制してみせた。

「僕たちもしつかりとしたことがわかつているわけではない。森の外に時守の一族の頂点ともいうべき『時見』様が現れ、空間を歪めて森の境界を残した状態で道を開通させてくださった。それだけしか判らぬ。

何故、彼が里に立ち寄りなかつたのか、そしてどこへ去つていったのかすら皆目、見当がつかぬのです」

村長の言葉にレティアも驚いて見せた。フェルスリユートが伝説とまで言われていた『星替』というだけでも十分な驚きなのに、それ以上に存在を疑われている『時見』までもがこの時代に生まれているとは思ひもしなかつたのだ。

「つまり、この里はもう外界とは遮断されていないわけですね」  
端的に理解したルミエールに村長は少しだけ考え込んだ。

「完全に、ではありません。あの道は時守の能力を持つ者のみを通すように設定されています」

おそらく、普通の護符を持っている程度ではあの道は通れないだろう。

彼女たちがもっていた『星替』が作った護符ならば通れる可能性はあるかも知れないが、以前の森の暴走から踏まえてそう易々と試すことなど出来ない。

「時が、満ちていません・・・」

不意に村長の家の置くから少女の声が響いた。3対の視線が一斉にそちらへと向けられる。

出てきたのは自分たちよりも僅かばかり年下の少女であった。

長い白金の髪を有し、琥珀色の瞳の少女はレティア達に近づく。

「時が満ちてなかつたからこそ『時見』も『王女達』に逢わずに旅立たれたのです」

「予知見の姫」

村長は驚いたように彼女の元へと駆け寄る。

そして厳かに彼女の手を取る彼女を導いた。どうやら彼女の目はあまり良くないらしく、彼女は導かれるまま彼の隣の席へと座った。「お初にかかります、竜の方々。私はオクタヴィア。時守の中でも予知見を統べております」

「レティア・リストラルだ」

「ルミエール・フィネアだ」

いつもどおりの口調のレティアと、彼女を真似たような口調で挨拶するルミエールに目の前のオクタヴィアはもう一度頭を下げた。

「時が、来ていないというのは？」

一通りの挨拶を済ませると、レティアは待ちきれない様子で彼女に問いただした。

「今、ルミエール様、ヘンリー様をリディア、ロシキスどちらに戻したとしても確実に悲劇が起こります。あの方が行動を開始しない間は、彼女たちをこの里から出すことは許可できないのです」

断言をする彼女にレティアは少しだけ安心した。レティアもまたオクタヴィアと同じ意見をもっていたからだ。

しかし、レティアの横で聞いていたルミエールは心外そうにオクタヴィアの意見に不平の声をあげた。

「許可が、できないって・・・」

他の人たちだって気楽に外に出て行く準備をしている。同じ兄弟のレティアだって、自分の竜を使い外へ出かけているのに何故自分と弟だけが出てはいけないのだろうか。

「レティア姫、『星替』様の護符をこちらに渡してくださいませんか？」

ルミエールの文句を無視し、オクタヴィアはレティアに申し出た。レティアは少し険しい顔をして彼女に向き直ると横に首を振った。「あれは、私が管理する。あなたが許可するまで私が責任を持って保管する・・・それではいけないだろうか」

オクタヴィアは彼女の意見に丁寧<sup>ていねい</sup>に頭を下げると、自分の役目は終わったとばかりに席から立ち上がった。

「レティア様、お頼みます・・・そして、ルミエール様、あなたはその日が来るまで更に武術の腕を上げておいてください」

(その時期<sup>みらい</sup>が来た時に『時見<sup>あのかた</sup>』の足手まといとならないように)

最後の言葉は飲み込んで、オクタヴィアは部屋を後にした。

殆ど光を読み取らなくなってしまうた自分の目に今でも残る光の姿。彼の隣に立つことが許される彼女たちに嫉妬がないといえ、嘘となる。

(だからこそ、強くなってください)

正直に、そこまで言うことの出来ない自分の醜<sup>へきえき</sup>さに辟易<sup>へきえき</sup>としながら、オクタヴィアは自分の住む庵へと戻っていった。

後に残された王女達は彼女の態度に疑問を覚えつつも、自分が知りたい部分を聞いたことに満足して村長の家を辞した。

「これは、預かっておく」

村長の屋敷を出たところで、レティアはルミエールの首に掛かったままだった護符を取り上げた。

「大丈夫なのに」

不満そうに口を尖らせるルミエールにレティアは「約束したからな」と言い聞かせた。

取り上げた護符は手の中できらきら光っている。それはあの悪友<sup>ソルティス</sup>

の髪の毛の色にも似ていた。

(悲劇というのは、何なのだろうな)

このまま記憶を失ったままの彼女を自由にさせる事などできないのは理解できる。それに伴う『悲劇』も想像できる。

だが、自分が想像している『悲劇』と彼女が予知<sup>み</sup>している『悲劇』は本当に一緒なのだろうか。

第一、彼女も村長も何かを隠している。隠した状態でルミエールとヘンリーに「剣を取れ」という。

(考えても詮無いことか・・・)

レティアは一つ重い息を吐くと、広場で待たせたままだったルシルヴィリアの元へと戻るのだった。

## 第六十七話：予知見の姫の警告（後書き）

ルミエールの恋敵<sup>ライバル</sup>！？登場です。

今回の話は生むのに大変苦労しました。

途中、放棄してさつさと違う場面になってやるうかと思ったのですが、なんとか長い状態で生み出されました。

何とか書き上げましたが、現在、修正候補の第一候補のお話・・・もう少し、話し全体が見渡せるようになったら真っ先に修正せねば、と思っています。

## 第六十八話：宿場町での諍い

ソルデイスはただ一人、街道を駆け抜けていた。

目指す街・ベネシエンドは南方のレナルドバードとの防衛ラインとともに、交易地としても栄える豊かな都市だ。

南に下るとともに王都から批難してきたと思われる商人たちが、徐々に街道を埋めてきていた。

商人たちはだいたいソルデイスぐらいの年齢になれば一人で行動することが多く、彼が一人で馬を走らせていても誰も見咎める人間はいない。いとすれば、彼らが主人から預かっているだろうお金を巻き上げてやるうとする悪徳商人や、見目よい子供をレナルドバードまで連れ帰り、奴隷として好事家に売ってやるうと考える違法な奴隷商人だ。

特にソルデイスが警戒したのは奴隷商人だった。

彼らにとり、たった一人で旅をしている『見目麗しい少年』ソルデイスは絶対の獲物として映るらしく、何度も捕獲されそうになった。

もちろん、彼はそれをすべて撃退してきたが、撃退すればするほど用意される人数が増えてきて、彼は正直辟易としていた。

（地図からすると、後3日は皆まで掛かる。町に入れば今ほど治安は悪くないはずだし、兵として志願さえすれば『騎士団』としての名前が僕を守ってくれる）

南方から滅多に出てこないオージェニツク卿とは全く面識が無いから、王子としての庇護もないだろうが今はそれのほうありがたい。

（問題はレナルドバードからの取引人の方が・・・商人は顔を覚えるのが得意だから気をつけないといけない）

自分の特徴である父親譲りの水色の瞳を隠すために、彼は王都を抜けてから伸ばし始めた前髪をできるだけ顔の前に垂らして外を歩くようにしている。

(いつまでも、悩んでいても仕方ないか)

ソルデイスは地図を荷物の中にしまつと、階下にある宿屋の経営する食堂へと降りていった。

食堂では宿に止まっている人間は勿論、地元に住む村人やベネシエンドから派遣されたこの地を統括する兵隊も居た。

彼らは一様に酒盃を傾けており、適度にできあがっている状態だった。

ソルデイスは酔っ払いを避け、カウンタに向かうと宿屋の主人の前に腰をおろした。

「すみません、何か食べるものを」

「あいよ」

宿屋の返事は景気のいい返事をする。鍋の中でぐつぐつと煮えているシチューと、焼いたばかりの肉、それに固焼きのパンをソルデイスの前に出してくれた。どうやらこれがこの宿のメインメニューのようだ。

彼は木のスプーンでとりあえず始めてみる。トマトと数種類の野菜をブイヨンベースで煮込んだそれは初めて食べる味だったがソルデイスの舌を満足させる出来栄であった。

「おいしい」

「あつたりまえだ、坊主」

ソルデイスの呟きを聞きとがめた主人が胸を張って自慢する。

ついで出された肉も一切れ食べる。これもおいしい。北部では貴重なスパイスも、産地であるここでは日常使いでふんだんに使われている。それなのに肉の味を損ねないとは、驚きの限りだ。

ソルデイスはそれらの料理を勢いよく食べ始める。

「坊主は食べ方が上品だな」

宿屋の主人の指摘に、ソルデイスは顔を引きつらせながら「そ・

・そう?」と問い返す。自分では気付かなかったが、彼の食べ方は市井の少年のそれと異なっているらしい。

(そういえば、スターリングの食べ方は少しワイルドだったよな) ああいうのが、普通の少年の食べ方なのだろうか。

今まで、一座の人間にも將軍にも指摘を受けなかったので気付かなかったが、これは気をつけないと自分で自分の首を絞めてしまいかねないと、改めて実感した。

とりあえず、ソルデイスはスターリングの食べ方を思い出し、食器の持ち方から替えてみた。それからがつつと食事を食べ始める。と、そのときだった。

「きゃあっ!!」

後ろで少女の悲鳴があがった。振り返ると給仕をしている少女の腕を兵隊が掴んでいた。

「また、あいつらか」

宿屋の主人は一言呟いて、カウンターを出る。ソルデイスは一旦、食事を止めると騒ぎが始まったほうへと視線を向ける。

兵隊は宿屋の主人にいちやもんをつけながらも、少女の身体にいやらしく手を這わしている。少女は顔を真っ赤にさせながら、涙を流していた。

「とりあえず、手を離してやってください」

「ああ!?!こいつは俺の服に水を掛けたんだ、俺が連れて行っても構わんだろっ」

兵隊のがなる声が店の中に響いた。

彼はしこたま酔っているようで周りの目など関係無しに少女へといやらしい行為を再開する。

宿屋の主人が慌てて止めようとすると、いたずらをしている兵士の取り巻きと思しき兵士が彼に向かって剣を抜いた。

「その手、放したら?」

ふいに少女を捕らえていた兵士の後ろで声がした。宿にいた全員が目がそちらを向く。

そこには先程までカウンタで食事をしていた少年・ソルデイスが抜き身の剣を兵士の首元に当ててている姿があった。

「いい大人が、少女を撫でまわす趣味とは最悪だな」

怒りに満ちたソルデイスの声に、兵士は少女から手を離す。少女は少し乱れた衣服を治すと宿屋の主人の後ろに隠れた。慰めている姿からして彼らは親子のようだ。

「貴様っ！俺を誰だと思ってるんだっ！！」

剣を首元に当てられた兵士は自分にそれをしているのがかなり年下の少年と知ると大きな声で恫喝する。

しかし彼はそれに全く臆する様子もなく、冷めた瞳で「誰？」と訊ねかえした。

第六十八話：宿場町での諍い（後書き）

ソルデイス、なかなか砦につけません。足踏み状態です。

その上、ロリコン兵士に喧嘩を売ってます。襲われている少女は15歳ぐらいの女の子を想像しながら書いています。

## 第六十九話：南の町の暗雲

自分が誰なのかを知らない少年を、彼は鼻先で馬鹿にする。

「なんだ、貴様、旅人か？ 行商人か？ それとも、この容姿だからレナルドバードの奴隷商人から逃げ出した商品かあ？」

明らかに馬鹿にした口調でものを言う中心的な存在の兵士に、周りの兵隊たちも一斉に嘲る笑いをばら撒いた。

そんな兵士たちの行動などどうでもいいかのように、ソルデイスは感情の無い声で自分の目的を述べる。

「今からベネシエンドに行つて兵役志願をする剣士だ。ガイフィード將軍の紹介状を持つてる」

彼は自分の懐に手を当てると、悠然と笑つてみせる。

周りを威圧するかのような笑みに、周りの兵は少し怯んだ。

「オージェニツク卿の元に入るつもりで来たけど、あなたがたのような人間と同じ『兵』と見られるなら別個の砦に志願するほうがいいのかもね」

自分の意見を述べたソルデイスは、とりあえず彼の首に当てていた刃を下ろした。

首元に刃を当てられていた兵はその甘さにほくそ笑みながら、自分よりもずっと小さな少年に向き直った。

「俺はオージェニツク卿の副官・ランズール伯爵の甥でフライアンテ子爵だ。」

オージェニツク卿の元に行くつて言うなら、俺たちの部下にならつていうわけだな。だったら雑兵に兵職の厳しさを教えてやるう」

自分の名前に畏怖するだろうと思つていた少年は、「それが、なに？」と言わんばかりの目で彼を見ていた。

フライアンテはそれに腹を立てると、自分の言葉どおりに力を見せつけるために自らも抜刀をしようとした。

「おやめください、子爵」

彼の行動を嗜める声が宿屋の入り口から響いた。

そこに現れたのは『子爵』と呼ばれた男よりも10歳ほど年上にみえる男だった。彼は大股で彼に近づくと、柄に掛かっていた子爵の手を外す。

それから飄々としているソルデイスに向き直り、

「ガイフィード將軍の紹介状を持っていると言ったな？本物か？」と、確かめた。

ソルデイスは当たり前だとばかりに懐にしまっておいた紹介状を示し鷹揚おつように頷いてみせる。

ソルデイスの返事に彼は深く頷くと、不貞腐れた顔をした子爵に耳打ちした。

「ガイフィード將軍の推薦状を持つ者に手を出せば、いかなランズール伯といえどフォローできませんよ」

「……ちつ」

お目付け役とも思える男の言葉に忠告され、舌打ちしたフライアンは興が削がれたとばかりに取り巻きの兵隊をつれて宿屋を出て行った。

お目付け役の男は迷惑料とばかりに多目の金額の金貨を机に置く和一礼してその場を去った。

後に残された宿屋の主人は剣を鞘に収めた少年に向き直る。

「君も無茶をするねえ」

「……勝算はありました。僕もあいつらみたいに威を借るところがあつたから」

彼はそういうと少しだけ苦笑して見せた。

「あ……あ……ありがとうございますっ！」

先程まで恐怖に震えていた少女は父親である宿屋の主人の影から姿を現すと自分を救ってくれた少年に深々と頭を下げた。

「あの人たち、この町でいつも問題を起こしているんです。オージエニツク卿はすごくいい人なんですけど……」

どうやらオージエニツク卿には問題は無いが、組織の内部には問

題が蓄積しているようだ。

ソルデイスはそれだけ頭に入れると再び食事をするためにカウンタに戻った。宿屋の主人はソルデイスのクールな態度に少しだけ肩をおどけたようにすくめてから自分の持ち位置であるカウンタの中に戻る。

「ほい、これはお礼だ」

宿屋の精進はソルデイスの食べかけの皿の上に更に焼いた肉を乗せてやる。ついでにこの地方では有名なデザートもおまけにつける。ソルデイスはきよとんとした顔でそれを見ていたが、すぐに「ありがとう」とぼそりと呟いた。

第六十九話：南の町の暗雲（後書き）

ソルデイスは案外、いろんなところで女の子を守っては惚れられています。

彼は女の子には優しいですから。

随分と日にちを空けてのupとなってしまうました。

とりあえず、今は『完結』と銘打ってある作品を修正する作業をしていますので、それが終わればもう少し早くupできると思います。

## 第七十話：街道での待伏せ

翌日の朝にソルデイスは宿を出ると、真直ぐベネシエンドへの道を取った。

上手く走れば暗くなる前には皆へと到着できるだろう。昨夜の諍いのこともあるのでソルデイスはいつもよりも気を引き締めながら、馬を走らせていた。

朝早くの街道はそこそこの人間で賑わっている。王都での内乱などこの地には関係ないのかもしれない。

「へええ、いい馬乗ってるじゃねえか」

ふいに追越をかけてきた騎馬が、ソルデイスに声を掛けた。

と、同時に周りを取り囲むように昨日の兵士がソルデイスの騎馬の周りを囲む。

ソルデイスは仕方なく馬の脚を止めると、あきれた視線をフライアンテに投げつける。

「昨日の従者の人も言っていたけど、僕に手を出すのは得策じゃないと思うけど？」

見る限り、昨日、彼らを止めたお目付け役の人間はいなかった。それゆえにこのような愚かな行為をするのかとソルデイスは妙に納得した。

「確かに、お前がベネシエンドに辿り着いたらやばいが、この国からいなくなれば問題なんて起こりゃしないさ」

フライアンテの言葉を示すように兵たちの後ろには何度もソルデイスを捕らえようとしていた奴隷商人たちの姿が見えた。

「それは、確かにそうかもね」

ソルデイスは嘆息しながら、剣を抜き放つ。

左手でそれを構えると馬の間合いを持って、襲い掛かるタイミン  
グを計る。

兵たちはニヤニヤ笑いながら、実力も定かでない小さな獲物を屠ほぶ

るために縄や棍棒を構える。

どうやら本気で生け捕りにするつもりのようなのだ。

「さあ、捕り物劇の始まりだっ！」

フライアンテの下衆げすな掛け声とともに兵たちは一斉にソルデイスに飛び掛る。

ソルデイスは的確に襲いくる棍棒や縄を薙ぎ払ってゆくが、数の上の不利が次第に目立ってくる。

(まずいな、殺すよりもやり難い)

ソルデイスは内心、悪態をつきながらベネシエンドへの突破口を見出そうと躍起になる。

そんな彼の視界にまた更に兵が駆けつける姿が見えた。

(万事窮ばつじゆうすか・・・仕方ない)

ソルデイスは一つ溜息をつくくと、剣の持ち方を替える。

そしてそのまま襲いくる男の身体を薙ごうとした。

「そこまでだっ！」

その声は後から来た一団から掛かった。

ソルデイスは男の身体の手前で剣を止めると、新しく来た騎士団の方に振り返る。

一方、フライアンテは顔を蒼くしながら、その軍団を見つめていた。

「いったいこれは何の騒ぎだね。フライアンテ子爵」

「オージエニツク卿・・・これは、その」

軍団の長らしき男性ががっしりとした壮年の部下を従え、事の子細をフライアンテに問い詰める。

ソルデイスが軍団を見ると、昨日、フライアンテを止めた男が壮年の部下の後ろに控えていた。

どうやら男の報告を受けて、ベネシエンドからオージエニツク卿が部下を引き連れて自分を迎えに来てくれたようだ。

フライアンテはしどろもどろになりながら言い訳にならない言葉をオージエニツクに報告している。

壮年の部下・・・副官のランズール卿はソルデイスに近づくと、優しい笑みで話し掛けてきた。

「すまんのう、バカな甥が迷惑をかけた」

「いえ、僕も態度が生意気だったのかも知れませんが」

聡明な口調で謙虚な答えを返した少年にランズールはますます目を細めた。

「いやいや、少年ぐらいの年なら生意気ぐらいが丁度よい。だがあれだけ育ってしまったては・・・せめてそなたの一分でも頭脳を持ってくれれば後継者として指名もできるのだがな」

ランズールはそういうと未だに棒にもひつかからぬほどくだらない言い訳をしている甥へと視線を向けた。どうやら身内であるランズールの注意など聞き流してしまうフライアンテの性格を考慮し、軍団の長であるオージェニツク自らの叱責の形にしているようだ。

「ガイフィード將軍の紹介状を持っている少年というのは貴殿か？」

ようやくフライアンテを叱るのにきりがついていたオージェニツクはランズールと歓談しているソルデイスに声をかけてきた。

「はい、ソリユート・アドラムといます」

丁寧に頭を下げた少年にオージェニツクは馬を下りるとソルデイスの騎馬に近づいた。

ソルデイスも慌てて馬を下り、随分と背の高いオージェニツク卿の顔を一度見上げてから再度頭を下げた。

## 第七十話：街道での待伏せ（後書き）

久しぶりの更新です。タイトルも、話の内容からでひねりもありません。

この部分はあまり考えていなかったため書いては消し、書いては消しかなり時間がたってしまいました。

よく考えてみたらもうすぐこの章も終りです。

次の章『国土鳴動編』はこの話から3年後の話になります。

その前に前の章とこの章の文章に一旦修正をかけていきます。

## エピローグ：辿り付く場所

オージェニツクはソルデイスと視線が合うように腰をかめると掌を差し出した。

彼は慌てて自分の懐を探り、ガイフィードに作ってもらった紹介状を差し出す。受け取ったそれをオージェニツクはさっと眺めると改めて目の前の少年に笑いかけた。

「どうやら、大將軍は君のことが心配だったようだね。何度も『よろしく頼む』と書かれているよ」

「嬉しいです。僕と同時に志願した友人はブロージェカですぐに見習いに慣れたのに、僕は急にこちらのほうへと行くように言われましたので」

できるだけ真実を曲げないように話を進めながら、ソルデイスは置いてきた兄妹と友人・知人の顔を思い出す。

「それは、たぶん君の剣の技術が飛びぬけていたからだろう」

オージェニツクは目の前の少年の慰めるようにぐりぐりと撫で回す。

どうやら彼は自分のことソルデイスを気に入ってくれたようだ。掌を通じて豪快だが温かい気持ち<sup>ソルデイス</sup>が伝わってくる。

「君が入隊したら、私つきの騎士団の見習として入ってもらおう。君の腕があれば叙勲もすぐだ。期待しているよ、ソリユード・アドラム君」

「ありがとうございます」

あくまでも丁寧な物腰で礼を言う少年に、年長者の二人は改めて目を眇めた。

もしかしたら、この子供は名のある貴族の子弟かも知れない。すべての動作に上品さが窺えるし、頭に入っている知識は一般階級の子供よりも高い。

オージェニツクがこの地に赴任して、十年近く王都には行ってい

なかったが、その間にデビュタントを済ませた子供の可能性は高い。だからこそその大將軍の紹介状なのだろう。

そして、この混乱した世界の中で彼を自分のところに置いておく  
とまずいと・・・

(・・・まさかな)

ふと、彼の脳裏にある人物の名前が浮かんだ。

しかしそれは、あまりにも目の前の少年とはかけ離れたイメージの『人物』で、その上、その人を大將軍が自分の所へよこすとは思えなかった。

「どうか、されましたか？」

副官が問う声にオージエニツクは自分の思考を振り払った。見ると『ソリユート・アドラム』と名乗る少年が副官の横で心配そうにこちらを見ていた。

「いや、なんでもない」

オージエニツクは自分に言い聞かすように言葉を返すと、少年を連れて自分の守るべき街へと帰路についた。

## エピソード：辿り付く場所（後書き）

中途半端な感じですが、これで第二章『王国迷走編』は終了です。もう少しこのまま続けようかと思いましたが、少年期のソルデイスでこれ以上は必要ないかと思い、切上げました。

第三章『国土鳴動編』は第二章の修正が終り次第開始します。

舞台は3年後、ソルデイスは16歳ぐらいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0544c/>

---

リディア王国物語 王国迷走編

2010年10月8日14時05分発行